生まれ変わって恐暴竜？

フランク・ホリガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生まれ変わって恐暴竜？

【Ｎコード】
Ｎ９６７４Ｖ

【作者名】
フランク・ホリガン

【あらすじ】
とあるマヌケな神さまのミスで、青年がしょうもない死に方をしてしまいました

申し訳なく思った神さまは、青年を、青年が望む世界に転生させることを約束しました

青年は大好きなモンスターハンターを選び、神さまはそれを承諾して、青年を狩りの世界へと転生させました

青年は期待感を膨らませ、いざハンター生活を開始する決意をしました

なのに……

は……ハンターではなくて、モンスター！？

しかも何故に恐暴竜イビルジョー！？

ユクモ村でハンターちゃんとの混浴の野望は！？

体デカくて入れない！

ポッケ村でキリン装備ハンターちゃんとの触れ合いは！？

当然無理！

触れ合うどころか、命を賭けた殺し合いになるわ！

第一話：転生

ふと目が覚めると、俺は真っ白の部屋にいた

どこまでも続く真っ白な空間に俺は困惑したが、結局夢だろうと結論づけてもう一寝入りすることにした

『夢やあらへんで。
ここはあの世とこの世の境目や。』

へぇへぇ、それはたいそうな夢ですね……って、誰の声？

俺はその場から飛び起き、声がした方を見ると、白装束のちっこい幼女が、杖を持って佇んでいた

『…お前今ウチのことバカにしたやろ？
ウチこう見えてな、神さまの一員なんやで？』

この歳で自分を神さまだと勘違いしてるのか…
そうだね、神さまはきっとどこかにいるよ

『お前信じてないやろ…。
まあええ、お前なんぞに信用されようがされまいが、ウチにはどうでもええしな。

さて、本題や。

実をいうとな、自分さっき死んだんや。』

なんだこのクソガキは…自分が今まで会ったなかで、最高に生意気だ…って今コイツなんて言った？

俺が死んだ？

『せや、自分がマヌケ面で寝てるはりに、タンスの角に頭ぶつけてお陀仏や。』

ハハハハ、この幼子は何を言ってるんだい？

俺はこんなにもピンピンしてるじゃないか

とか思っていると、神さまは俺に大きな鏡を向けて来た

その鏡に映った自分の体を見て、俺は心臓が飛び出るくらい驚いた

鏡に映っていたのは俺の人間の体でなく、黄緑色の火の玉みたいな物体だった

俺「ギャアアアア！
なんじゃこりゃー！？」

俺は絶叫して慌てふためき、その場をグルグルと走り回る（浮かび回る？）

試しにもう一度鏡を見てみたが、変わらず黄緑色の火の玉であった

俺「マジで俺死んじゃったの？
この若さで死ぬなんて、未練ありまくりだよ？

まだワンピ〇スの結末見てないし、ＦＦ全部クリアしてないよ！？」

『ちっさい未練やなぁ。
それもこれも、全部ウチが悪いんやけどな。
許したって？』

神さまとやらはいきなり俺に謝ってきたが、俺は分けが分からず戸惑う

さっきの生意気な態度と変わって、神さまはスゴく申し訳なさそうに謝罪してくるが、話しが分からないので事情を説明してもらう

『ウチら神さまの世界には、運命の糸っちゅう…まあ、命を繋いどく糸があんねや。
糸はそいつの寿命を迎えたら勝手に切れるんやけど、ウチが間違ってすっ転んで一本切れたんやわ…。』

俺「その一本が…俺の糸だったわけ？」

神さまはたいそう申し訳なさそうにこくっと頷いた

こんな有り得ない話しは信用出来なかったが、鏡で見た自分の姿と、さっき床にぶつかった痛みが、夢ではないことを証明していた

自分が死んだという実感を持てない俺だったが、胸に穴が空いたようなひどい喪失感を覚えた

神さまはそんな俺を見かねてか、ある解決案を持ち出してきた

『自分死んだのはウチの責任やからな…。
詫びとして、自分が大好きな世界に転生させたるわ！
こん中から選んでな！』

絶望に沈んでいた俺に、神さまは精いっぱいの笑顔を向け、どこからか風呂敷を取り出した

神さまは風呂敷の中身である、漫画やゲームソフトを雑にぶちまけた

あれ？どれもこれも見覚えあるぞ？
北斗○拳にるろ○に剣心、キン肉○ン、ＧＴＡにＦａｌｌｏｕｔ３だと？
全部俺の部屋にあったもんじゃねえか！

『おう、自分に合ったもんウチが選び抜いてきたわ。
参考になる現物あった方が、転生もしやすくてな！』

分かった…勝手に持ち出してきたことは不問にしよう…
だけど、選び抜いた作品全部物騒な世界観じゃねえかぁぁ！

北斗○拳…ラ○ウとサウ○ーに瞬殺されるわ！
るろ○に剣心…一太刀で斬られるのがオチだ！
キン肉○ン…悪○将軍に地獄の断頭台されるか、ネプ○ューンマンのクロ○ボンバーくらうわ！
ＧＴＡ…車パクって刑務所行きか！？

ってか、こんなの現実世界でもやろうとすれば出来るわ！
絶対やらないけど…
Ｆａｌｌｏｕｔ３…まだクリアしてないから分からんけど、変わらず物騒だ！

俺「他にもあったじゃないか！
穏やかな世界観のヤツとか、何より美少女がいるような作品が！」

『ん？　ウチの趣味や。』

俺の願望は神さまに一蹴され、俺はガックリとうなだれた
ふと、風呂敷の端に隠れていた未確認のゲームソフトがあった

モンスターハンターポータブル
人間であるハンターが、自分よりも大きく強力なモンスターを狩るという、俺が最もはまったゲームの一つだった
友人のすすめで俺は２ｎｄからやり始め、その後の３ｒｄまでかなりやり込んだ

これも他と同じように物騒といえば物騒だが、俺には大きな魅力があった

一部女性ハンターの装備が、とてもセクシーなのだ

２ｎｄから２ｎｄＧまではキリン装備に興奮し、なんと３ｒｄには混浴風呂があるではないか！

こんなにもおいしい世界を忘れていたとは！

俺は迷わずモンハンのソフトを引っ張り出し、神さまに見せつけた

『お、モンハンやん。

ウチもちょっとやらしてもろうたんやけど、けっこうおもろかったで！

ヨッシャ、これならウチもやりがいがあるってもんや！』

ヒャッホー！

モンハンの世界に行けるなら、現実世界の未練なんて砂の小粒ほどだ！

待ってろよキリン娘ちゃん！
ポッケ村からユクモ村に連れて行って、混浴風呂に入ってやるぜ！

『なんやよう分からんけど、えらい意気込みやな！
…せや、詫びの品追加するわ。
自分があっち行って苦労せんよう、身体能力その他もろもろ強くしたる！
ただチート臭いほどじゃなくて、程よく最強やから注意したってな？
ほな、眩しいから目瞑ってちょうだいな。
次目覚めたら…転生や。』

俺は言われた通りに目をつむると、全身が光に包まれてポカポカしていくのを感じた

そして、徐々に意識は薄れていった

『一仕事完了やな！

……しもうた！

何に転生さすか決めてなかったわ、どうしよう！？

まあええか、なんに転生したかて腕っぷしは強いさかい。

…さ、ナルガ倒しでも行ってこよ。』

第二話：スパルタ親父の息子

海にプカプカと浮かんでいるような、心地よい感覚を抱いてウトウトしていると、甘い感覚が一気に叩き落とされる

全身にだるさを感じながら目を開けるが、光が少しもなく、目には闇しか映らなかった

状況を確認すべく立とうとしたが、脳天が硬い壁のようなものにぶつかり、とてつもない痛みを感じた

しかしそのおかげで、壁のようなものに亀裂が入り、そこから明るい光が差し込んできた

「（一体何だってんだ？声の調子もおかしいし…。）」

この時俺は気づいてなかった
俺の喉から発せられたその声が、今まで使い慣れていた声ではないことを…

俺は亀裂が入った壁を蹴り破り、そこから頭を突き出した

周囲は白い岩石で覆われた、大きな洞窟だった

しばらく呆けて洞窟を見つめていたが、頭上から妙な音がしたので見上げてみると……

グルルルル……

凶悪な顔立ちで黒緑の体色をした、恐竜みたいなデカいモンスターが、唾液を垂れ流して俺を見つめていた

「（ギャアアアア！！
出たぁぁぁ！
いきなりモンスター出たぁ！）」

俺はその場から一気に飛び出すと、光の差し込む洞窟出口に一目散

に駆け出した

俺は足下の尖った石にかまわず、懸命に逃げたが、ちっこい俺はあえなく捕まって元の場所に戻されてしまった

（よ、よく見たらイビルジョーじゃねえかよ…。恐いよう、俺の転生人生いきなりお終いかよぉ！？）

俺は目の前の恐ろしいモンスターに恐怖し、ガタガタと震え上がっていた

イビルジョーは俺を保存食としてとっているのか、いたぶって反応を楽しんでいるのか、満足げに眺めている

どちらにしても、殺る時はひとおもいに仕留めて欲しかった

しばらくその状態が続き、イビルジョーが俺でなく、俺を含めたその周りを眺めていることに気付いた

恐怖でイビルジョーからなかなか目を離せなかったが、徐々に自分の周りへと視線を向けた

そこには、ゴツい形状の卵が、数個乱雑してあった

俺をエサにする気だ――そう思った時にはすでに遅く、卵にひびが入り始めた

『ギャー、ギャーギャー！！』

卵から次々とイビルジョーベイビーが誕生していき、金切り声のような産声をあげていった

イビルジョーの凶悪な面構えはしっかり受け継いでおり、お世辞にも可愛いとは決して言えない

俺は邪悪な赤子から後ずさりしていくが、背後の親玉を思い出し、反射的に振り返る

イビルジョーは子どもたちを満足げに眺めた後、わきにいる生け捕りにした草食獣を踏み殺す

そしてその肉を喰い千切ると、何故かその肉を俺とベイビーたちの間に放り投げてきた

たったいま殺したばかりの獣の肉は、新鮮な血が滴り落ちていた

しかしその時の俺には、何故かその生肉が、とても美味そうに見えたのだった

そして、抑えきれない食欲に俺は負け、がむしゃらに肉にかぶりついた

噛めば噛むほどに血が滲み出るが、それすらも美味に感じ、あっと

いう間に食べ終えてしまった

肉を食べ終えた俺に、イビルジョーは即座に新たな肉を放り投げてきた

俺の腹は肉ひとかけらで満足していなく、その投げられた肉をも食べようとしたが、頭が覚醒したベイビーたちが先にその肉にかぶりつく

目の前の食料を奪われた俺は、今まで抱いたことが内ほどの怒りを感じた

怒りに突き動かされ、肉を喰うベイビーに強力な体当たりを浴びせた

一匹が吹き飛ばされ、生まれたてのヤワな体に大きな衝撃をくらったために、首を折って絶命した

食事を邪魔された他の二体が怒るが、ほとんど残っていない肉を見て、さらに俺は激怒した

俺に襲いかかってきた二頭のベイビーの喉を、目にも止まらぬ速さで喰い千切る

俺は遺された僅かな肉を一口で喰い、あろうことか今殺したばかりのベイビーまでを貪り喰い始めた

三頭目を喰い荒らし始めた頃にようやく俺の食欲はおさまっていき、そして自分が口にしているモノを見て驚愕した

俺「（ウゲッ！何を喰ってんだ俺は！？
イビルジョーの子ども！？）」

喰い荒らされて臓器がバラバラになったベイビーを見て、俺は吐き気を催していたが、もっと恐ろしいことに気付いてしまった

俺が喰ったのは子ども、子どもには親がいる…
コイツらの親はイビルジョー、そしてそのイビルジョーは今俺の背後にいる

俺はバッと振り返ると、イビルジョーがとても嬉しそうに嘶き、さっき以上の肉を喰い千切ると、今度はくわえたまま俺に近づけてきた

やはり肉は美味そうに見えてしまい、その肉に食い付いてしまったが、今回は恐怖心が残っていた

肉を食べ終えた俺を、イビルジョーはいろいろな角度から眺めだした時折顔を近づけるが、匂いだけを嗅いで何もしない

イビルジョーの不思議な行動のおかげで恐怖心は和らいできたが、イビルジョーが何故自分を襲わないのか不安を覚えた

『（どうやら異常は無いらしい。

さて、よくぞ生存競争を生き延びたな！

肉を独占するだけでなく、兄弟を皆殺しにするとは……かつてない快挙だ！
俺は誇らしいぞ、息子よ！）』

このイビルジョー親父は生存競争をさせていたのか？
子どもが死んだってのに喜ぶなんて、頭イかれてるのか？

ん？　息子？
ナンダッテ？

俺が目をぱちくりさせていると、『水飲みに行くぞ』とか言って俺をくわえて拉致っていく

イビルジョー親父は河原に辿り着くと、俺を容赦なく落として、水をがぶ飲みし始めた

俺も喉が渇いていたので、ケツの痛みを我慢して水面を覗く

そして驚愕した

水面に映し出されてるのは、人間の顔などではなく、黒緑色の鋭い牙がならぶ凶悪な顔

そしてそれは、先ほど自分が殺したイビルジョーベイビーの顔立ちと酷似していた

まさかと思い水面から離れ、恐る恐る覗き込むが変わらずイビルジョーの顔が映る

試しに右を向いたり、首を傾げたりしてみたが、水面のイビルジョーはそれに合わせて動いている

混乱する頭を無理やり鎮めると、俺はその場に座って情報を整理する

俺死んだから、神さまが転生させてくれた

←

転生先はモンハンの世界

←

いきなりイビルジョー出現、俺が子どもを殺してしまった

←

そのイビルジョーが俺を息子と呼んだ

……え？俺ってハンターじゃなくて、モンスターに転生しちゃったの？

俺は水面の自分の顔、横のイビルジョー親父の顔を交互に見つめた

俺の淡い希望はどんどん崩れていき、酷な現実を頭が理解していく

「（あのエセ神！！
とんでもないモンスターに転生させやがって！！
どうしてくれんじゃぁ！！）」

俺は悔しさにものすごい勢いで地団駄を踏みまくる

そうしていると、背後からカサカサと何かが近づいてくる音が聞こえ、振り返ろうとしたら鋭利な何かで尻をひっかかれた

「（痛ってぇー！！
俺のケツを痛めつけるのは、どこのどいつだ！？）」

振り返って目に飛び込んで来たのは、甲虫オルタロスだった

なんだオルタロスか――と油断してると、また爪でひっかかれた

「（虫のくせに生意気だなこの野郎！！
あれ…結構素早いな。）」

ゲームでは一撃で粉々になるザコだが、実際に戦ってみると、チョロチョロと複雑な動きをしてくる

俺はオルタロスの動きに惑わされてクルクル回り、目を回して川に転んでしまった

『（虫相手になに遊んでるんだ…歩けるならついて来い。）』

イビルジョー親父はオルタロスをあっさり踏み殺し、洞窟がある方向へと進んでいった

イビルジョー親父の歩幅は俺と比べ物にならなく、走ってイビルジョー親父の後を付いていった

今俺は目覚めた洞窟に戻り、イビルジョー親父と向き合って家族会議みたいなものが始まろうとしていた

家族会議じゃねえぇぇ！！

そんな悠長なことしてられっか！！転生先がモンスターってどういう嫌がらせ！？

しかもよりによって恐暴竜イビルジョー！？冗談じゃない！

ユクモ村の混浴風呂で美女と入る夢は！？
体デカくて入れねえ！！

キリン装備のハンターちゃんと戯れ合うというのは！？
絶対に無理！
モンスターの俺がハンターに会ったら、戯れ合うというより、殺し合いになるわ！！

どうして俺なんか生んだんだクソ親父！！
俺の人生台無しじゃねえか！！

――とは威圧感たっぷりのイビルジョー親父に言えるはずもなく、
俺は心の奥で愚痴をこぼしている

『（――ビビりかと思っていたが、あんなに暴力的だったとはな！
チビの頃の俺とそっくりだ！）』

この親父は親を誉めてるのだろうが、ちっとも嬉しくはない

モンスターといえど、自分の兄弟を殺して喰ったのだから、罪悪感が物凄いある

今気付いたのだが、俺は何故イビルジョーの言葉を理解出来るのだろうか？

自分では普通に日本語喋ってるつもりだが、相手は俺の言葉を理解し、俺も親父の言葉が理解出来ている

転生する時にエセ神がいろいろ強化してくれたらしいから、たぶんそのおかげなのかな？

『オイ、俺の話しは最後までしっかり聞きやがれ！！』

親父は生まれたての俺を、容赦なくひっぱたいた

たぶん加減してくれたのだろうが、物凄く痛かった

そこからは、イビルジョー親父の自然界における哲学やらなにやらの講釈が始まった

…イビルジョーってこんなに賢かったの？

親父はまず最初に、俺を含む息子にさせた選別とやらの説明をしてくれた

選別は、生まれた子どもの中から一番強い子どもを見つけ出し、それを育てるというものらしい

そしてそれは、より強い個体を見つけ、種の繁栄のための儀式だという

中には、親の目に止まるような子が出来なかった時には、選別を生き抜いたとしても見捨てる場合もあると、教えてくれた

生まれた子どもを見捨てるなんて、酷い習性だと思うが、結果として凶悪なイビルジョーの数が制限されると思えば、しぶしぶ納得出来た

それから、俺も親父に対して質問を交えながら会話を進める

それによると、飛竜種や獣竜種といった大型のモンスターは、頻繁に見かけるものではなく、普段は人里離れた場所に棲んでいるらしい

古龍種に至っては、伝説のような存在であり、極稀にその痕跡を見つけられるくらいで、ほぼ人の目には触れない

自分が転生したイビルジョーという種は、個体数も少なく同じ場所に止まらないため、古龍ほどではないがとても珍しい存在なのだという

ゲームの感覚では、大型のモンスターを狩りまくっていたが、あれだけのモンスターが実際にいたら人間はお終いだ

そしてハンター自体も、やたらめったらいるわけではなく、多くもなく少なくもないという程度だ

それと余談だが、この親父は稀に見るバカだ

だって、生まれて間もない子どもが、まだ存在も知らない飛竜とかハンターの話しをするんだぜ？

それに何の疑問も持たないで、むしろ質問されて嬉しそうに答える

この脳筋バカの息子で俺は大丈夫なのだろうか？

俺は一抹の不安を覚えた

『（――とまあ、そんなことだな。
後のことはその都度教えてやるからよ。

さて、明日から俺がお前をビシバシ鍛え上げてやるから、今日のところはもう寝ておけ。

俺は狩りに行くから、てきとうな場所で寝てろ。）』

親父は言いたいことを言って、とっとと洞窟から出て行ってしまった

俺は途方にくれたあと、付近の枯れ草んかき集めてベッドを作り、
そこに横になる

ハァ……キリンちゃんの夢がぁ……混浴風呂がぁ……

俺は叶わなくなった夢を嘆き悲しんでいたが、肉を食べた満腹感と
様々な疲労感により、徐々に眠りへといざなわれていた

第二話：スパルタ親父の息子（後書き）

お次からイビルジョー親父のスパルタ教育が始まります（笑）

第三話：教育という名の暴力を受ける日々

おはようございます皆さん

イビルジョーに転生してしまった薄幸の俺です

今回はイビルジョー親父による、愛のムチと自然界に出るための特訓を実況中継したいと思う

はい、俺はイビルジョー親父の言い付けで毎朝早起きしています

起きてまずすることは……寝覚めの最悪な親父を起こすこと

簡単なことなのだが、命を落とす危険のある恐ろしい行動だ

「（親父…朝だよ、起きておくれよ。）」

『グガァァゴォォ……。』

う…うるせぇ
いびきかいて寝てるよこの親父…
このやかましいいびきで、何回眠りを妨げられたことか！！

今日こそ寝込みを襲って、ボコボコに……など未熟な俺に出来るはずもなく、俺は今日も優しく親父を起こすのだった

「（親父ィ…早く起きろよ。お日様が登っちゃうよ。）」

『（……っせぇ……朝っぱらからうるせえんだボケ！！）』

「ギャンッ！！」

寝起きの親父の尻尾をまともにくらい、俺の小さな体は軽々と吹っ飛んでいく

今日は割とラッキーな方だ
いつもならかじられたり、叩きつけられたり……最悪の場合には、ブレスを吐かれる時もある

『（もう少し穏やかに起こしやがれバカ息子）』

親父よ…お前はもう少し穏やかに起きやがれ

かすかに残る眠気を親父に吹き飛ばされた後は、近くの河川に出向いて水分補給と顔洗いに行くのだが、ここでも親父の暴力性が発揮される

まず親父が水浴びをするのを待ち、次に俺の番だが……

『（どうした、早くしろ。
見張ってやるから安心しろ。）』

いやいや、俺が一番危惧するのはお前だよ親父！！
リオレウスと対峙するより、アンタに背中を見せる方が恐ろしいわ
！！

――――とは言えず、俺は警戒しながら川で水浴びをする
警戒をしてると親父はそこらを徘徊して遊んでる……警戒を解き童
心に帰って水浴びに興じていると…

『（隙だらけだ息子よ！）』

親父は音もなく忍び寄り、俺を川に放り投げるのだ
川の流れは速くないが、親父は俺を深い場所へ的確に投げ込む
小さい体をばたつかせて岸に戻っても油断は出来ない

気を抜いていると、親父はまた俺を川に沈めるからだ

幸い今日のところは親父の追撃をかわせた

そして水浴びの次は楽しみの食事なのだが、まだチビの俺は親父に頼らなければ肉にありつけない

俺はいつも草むらに隠れ、親父の狩りを見つめている

親父の狩りはまさに圧巻だ

対象となる草食獣アプトノスを見つけ出すと、その巨体に似合わない速さで近寄り、驚くアプトノスを一噛みで仕留め、可能ならその場のアプトノスを全部仕留めてみせるのだ

親父が仕留めた獲物には俺の分もあるが、親父は俺に構わず肉に食いつく

俺は親父の仕留めた肉を食べにいくのだが、注意しなければならないことがある

それは親父がただでは食わせてくれないことだ

肉を食べようとすれば吹っ飛ばしたり、噛み付いてこようとする

俺は親父の攻撃をかいくぐって肉をとるが、モタモタ出来ないために微量の肉しかとれない

腹を満たすためには何度も突撃しなければならないが、これによって素早い身のこなしと、肉を瞬時に喰い千切る顎の筋肉が鍛えられる

そして食事を終えた俺を、親父は洞窟を進んでいって島の一番高いところにまで連れて行く

最近気付いたが、俺と親父がいるこの場所は《孤島》だということに気付いた

崖の上に来たら、1日で最も辛く痛い特訓が始まるのだ

親父は容赦なく俺を崖から蹴落とし、俺は堅い岩と尖った岩肌を転げ落ちていく

島の下にまで落ちれば俺の体はズタズタだが、すぐさま体を起こして再び島の最上部に移動する

途中にいるジャギィの群れをかわし、時には抗戦し、自力で親父のいる最上部に辿り着くのだ

もちろん親父が俺にねぎらいの言葉をかけるはずなく、言うことといえば『早く行け』だ

俺は再び崖から飛び降りていき、傷を増やしていく

それを1日に何回も行うのだ

過酷な特訓を終えた後は川で体を洗い、薬草を採取して傷を癒やす

すでに全身にはおびただしい傷跡が残るが、特訓を繰り返すごとに俺の体は頑丈になり、特訓でつく傷も少しずつ少なくなっていく

特訓が終われば腹が減ってくるが、今度は親父には頼れない

親父はジャギィを捕獲すると、俺と対決させる

親父がいるとジャギィがビビって使えないため、親父は洞窟の奥で様子を見ている

まだジャギィの群れに突っ込んで勝てるほど強くないが、ジャギィ一匹程度なら俺でも倒せる

狗竜『ギャオッ！！』

「（ジャギィ一匹なんか、チョロいもんだぜ！）」

しかし親父がそんなことを許すはずもなく、今日はジャギィを二匹投入してきた

さっきまでビビっていたジャギィは、仲間が増えたことで勢いづく

俺はかまわずジャギィの一匹に向かっていくが、別のジャギィがさせまいと俺に体当たりをする

ジャギィの体当たり自体は痛くないが、崖で出来た傷が物凄く痛い

ジャギィの素早い身のこなしに翻弄される俺は、徐々に追い詰められていくが、痛めつけられたことでフツフツと煮えたぎる感情が高まっていく

ジャギィが鈍くなった俺に噛み付いた時、それは爆発した

俺の筋肉が大きく隆起し、俺に噛み付いていたジャギィの牙をへし

折った

牙を折られて苦しむジャギィの喉笛に食らいつき、骨ごと食いちぎる

残ったジャギィは逃げようとするが、出て来た親父にビビり、引き返して俺に立ち向かってくる

「（よくもやりやがったな、これでもくらえ！！）」

俺は大きく息を吸い込み、内に溜まる怒りをブレスに変えた

親父のブレスに比べればまだまだ未熟だが、ジャギィ一匹を即死させるには十分すぎる威力があった

俺は倒した二体のジャギィを美味しくいただき、親父から今日初めてのお褒めの言葉をいただく

ここまでくると親父は極端に優しくなり、俺も残りの過酷な特訓が苦ではなくなる

特訓を全て終える頃には夕方となって、孤島は夕焼け空に変わる

特訓が終わると、親父は親を連れて孤島の探検に連れて行ってくれる

親父と並んでいれば、自分より大きいモンスターも逃げていくのだ

ドスジャギィやアオアシラは一目散に逃げ、ロアルドロスなんかは雌たちを置いて逃げ去っていく

俺はそんな光景が愉快で楽しく、何より厳しかった親父と並んで歩いているのが好きだった

人間の時だった俺には、飲んだくれで何もしない親父と、不倫を続けるお袋しかいなかった

親の愛情もありがたみも知らない俺だったが、俺は初めて親という存在を好きになれた

イビルジョー親父は厳しくもあるが、優しい親父であった

理不尽で暴力的な親父だが、一緒に特訓して、食事して…一緒に寝るこの親父が好きだし、親父も俺に精いっぱいの愛情を施してくれた

探検が終わった後は寝る支度をし、親父のわきで添い寝する

親の温もりを感じられる今が至福の時であり、その温もりに包まれながら俺はその日を終えるのだ

第三話：教育という名の暴力を受ける日々（後書き）

なんか最後、イビルジョー親父スパルタでも何でもなくなりましたね（笑）

さて、次回は主人公の二年後であり旅立ちの時です

何故二年後かって？
一年では短すぎるし、三年では長すぎる！！

誰もそんなこと聞いてませんね……

第四話：巣立ちの時

今日も穏やかな1日を迎える孤島

朝日が登り草食獣たちが餌を探しに歩き回り、それを狙う肉食獣も
目を光らせている

いつもの自然界の風景だ

そんな孤島の河川の一つに、緑色を基調とした極彩色の翼が降り立つ

妙な形のユニークなクチバシと鮮やかな羽を持つ、彩鳥クルペッコだ

このクルペッコは、最近この孤島にたどり着いた流れ者で、穏やか
な環境の孤島を気に入って棲み着いたのだ

クルペッコは川岸を移動し、餌となる魚を探していた

いつも魚を捕る時に邪魔をするジャギィたちもいなく、水流の音しか聴こえない河川に、クルペッコは満足していた

しかし、この彩鳥はまだ分かっていなかった

この孤島において生命の気配が消え去ったという意味を……

邪魔な肉食獣が消えた時、獲物の魚も一匹ずつ去っていき、クルペッコは少し苛立った

その時、背後で河原の石を力強く踏みしめる音が聞こえ、クルペッコは訝しげに振り返った

そこには、自分より一回りも二回りも大きな体躯の、一目で格上と分かる凶悪な竜が、今まさに自分を襲おうとしていた

驚いたクルペッコは後ずさりして転ぶが、そのおかげで竜の恐ろしい一撃から、即死することを回避した

ただ完全に回避出来たわけでなく、飛行のための片翼が噛み抉られた

彩鳥「ギャーギャー！！」

竜は苦しみに悶えるクルペッコのもう片翼を食いちぎり、その大木ほどもある尻尾でクルペッコを殴りつけた

クルペッコは二転三転して吹き飛ぶが、竜は息つく隙も与えず、飛びかかって体を押さえつけた

そして、竜はその禍々しい口を大きく開き、彩鳥を残酷に噛み殺した

俺はイビルジョーに転生して、初めて大型モンスターを仕留めた
正確には中型程度のモンスターなのだが…

イビルジョー親父にスパルタ教育を施された俺は、この二年の間に
逞しい成長ぶりをみせた

体の表面を覆う鱗と皮は、並大抵のことでは傷つけることなど出来
なく、その鋭く尖った牙と強靭な顎は、飛竜の堅牢な甲殻でさえも
噛み砕くにまで鍛えられた

さらに親父との特訓で気配を察する能力を強くし、人間の賢さもが
強力な武器となった

『（息子よ、手際よい狩りだったぞ！！）』

クルペッコを仕留めた俺のところに、イビルジョー親父が嬉しそう
にやってきた

俺の体はまだまだ親父にかなわないが、今では親父の半分くらいの

大きさだ

二年でこれだけの成長は驚きだが、イビルジョーが1日に食べる量を考えれば、この驚異的な成長にも頷ける

「（親父に教えてもらったとおり、翼をやってやったら簡単だったぜ！
一撃で仕留められなかったのが残念だけど。）」

親父に教えてもらったのは対飛竜戦法で、飛ぶための翼をまず徹底的に狙うことだ

翼を破壊出来なくても、転ばせて翼を踏みつけることもある

『（だがなかなか気配を消すのがうまかったじゃないか。
もっとも、図体のデカい我らにはちと無理があるがな！！）』

親父は大きな声で笑う

『（ほら、早速仕留めた獲物を喰えよ。
勝者の特権だ！）』

「（コイツは巣に持って帰って喰うよ。
それより…親父に話したいことがあるんだ）」

イビルジョー親父は俺の真剣そうな口調に気付き、笑いを引っ込めた

『（あぁ……一旦巣に戻ろう、そこで話しを聞く。）」

親父と俺は、クルペッコを引きずって巣の洞窟へと向かっていった

洞窟に着くと、クルペッコを岩の上に置いて、親父と向き合った

いつもならふざけた会話を始めるが、今日はそんな雰囲気ではなかった

『（で……話しってのはなんなんだ？）』

話しをなかなか切り出さない俺の代わりに、親父が話しをふりだした

「（前々から思ってたことなんだけど……俺が大きくなるにつれ、ずいぶん食べる量が増えたろ？

だけど、隔離されたこの孤島でそんなに捕食しまくってたら、生態系がいかれちまう。）」

これは親父も分かりきっていることだ

イビルジョーという獣竜種は、高い体温を保つために頻繁に捕食しなければならないという

幼子だった俺ならともかく、今では親父と同じかそれに近い量を捕食している

このまま親父と一緒に捕食を続ければ、この島は生物の墓場と化すだろう

親父は俺が何を言いたいのか分かっているのだろう、低く唸っていた

「（俺も親父のおかげで、誰にも頼らずに生きていけるようになったよ。
…だから。）」

『（ここを出るってのか？）』

俺は親父が言ったことに、少し間をおいてから頷いた

本音を言えば俺は親父の元から離れたくはなかったし、親父も心からそれを望んでいないだろう

だけど、俺がここに残ることで親父に迷惑をかけたくはない
親父は俺のことを迷惑だなんて思っていないだろうが、俺のせいで
親父が死ぬのは絶対に嫌だった

『（……それは、本気で決心したことなのか？）』

俺は親父の目をしっかり見つめ、ゆっくりと頷いてみせた

『（…分かった、どこへでも好きな所に行くといい。）』

親父は予想外に、俺を引き止めることはなく、後押しする発言をし
てくれた

驚きながら見つめる俺に、親父は明るく笑ってみせる

『（思えば…お前がこの俺に願い事をして来たのは、今日が初めてだったな。
俺がお前にしてやったことは何も無いが、せめて最初の願いは聞き入れてやる。）」

今俺は猛烈に感動している
今までは行動から親父の愛情を感じとっていたが、今日言葉で親父からの愛情を受け止められた

「（お…親父ィ……俺は親父から……いろんなこと教えてもらったよ…。
厳しくて…おっかなかったけど……俺は親父の子どもに生まれて良かったよ…。）」

俺は感動のあまり、涙や鼻水、唾液を垂れ流ししていた
他から見れば汚いかもしれないが、俺たちにとっては神聖な体液だ

『（泣くんじゃねえよ。
ほら、クルペッコでも喰って落ち着けや。）』

「（親父ィ…それ俺が捕った獲物だってぇ…。）」

泣きじゃくる俺につられ、親父の目にも涙がたまっていたが、涙がこぼれないよう…

息子の独り立ちを祝すべく、上を向いて雄叫びをあげた

孤島を旅立つのは翌日明け方、満潮の海が干潮になる時間帯だ

満潮から干潮になる引き潮を狙って、孤島から泳いでいきやすくするためだ

俺と親父は孤島の砂浜に来ていて、大陸のある水平線の彼方を見つめていた

こうやって親子肩を並べるのも、今日が最後だ

『（引き潮に任せて、潮の流れに乗っていけば《水没林》に辿り着けるはずだ。

どうだ…忘れものとかは無いか？）』

俺の首には、仲の良かったメラルーに作ってもらった頑丈な小袋があった

その中に、初めて狩った彩鳥の羽、非常食の生肉…それから親父の大牙と鉤爪が入っていた

「（大丈夫だよ親父。
忘れ物は無いよ。
袋が破れなければいいけど…。）」

そんなことを言っていると、突然その袋からひょっこり顔を出す者がいた

「大丈夫だニャ！
旦那さんの頑丈な皮を縫って、頑丈性と耐水性は抜群なのニャ！！」

この袋から頭を出すメラルーこそが、この袋を作った本人であり、
俺たち親子と家族ぐるみの生活をしていたメラルーだ
名前を《モモ》という

「（ありがたいけど……モモまで一緒に来なくても。）」

実はこのメラルーも、仲間たちから離れて俺と一緒に行くというのだ

「オイラは旦那さんに惚れたのニャ！
どこまでもついてくニャ！！」

どうしよう…と親父に顔を向けたが、親父は笑うだけだった

俺は困り果てていたが、多分断ったとしても無理やり着いてくるだろうと、諦めて連れて行くことにした

『（息子よ、そろそろ時間だ。）』

砂浜に打ち寄せる波は徐々に引いていき、干潮の時間帯となっていた

「（じゃあ親父…俺行くよ。

二年しかいられなかったけど…俺、親父と一緒にいれて良かったよ。）」

『（分かっているわ！

早いとこ行ってしまえ！）』

親父は気恥ずかしさを隠すため、荒っぽい口調になっていた

俺は親父の視線を背に受けながら海に浸かっていく

朝早くの海水はとても冷たかったが、半分浸かった頃、俺の胸に熱いものがこみ上げてきた

俺はバッと振り返ると、勢い良く頭を下げた

「（親父！未熟な俺をここまで育てていただき……ありがとうございました！！）」

それから俺はがむしゃらに海を進んでいき、背後から大きな雄叫びが聞こえてきた

第四話：巣立ちの時（後書き）

……やっと旅立っていったか

今まで育てた中で最高に強く、楽しいやつだったな……

息子の姿がどんどん小さくなっていき、ついにはその姿が見えなくなってしまった

…息子の旅立ちは喜ばしいことだが、物悲しいな…

…ん？

息子が泳いでいったあの方角……大嵐か？

まぁ、頑丈な息子なら嵐くらいは大丈夫だな……

しかしあの嵐……今まで以上に大きい…

まるで…古龍に引きつられてるみたいだな

なんていったっけな？

…そうだ《嵐龍アマツマガツチ》だったな

まあ、古龍がこんな所に来るはずないし、ただの大嵐だろうな

今日あたり洞窟にこもってれば、なんともないだろう……

第五話：なんてこったいここはどこ！？え、見知らぬ地方？（前書き）

転生した主人公はあっちの場所に行ってしまいます（笑）

第五話：なんてこったいここはどこ！？え、見知らぬ地方？

こんにちは……二年の歳月を経て、イビルジョー親父の元から巣立ちした転生者でございます

うぅ……まだ気分が悪い

孤島を出た俺たちは引き潮にのり、そのまま潮の流れにのることが出来ていた

しかし、そこに有り得ない規模の大嵐が俺の進行を妨害し、潮の流れもメチャメチャにしてくれたのだ

大波と強風に揉みくちゃにされ、俺は水面から頭を出して呼吸するのがやっとだったが、そのうち溺れてしまった

そんで気付いたら、見知らぬ砂浜に打ち上げられていたのだ

砂浜の向かい側には木々が生い茂るジャングルだったが、当初の予定の水没林ではないことは分かる

ただ今はそれ以上考えられなく、海を漂流したことによる、著しい体力の低下を回復することを始めた

幸い、小袋の中の相棒と生肉などは、耐水性素材のおかげで無事だった

メラルーのモモも気分が悪いのか、砂浜に寝そべってダウンしている

俺は日光浴と食事で体温を上げていき、徐々に冷静さを取り戻していく

「（まずここがどこなのか確かめないとな。
モモ、移動出来るか？）」
「まだ駄目なのニャ…。」

仕方なくモモを背中に乗せ、俺は付近を徘徊して回る
いくら歩いても森の木々しかなく、しかも方向感覚が狂いそうだ

歩き回って少しくたびれた所で、突如開けた場所に出た

小さな雲の泳ぐ空の下には、広大な緑の草原が広がっており、遠くの彼方には丘のようなものが見えた

「（すげぇ…当たりじゃねえか！
環境も過ごしやすそうだし、食い物にも困らなそうだぞ！！）」
「ニャニャ…旦那さんうるさいのニャ！

…ニャッ！？
なんて素晴らしい場所なのニャ！！」

飛び起きたモモも、気分が悪いのも忘れて、雄大なこの地に目を奪われていた

過ごしやすい温暖な気候と豊かな土地、その豊かな土地に群れる草食種の多さといったら、イビルジョーである自分が少し欲を出しても平気なくらいだった

俺とモモの心でここに棲みつく決心が固まりかけた時、モモが遥か上空の大きな物体に気付いた

「旦那さん、大変ニャ！！
あれを見るニャ！！」

モモが指差した先をたどっていってみると、大空を力強く飛翔する赤い竜を見た

「（なんてこった！
ありゃ飛竜リオレウスじゃねえかよ！！
ってことは、この場所はやつの縄張りか！！）」

上空を飛ぶリオレウスは一瞬こちらを見たが、まだ草原に足を踏み出していない俺を、無害として無視した

ただ一応俺を警戒しているらしく、旋回しながら俺の様子を窺っていた

しばらくリオレウスを見上げていたが、この場は俺が引くことにしたモモは反対したが、飛竜相手…しかもリオレウスには分が悪かった

親父に対飛竜戦法は習ったが、それはあくまで同じ地上に立つ飛竜だけにしか使えない

リオレウスは大空の王と言うだけあって、飛行しながらの戦闘を得意とする

近接戦で負ける気はしないが、飛べない俺に、上空からの攻撃は大きな弱点となる

俺も弱点を補って余りある戦闘力はあるが、不確実な戦いをするほどバカではない

そのことを話すと、騒いでいたモモもしぶしぶ理解してくれた

諦めた俺たちはジャングルに引き返していったが、俺はすぐさま異変に気付いた

自分を取り囲む無数の気配と、自分に向けられた敵意

肉食獣だ

姿勢を低くして臨戦態勢を取る俺に合わせ、モモも自作の棍棒を手にとる

俺の視界を避け、森の木々に隠れる肉食獣を確認出来なかったが、包囲を縮めたのを感じ取った俺は、尻尾で森の木々ごとなぎ倒した

何体かはよけたが、数体は直撃して断末魔の声をあげた

素早く振り返って襲撃者の姿を確認すると、俺とモモは見慣れない姿の襲撃者に驚いた

いつもの肉食獣であるジャギィには小さいながらも、エリマキがあったが、この肉食獣は変わりにトサかのようなものがあった

色もジャギィの薄紫色の鱗ではなく、青い鱗だった

しばらく戸惑っていた俺だったが、それは俺がよく知るモンスターであった

「（な…なんでランポスがここにいるの！？
ジャギィに変わられていないんじゃなかったのか！？）」

「ニャ！？旦那さんこのモンスターを知ってるのかニャ！？」

知ってるも何も、モンスタハンターではこのランポスがジャギィより先に登場し、２ｎｄから始めた俺には印象に残るモンスターだったし、転生した俺も３ｒｄのモンスターだ

ただ、今まで俺が戦ってきた相手は全部３ｒｄのモンスターだった

『ギャオッ！ギャギャッ！！』

ランポスは俺に悩み考えることをさせじと、一斉に飛びかかってきた

群れの中には一際大きな、ドスランポスがいたが、結局は俺にかなうはずはなかった

考えるのを止めた俺は、小さなランポスを瞬殺し、怯むドスランポスをモモが脳天をひっぱたいて仕留めた

俺とモモは、砂浜に戻って仕留めたランポスを食べていた

モモは初めて見たモンスターの肉を、美味しそうに食べるが、俺は腑に落ちない様子で食べている

なんでランポスがここにいるんだ？
ランポス含む、他の鳥竜種（ギアノス・ゲネポス・イーオス）は３ｒｄに出てこない…
…モンスタハンターの世界に転生したから、いてもおかしくないけど…

コイツらが３ｒｄの地方に迷い込んだのか…
あるいは……

「ニャーーッ！！」

突然モモが悲鳴をあげ、ジャングルの奥を指差していた
モモの示すジャングルの奥から、ゆっくりと大きな何かが近づいて来る

俺も一応警戒していると、その大きな何かはゆっくりと姿を現してきた

白いしま模様が入った赤い甲殻のそのモンスターは、俺に近づくと長く伸びた触覚でつつき、続いて大きな爪でつついてきた

な……なぜコイツまで！？

有り得ない、有り得ない！

ダイミョウザザミが目の前にいるなんて、絶対に信じないぞ！！

立て続けに見る馴れないモンスターに、俺の頭はパンクしそうだ

ダイミョウザザミも初めて見る俺に興味を持っているらしく、執拗に触覚でつつきまわす

何もしなければ襲ってこなそうなのでしばらく様子を見ると、やがて砂浜に赴いて食事をし始めた

しばらく呆然とダイミョウザザミを見つめている俺だったが、ここで疑念は確信へと変わった

奴らが３ｒｄに来たんじゃなくて、俺が２ｎｄの地方に流れ着いたんじゃねぇかーー！！

そういやさっき行った草原……《森丘》だしよ！！

なんてことだ、折角ジンオウガとかウラガンキン対策してたのに意味ねぇぇ！！

しかも２ｎｄっていったら、ガノトトスとかグラビモス……最悪ラージャンがいるだろうがぁ！！

誰か助けてぇ……

俺の計画が無惨に崩れていき、ダイミョウザザミはうなだれる俺を不思議そうに見つめている

「旦那さん、なんだかよく分からないけど、何とかなるニャ。」

やっぱりモモを連れて来て良かった……一人だったら心細くて死んじゃうよ…

「（そうだな…もともと独り立ちのために出たんだし、これくらいで動じちゃいけねえな。）」

「その通りニャ！
旦那さんが使い物にならなかったら、着いて来た意味がないのニャ！）」

「（お前今本音言ったろ？
さてはお前…俺に寄生して楽するつもりか？）」

俺が薄目で睨んでいると、モモは首が千切れそうな勢いで振り始めた

「ニャニャッ！言葉のあやだニャッ！！
オイラは旦那さんをそんな風に思ったりしないニャ！」

この野郎…油断出来ないな、やっぱりメラルーだ

とりあえずここにいても仕方ないので、ここ以外の場所に向かって縄張りを探すことにした

モモを背中に乗せ、その場を立ち去ろうとした時だった……

それまで大人しかったダイミョウザザミが、素早く俺の前に立ちふさがってきた

「（えっと…何かご用？）」

俺が尋ねてみると、ダイミョウザザミはカチカチと爪を打ち鳴らし、口から泡を吹き出した

やっぱこうなるのね……

その後、俺とモモで新鮮な蟹料理を美味しくいただきました

第五話：なんてこったいここはどこ！？え、見知らぬ地方？（後書き）

こっちの地方を選んだ理由は、モンスターが多様なこと

砦蟹と老山龍にやる砦攻防、風翔龍の街襲撃などの防衛戦に参戦出来るからです（笑）

多分、なかなか実現しないと思いますが…

（ジエンモーランは大砂漠だから無理）

第六話：寝床発見！しかしそこには…（前書き）

モンスターハンターの小説で、アイルーを見かけることはあっても、アイツらなかなか見ないな…

と思ったので、アイツら登場です（笑）

第六話：寝床発見！しかしそこには…

イビルジョーことこの俺と、あくどいメラルーのモモは、当初の予定を外れ、モンスターハンター２ｎｄの領域にやって来てしまった

見知らぬフィールドに、初めて接触する凶暴なモンスターたち…

それらを主に俺の力で克服しながら、俺とモモは安住の地を探し求めていた

先日この密林でダイミョウザザミと接触し、これを撃退して以来、注意するようなモンスターには遭遇していない

ただ何も襲ってこないわけではなく、こっちを見れば直ぐに突撃するブルファンゴ、何よりも厄介なランゴスタがいた

俺が育った孤島にはブナハブラという甲虫がいたが、このランゴスタはそれ以上に数が多かった

俺は素早くて小さく、飛行能力を持つこの甲虫は苦手であり、これに限ってはモモの毒けむり玉を利用させてもらっている

「（密林は餌が豊富でいいけど、邪魔者も多いから嫌いだな…。どこか条件の良い場所無いものかねぇ？）」

人間の賢さを持つ俺は、イビルジョーの旺盛すぎる食欲で他の動物を死滅させまいと、色々な対策を考えていた

イビルジョーの驚異的な食欲の要因は、すばり体温調節のためであり、高い体温を保つために補食が多い……と、どこかで見た気がする

それならばと、できるだけ体温が低下する寒い地方…ここでは《雪山》や《沼地》を避けることにした

そうなると条件的に密林の熱帯雨林気候は、体温低下を抑えるし、食料も多かった

ただし、この密林にはランゴスタやカンタロスら甲虫がわんさかおり、俺が個人的な理由で却下した

そうなると残るは《砂漠》《火山》《樹海》がある

ただし樹海はこの密林から正反対の方角にあり、間には人間の街があって到達はほぼ不可能

最後に火山と砂漠が残り、俺の体温低下の欠点は回避出来るが、これらの不毛な地で食料を見つけるのは困難だった
おまけに砂漠の夜は、よく冷える……

そんな俺の悩み事など意に介さないように、モモは俺の背中で昼寝をしている

俺が甲虫を我慢すれば、住処を密林に選んで解決なのだが、元々人間だった俺には、あの巨大な虫を生理的に受け付けられない

宛もなく放浪しているうち、日がいつの間にか傾いていた

寝床の決まらない俺達は毎夜野宿していたが、いつも夜行性の虫たちに悩まされている

虫を回避出来ればと、あまり餌の豊富でない砂漠へと向かおうと諦めていた時だった

不意に、ジャングルの向こうからいくつかの視線を感じた

ランポスかと思って耳を済ませたが、ランポス特有の唸りや足音は無く…変わりに、子どもがはしゃぐような声が聞こえる

俺は慌てて他の気配を探ったが、自分を見る小さな気配しか感じられない

俺は改めて小さな気配を発する方向を見つめる

姿は見えないが、おそらくは人間の子どもだろう…

俺が様子見をしていると、小さな気配はゆっくりと去っていく……
まるで、俺を誘うかのように

俺の直感が危険だと悟ったが、小さな者たちが自分を誘うわけを知りたく、俺は好奇心のままに気配を追っていた

気配のした場所に行ってみると、採取でもしていたのだろうか…キノコや小さなかぼちゃが、いくつか落ちていた

俺はさらに興味がわき、小さな気配をたどって獣道を進んでいった

獣道を進んでいくとジャングルから抜け、草原に出ていた

森丘に来てしまったのでは、と危惧したが、森丘ほど草原は広くなく、小高い山があるだけだった

獣道を進んでいるうちに気配は消えてしまったが、おそらくは目の前の山にでも登ったのだろうと、俺は何も考えずに山に入っていった

山の中腹には果物を生やす木、綺麗な清流があり、転生前の世界である日本の山に似ていた

俺がどこか懐かしい感傷にふけっていると、大きなほら穴があり、とりあえず入ってみた

ほら穴の中はかなり広く、周りにあるいくつかの穴から光が差し込み、ほら穴の中は明るかった

さらにほら穴の端には、俺でも歩ける広さに螺旋状の坂が出来ており、どうやら山の頂上にそれでいけるらしい

…素晴らしい物件だな！
温暖で豊かな土地だし、何より虫がいないぜ！
あれ？でもこんないい場所にモンスターがいないのはおかしいぞ？
…と俺が感づいた時には遅く、俺は無数の気配に囲まれていた
俺は慌てて臨戦態勢をとって威嚇したが、無数の気配たちからは敵意が全く感じられなく、むしろ友好的に感じる
俺が威嚇を止めると、洞窟の暗がりから、気配の正体が姿を現してきた
最初はアイルーたちが姿を見せたが、後に現れた者たちは初めて見る存在だった
背の高さや体はアイルーら獣人種に似ていてチビだが、頭の部分が一番特徴的だった……

俺が目を丸くしていると、一匹のアイルーがおずおずとやって来て、何やら話しかけてきた

「驚かせてごめんなさいニャ。
ボクたちはアンタを襲う気は無いニャ。
だからアンタもボクたちを襲わないでほしいのニャ。」

俺は分けが分からず首を傾げただけで、そのアイルーはビクッとしていた

「（あぁ…うん。
別にアイルーを襲うことはしないけど…。
というか…俺の言葉分かる？）」

今まではモモと何となく話せていたが、俺の言葉が通じているか不安だったので聞いてみた

「聞き取りづらいけど、何とか分かるニャ。」

「（分かったよ……なら聞くけど、どうして俺をここに誘うことをしたんだい？）」

俺はアイルーに対し、率直な意見を投げかけてみる

「アンタにボクたちを助けて欲しかったのニャ。」

俺はますます分からなくなる

「ボクたちは前からここに住んでたのニャけど、最近ここを狙うデッカいヤツが増えて困ってたのニャ！

そこで強そうなアンタを見つけて、ボクたちを守ってくれるよう、お願いしようとしたのニャ。

ちなみに、アンタがメラルーと仲良くしてたから、前から頼もうと様子を見てたニャ。」

俺がアイルーの話しを吟味していると、付け足しで報酬の話しを出してきた

大型のモンスターから守ってくれれば、ここに住むのを許可するし、身の回りの世話をしてやるニャ！！
つまり俺は用心棒だな？

悪い条件ではなかったので、俺はあっさりとアイルーの提案を受け入れた

アイルーたちはニャニャッと喜び合い、隣の奇妙な者たちもはしゃいでいた

「（ところで…アイルーたちは知ってるんだけど、そっちのかぼちゃかぶってるのは何者なんだい？）」

「ニャ？アンタ奇面族を知らないのかニャ？
ボクらと同じ獣人種の、チャチャブーだニャ！」

奇面族？
高〇ブー？魔〇ブウ…違うか
チャチャ……ブーだと！？

俺が口を開けてマヌケな顔で驚いていると、かぼちゃ頭の奇面族はキーキー喚きだす

「奇面族を知らニャいなんて、アンタはどこの田舎からやって来たニャ？」

「（いや…知ってたけど、初めて見たから驚いてただけかな？）」

ようやくチャチャブーのことを思い出せたが、あまりいい思い出はない
ゲームでは擬態していきなり飛び出すし、地味に攻撃が強いから……

ただ、友好的なチャチャブーを実際に見てみると、案外可愛かったりする

「ニャんだから知らニャいけど、アンタを頼りにするニャ！」

「（おう、俺に任せときな！）」

俺はこのかわいそうなな獣人種の用心棒としてだが、この世界に来て初めて自分の住処を得ることが出来た

一人で暮らすよりも、このチビっこたちと暮らせるのはいいし、狩り場も近くて最高の場所だった

だが、ここの用心棒としてつとめるのがどんなに大変か、俺はまだ知らなかった…

第六話：寝床発見！しかしそこには…（後書き）

はい、奇面族チャチャブーの登場です

設定としてアイルーたちが家事などを…チャチャブーたちが衛兵の役目で、集落を運営しています

第七話：掟破りの大連続狩猟（前書き）

タイトル通り、イビルジョーとその仲間による大連続狩猟です

といっても強いモンスターは出ません

第七話：掟破りの大連続狩猟

この世界で偶然見つけた豊かな土地

しかしそこにはアイルー族や奇面族のねぐらでもあった

獣人種たちは時たま来る猛獣に頭を悩ませており、俺はそれらの猛獣から獣人種を守る代わりに、この豊かな地に住処を構えさせてもらうことになった

俺はアイルーたちと対話し、襲って来る猛獣の種類、数、それが何処からやって来るのかを教えてもらっている

話しによると、猛獣は不定期に色々な方角からやって来て、最悪の場合には数種類の猛獣が鉢合わせになり、それが暴れて被害が拡大するとか…

今まではチャチャブーたちの奮闘で解決していたらしいが、最近は猛獣の種類も襲う頻度も多く困っていたらしい

ちなみに今、洞窟にあった螺旋坂を登り、山頂に上がって風景を見ているが、どうりで猛獣の集中攻撃を浴びるはずだった…

俺がいるこの場所は盆地のようになっており、草原の中心に今いる小高い山がある

そしてこの盆地の四方八方が、特殊なフィールドとなっていた

東には自分がさまよっていた《密林》、南東に焦土の広がる《火山地帯》、西には大きな砂丘のある《砂漠》…そして北には山頂が白い雪に覆われた《雪山》があり、その方角からは綺麗な川が流れてきていて、湖が出来ていた

それらの中心にあるフィールドがここであり、過酷な環境で飢えたモンスターが、豊かな地であるここを狙うのは必然であった

幸いこの盆地はそこまで広くなく、小高い山のおかげで侵入者がいればすぐに分かる

「というわけなのニャ……デッカいヤツいくら返り討ちにしても、

次から次へと来るニャ！」

「（なるほどね……なら、ここに来るのが嫌になるくらい、ボコボコにすればいいんだな？）」

「そういうことニャ。
ニャ……早速侵入者が来たみたいなのニャ！」

アイルーが東の密林を指差して騒ぎ出した

見ると、青い体色のランポスを率いるドスランポスが、キョロキョロと周囲を見渡している

「ボクたちはここから監視するから、頼んだニャ用心棒さん！」

俺は元気よく返事をし、モモを連れて東の密林に向けて移動を開始する

あと、何故かチャチャブーたちが俺の背に飛び乗り、キーキー戦いの雄叫びをあげた

「（オラオラーー！！
みんなの庭を荒らすヤツはぶっとばしてやる！）」

山から駆け下り、一直線に突撃してきた俺を見て、ランポスたちは慌てふためいた

一方のドスランポスはというと、群れの長なだけあって落ち着いている……と思ったら、俺に気づかないであらぬ方向を見ていた

バカかコイツは？

そう思いながら突撃
ドスランポスはやっとこちらに気付いたがすでに遅く、俺の尻尾で密林の彼方へぶっ飛ばされた

「キー！キャキャー！」

俺の背中から奇面族たちが飛び降り、残ったランポスたちをタコ殴りする

下っ端ランポスは俺が手を出すまでもなく、チャチャブーらにやられて逃げ帰っていった

「ニャハハハ！！
このモモ様が来れば、ヤツらごときちょちょいのちょいニャ！」

「（お前は何もしてないだろが！！）」

そうモモにツッコミを入れていると、山の頂上から茶色の煙が上がった

「茶色は……砂漠方面だから、西ニャ！
旦那さん、西に向かうニャ！」

アイルーたちが頂上から焚いた煙は、俺への合図であり、煙の色に

よって侵入者の方角を示している
茶色が《砂漠》、緑色が《密林》、赤色が《火山》、白色は《雪山》だ

奇面族もすぐさま俺の背によじ登り、俺は西の砂漠に駆けていく

足が速い俺はすぐに砂漠の入り口についたが、そこにモンスターの姿はなかった

間違いかと思ったが、頂上からはしっかり茶色の煙が立ちのぼっている

「（ありゃ？モンスターはどこにいるんだ？）」

俺が辺りを見回していると、突然何かが地中から突き出てきて、俺の横顔をかすった

襲撃者はすぐに砂中に戻ったが、二撃目を予測してその場から飛び退く

俺の予想は的中し、襲撃者は俺がいた場所を、鋭い角で突き上げ、
ようやくその正体をさらけ出してきた

「（ウゲッ…またダイミョウザザミかよ！
しかも前より大きいし！！）」

ダイミョウザザミは口から激しく泡を吹き、何故かお怒りの様子だ

盾蟹の怒りのわけを知らないが、こっちは負けるわけにはいかない

先手必勝とばかりに俺は突っ込んでいくが、盾蟹は俺の顔面に勢い
よく泡を吹きかけてきた

視界を奪われた俺の攻撃は空振りし、盾蟹の堅い甲殻にぶつかって
しまった

頭に痛烈な痛みを感じるが、逆に俺の石頭がぶつかった盾蟹も怯ん
でいる

奇面族とモモは怯む盾蟹を見逃さず、俺の背から跳び、盾蟹に張り付いていく

「アレをコイツにくくりつけるのニャ！
爆破はオイラがするニャ！」

奇面族は盾蟹の体にタル爆弾をくくりつけていく

ひととおり爆弾をつけた後、再び俺の背に戻り、モモが盾蟹に向けて小タル爆弾を投げた

小タル爆弾はダイミョウザザミの隣で炸裂し、それが引火してくくりつけられた爆弾が連鎖爆発していく

爆弾の威力は凄まじく、ダイミョウザザミの殻を吹き飛ばし、堅い甲殻も焼け焦げていた

モモと奇面族は歓声をあげて騒ぎ出し、俺はダメージで倒れる盾蟹の背後にまわり、殻の一部の長い立派な角をへし折ってやった

「（へへッ、真紅の角ゲットだぜ！
これにこりたら、二度とここらをうろつかないことだな！）」

ダイミョウザザミは痛々しそうに動き出し、一目散に逃げ出していった

俺は盾蟹から穫った真紅の角……一角竜モノブロスの角を、誇らしげに眺めた

「旦那さん、あの蟹からの戦利品かニャ？」

「（おうよ、なかなか貴重な素材なんだよコレ。
状態もいいし、何かの役にたつかもしれないな！）」

奇面族も交えて真紅の角を眺めていると、山の頂上から煙が再び立ちのぼった

次は白色…雪山からの襲撃らしい

俺は真紅の角を体に縛り付けてもらい、次なる襲撃者に向けて疾走していく

雪山から流れる川をさかのぼっていくと、草原から徐々に雪原へと変わっていく

その雪原に、息を荒げて暴れる襲撃者…ブルファンゴと首領のドスファンゴがいた

ダイミョウザザミよりは格下である襲撃者を見て、俺と仲間たちは余裕綽々の態度でいたが、その甘い考えはすぐに打ち砕かれた

俺たちを威嚇するファンゴの背後……

正確には雪山の方角から、飛来してくる奇妙な物体が見えた

その物体が近づいてくるにつれ、だんだんと、その不気味な姿がきちんと確認出来るようになる

それは飛竜の特徴である二つの翼があるが、他の飛竜のような甲殻は無く、表面は白いぬめりのある皮だった

頭部には目が無く、鋭い牙の並ぶ気味の悪い大きな口が目立つ

「ニャニャ！！
あの気持ちの悪いモンスターはなんだニャッ！？」

「（…フ…フルフルだぁ！！）」

実物で見るフルフルはとてもグロテスクで、獲物を探すように鼻をひくつかせる音は、俺とモモに悪寒を感じさせる

巨大な体躯の俺を見れば、大抵のモンスターは怖じ気づくが、退化して目の見えないフルフルは、俺に一切恐怖を感じていない

俺たちはしばらく固まっていたが、もう片方の襲撃者であるファンゴたちは、自分らを無視されたことに怒り出した

怒りに突進してくるファンゴを見て、俺は我に帰った

突進してきたファンゴをかわして蹴りとばし、続いた突撃してきたのを尻尾で吹き飛ばす

俺とファンゴの体格差は歴然であり、ブルファンゴたちは面白いように返り討ちにあい、一匹ずつのびていく

残ったドスファンゴは仲間をやられたことで怒り、俺に向けて突撃してきた

なんなく返り討ちにしようとしたが、突如俺の体に衝撃が走り、動きが止まった

「グギャッ！！」

隙だらけの腹部に、弾丸のようなドスファンゴが当たり、俺は胃の

内容物を吐き出してしまうところだった

「（ゲホッ！ゲホッ！！
い…一体何が！？）」

ドスファンゴから後ずさり、あの急に受けた衝撃を考えていると、
思い当たる節が一つあった…

俺は気付いてもう一体の襲撃者を見据えたが、すでに第二射はされていた

「（ちょっ…待っ！
ギャアアア！！）」

フルフルの口内から放たれた、青白い光の球体は地面を伝って、俺に容赦なく直撃
電流が俺の体中を駆け巡り、またもや体の自由を奪われた
そしてそこへドスファンゴの突進…痛すぎるコンボだ

「だ、旦那さんしっかりするニャ！」

龍と雷の属性に弱い俺は、フルフルの電撃ブレスを浴び、意識がとびそうな程のダメージを受けた

しかし、体が倒れそうになるのを防ぎ、俺はなんとか踏みとどまった

「旦那さん！
無事だったニャ！？」

「（あぁ…電撃浴びたおかげで、頭が冴えるな。
こっからは反撃！
モモ、こやし玉を投げつけてやれ！！」

モモは俺の真意を分からないでいたが、とりあえずポーチの中の、イタズラ用こやし玉をフルフルにぶつけた

するとどうだろうか……

今までのように匂いを嗅いだフルフルは、こやし玉の匂いに苦しみだし、くしゃみをし始めた

「ニャ…ニャんだかしらニャいけど、上手くいったのニャ！」

苦しみ悶えるフルフルに勝機を見いだし、モモと奇面族はフルフルに飛びかかっていく

「これでもくらうニャッ！！」

「キャッキャッ！！」

モモたちは一斉にこやし玉をフルフルにぶつけ、匂いまみれにしていく

フルフルの真珠色の滑らかな皮は、こやし玉の茶色に汚染され、当分は臭いがとれないくらい臭くなった

こやし玉でボコボコにされたフルフルは、苦しそうな悲鳴をあげ、逃げ去っていった

その際、フルフルの頭部から何かが落ち、モモはすかさずそれをビンにおさめた

「（わはははは！！
昔の知識が役に立つとはな！
さてあとは…。）」

俺は最後の襲撃者に視線を向けるが、すでにドスファンゴは逃げ支

度をし、足をせっせと動かして雪山に逃げ帰っていく

「旦那さん、やったのニャ！
気味悪いヤツとムサい猪に勝ったニャ！
やったニャ！」

奇面族たちも高らかに勝ち鬨をあげ、打ち上げタル爆弾を花火のようにあげている

山の頂上を見ても煙は無く、どうやらこれ以上の襲撃者はもういないようだ

「いつもこれくらいなら、オイラたちに負けはないニャ！」

「（そうだな…ん？
モモ、そのビンに入ってるのはなんだ？）」

モモの腰にぶら下がるビンには、透明感のある綺麗な液体が入っていた

「これかニャ？
さっきあの竜から出たやつで、とってみたんだけど…。

いらないから旦那さんにやるのニャ！」

モモから半ば強引にビンを押し付けられたが、中身の液体は綺麗で気に入ったので、ありがたくもらっておいた

それから俺たちは住処の洞窟に戻ると、アイルーたち獣人種の賞賛を受けた

アイルーは笛やらなにやらを吹きまくり、奇面族は鉈を危なしげに持って、妙な踊りをする

騒いでいるうちにいつしか宴が始まり、洞窟の中は飲んだくれの獣人たちで溢れてしまった

今回の働きで獣人種たちに信用され、家族同然の仲となった俺は、今日以降みんなから頼りにされる人気者となり、一緒に戦ったモモは、メスのアイルーにモテるようになった

俺の勇敢さは奇面族にも認められ、普通は会えないという奇面王キングチャチャブーにも会えたのだった…

余談だが…キングチャチャブーは本当に頭に焼き肉セットをのせていた

第七話：掟破りの大連続狩猟（後書き）

最後にガノトトスを出したかったのですが、世界観がおかしくなってしまうので中止

ギャグ要素の話しですので、モンスターは一匹も死んでません

こんなはかない文章である小説をお読みいただき、ありがとうございます！

読者様からの感想も励みになります！

表現力に乏しい作品ではありますが、これからもよろしくお願いします！

第八話：恐暴竜のお使い

住処にやってくる襲撃者を返り討ちにしてから、半月程が経った

その間、幾度となくモンスターが襲撃してきたが、俺の奮闘によりすべてを追い払っていた

俺は出来る限りモンスターを酷い目に合わせ、殺しまではしないものの、ボコボコにして満身創痍の状態で追い返す

外から戻ったアイルーの話しによると、モンスターたちの間で、この豊かな地は禁断の魔境として噂されているらしい

草食獣も水も、果実を実らせる木々がある楽園だが…そこに悪鬼羅刹の如き巨竜が棲み着き、獣人種以外のモンスターを血祭りにあげると…

「――巨竜は逃げる者も容赦なく喰い、いたぶりながら殺すニャ。見つかったらお終い、逃げてもずっと追いかけてくるどころか…逃

げ帰った巣の同族を一匹残らず喰い荒らすニャ！
……ってなのが、外界のヤツらが旦那さんに持つ印象みたいだニャ。
」

一言言わせてもらう……

俺そんなことしてないよ？
少々強めに追い払ったりもして、こやし玉ぶつけて酷い目にあわせたけど…

俺一度もいたぶったことないし、殺してないよ！？
巣まで追いかけて喰うって…俺一度も食べたことないよ！？
だって、草食獣の方が断然美味いから！！

しかもなに？
悪鬼羅刹の如き巨竜って？
少しカッコイいって思っちゃったじゃないのさ

外界からの悪評に俺はへこたれるが、メスの美人アイルーたちが俺を励ましてくれる

奇面族はしょぼくれる俺を見て、大爆笑している
それにイラっときた俺だが、ちょうどアイルーの村長が来たので、お仕置きは次回に持ち越しだ

ヨチヨチ歩いてきた村長は、俺の隣に腰掛けると、にこやかに笑いかける

「噂なんて気にしちゃいかんニャ兄弟。
外界の暴れん坊から見たら、兄弟は確かに畏怖の対象かもしれニャいが…。
ボクらは兄弟を頼りにしてるし、大事な仲間だと思ってるニャ。」

「（兄弟…。）」

村長は俺を励ましてくれ、俺は感動のあまり涙やら涎を零す
下にいたアイルーは、俺の強酸性の唾液を慌ててかわしていく

俺はアイルーの村長から兄弟と呼ばれており、対等の付き合いをさせてもらっている

他のアイルーたちは俺を親分と呼び、モモは叔父貴と呼ばれている…

なにやら仁侠っぽいが…ここの獣人種は仁義を重んじ、みんなが固い絆で結ばれている

奇面族のチャチャブーなどは基本自由人が多いが、首領のキングチャチャブーの影響でとても義理堅い一団だ

最初はアイルーたちと利害が一致しただけで住処を共にしたらしいが、今では集落の防衛を受け持ち、危険な外界に出て物資を調達してくる

そんなチャチャブーたちの首領、奇面王は俺のことを気に入り、時たま俺と一緒に襲撃者を追い払うこともある

普通はみんなの前に出て来ない、所謂集落内の大物らしいのだが、それが嘘みたいにしょっちゅう会いにくる

この集落の大物は事実上、俺・村長・奇面王だが…集落の運営を担う者がもう一人いる

「およ、ここにいたのかい村長さん。」

アイルーたちより少し背が高いくらいの翁が、杖をついてやって来たこの優しそうな老人は竜人族であり、この村で日用品から武具までを造る鍛冶屋だ

「（やぁ爺さん、今日も元気そうだな！）」

「あれま、お前さんもいたのじゃな。
デカすぎて見えなかったわい……ちょうどいい、お前さんも聞きなさい。」

俺と村長は顔を見合わせ、翁の持って来た話しに耳を傾ける

老人は咳を一つすると、ゆったりとした口調で話し出す

「奇面族の調査隊からの情報じゃが…。
砂漠に住んでおったアイルー族が、この場所に移住したいらしくての……調査隊の奇面族にお願いしてきたらしい。」

「そうなのかニャ？
別に断る理由はニャいし、仲間は多いにこしたことはニャいのニャ

！」

「さすが村長さん…。
じゃが、砂漠から移住するには道中の安全を確保せねばなるまい…。
そこでじゃ。」

翁は俺の方を向いてきた

「お前さんに砂漠に行ってもらい、アイルーたちが安全に移住出来るようにしてもらいたいのじゃ。」

俺は少しだけ迷ったが、砂漠に行くのは初めてだし、どんな場所なのか興味があったので、快く承諾した

「（やいモモ！
モモはどこだ！？）」

俺は洞窟内部を歩き回り、相棒のモモを探して回る

すると、洞窟の奥からマタタビをくわえてふらついているモモを発見した

「ニャニャ〜〜…。
旦那さんニャ〜〜、旦那さんが回ってるニャ〜〜。」

よほどハイになってるようで、目を回して俺の方に歩み寄ってくる

俺は盛大にため息をこぼし、端で戯れている奇面族に視線を送る

俺の視線に気付いた奇面族は遊びを止め、何やら道具を持ち出してモモを取り囲む

「キキィー！！」

奇面族は様々な道具を使ってモモをこてんぱにし、水を浴びせかけたり、トウガラシを口に突っ込んだりした

これはここの奇面族が考案した、アイルーをマタタビから醒ませる荒っぽい治療だ

「（どうだ目が醒めたか？）」

「ウニャ～……完っっ全に目が醒めたのニャ。」

モモは酷い顔つきであり、奇面族の治療がいかに凄惨だったかを物語っている

「ところで…話しってなんだニャ？」

不機嫌そうに睨んでくるが、毎日親父にシバかれた俺にはちっとも恐くない

モモに砂漠の移民の話しをし、それの護衛するからお前も来いと言ったが、モモはのらりくらり分けの分からないことを言う

つまり、面倒くさいから行きたくない……だ

「（ほうほう……そんなに俺と行きたくないか。
いいだろう、お前は留守番でもしてろ。）」

モモはニヤリと笑う俺を見て、言いようもない不安にかられる

モモとは幼少期からずっと慣れ親しんだ仲だ

良い部分や悪い部分、頑張っていた姿も見ていた……もちろん、人前では決して言えないようは出来事も

「（その代わり…俺の口は軽いから、うっかり昔話をしちまうかもな。

初めて俺と会った時、お前は俺にビビって『ニャニャ！！それはダメニャ！』…ククククク、それから今日みたいにマタタビに酔った勢いで親父に絡んで『分かったニャ！分かったから止めてニャ！』）」

俺がバラそうとしたことは、全てモモの黒歴史であり、他にもいくつか弱味を握っている

今モモの周りにはアイルーの女の子が集まっているが、そんな時に俺が秘密を暴露したら、女の子たちはモモに愛想を尽かして離れるだろう

そして、モモはそれを絶対に回避しなければならなかった

「い、行くのニャ！
旦那さんが行くなら、地獄の果てまでついていくのニャ！！」

「（ワハハハ！！
そうかそうか、実は俺と行きたかったのか！
素直じゃないなお前は！）」

（この旦那さん…もう嫌ニャ）

俺はモモの気が変わる前に、モモを背中に乗せて西の砂漠に疾走していった

地平線の彼方まで広がる砂の海、上空にはギラギラとした灼熱の太陽…

太陽から降り注ぐ熱と砂からの照り返しが、とてつもない暑さをつくる砂漠に、イビルジョーこと俺は来ていた

以前、俺はイビルジョーの生態を考察し、捕食の数を出来るだけ減らそうとし、気温の高い火山や砂漠に棲む気でいたが…撤回する

砂漠の気温は俺の体温を遥かに超え、暑さによる体力消耗で捕食の回数はむしろ増えている気がする

砂漠は夜になれば一気に冷え込むため、それが一層拍車をかけている

俺の背には、すでに暑さでくたばったモモがミイラ化し、移動している俺も限界に近かった

意識朦朧とする中、俺の視界にキラリと光が反射した

俺の中に一つの希望が芽生え、俺は光が反射した方向に、気力を振り絞って駆けていく

俺が走っていった先には、俺が期待していたとおり、水のあるオアシスがあった

俺は走っている勢いをそのままに、オアシスの水に飛び込んだ

失っていた水分を補給し、ついでに水際のアプケロスに噛みつき、水中に引きずり込む

「（ふぅ…生き返ったぜ！）」

水とアプケロスの肉を腹におさめた俺は、出発前の瑞々しさを取り戻す

ミイラ化していたモモも、がむしゃらに水を飲んでいて、いつしか水で腹が膨れたデブになっていた

「ふぅ…生き返ったぜニャ！」

「（真似するんじゃねぇ！）」

「ギニャッ！！」

モモに制裁を加えた俺は、水から上がって周囲の状況を確認する

このオアシスはあまり知名度が低いのか、数頭の草食獣以外いなく、その草食獣も俺を見て逃げていった

砂漠の暑さは俺の体についた水分を瞬時に気化させたが、俺は自分の身に起きた変化に気付く

砂漠に入ったばかりの俺はすぐに暑さにやられたが、今はそこまで

暑さを感じない

極限にまで追い込まれた俺は、体力を回復させた後に、暑さに対する抵抗力が出来たのだ

温暖な気候でしか活動しなかった俺だが、イビルジョーの俺は驚異的な早さで、砂漠の環境に適応してみせた

ふむふむ…過酷な環境に身を置いてこそ、俺の強さは増大していくのか…

以前神さまは、俺が自然界で困らないよう適度に最強と言ってたが、最初から強いわけではなく、修羅場を潜り抜けた時に得る経験が、おそらく俺は倍以上なのだろう

「（へへ…あの神さまに感謝しとかないとな。）」

――――――――

「は…ハクション！！！

はぁ…ウチの噂しとるんは、どこのボンクラや…ったく。

しもうたわ！！

ウラガンキンごときに、三死してもうた！！

ああもう！今日は厄日やな！」

――――――――

「ところで旦那さん、移民のアイルーたちの所には、いつ辿り着くニャ？」

モモの問いかけに俺も気になり、寝そべっていた体を起こし、地図を広げてみた

俺の天性の方向感覚でここまで来れたが、水浴びをしていたら方向感覚がリセットされてしまった

仕方無く地図を広げてみたのだったが…

うん、意味不明だね

俺が地図の見方が分からないわけではなく、この地図が摩訶不思議なのだ

この地図は拠点のアイルーが作ったもので、当然のごとく”アイルー用”であり、ぶっちゃけた話しただの落書きにしか見えない

ただそこは相棒のモモがフォローしてくれる

モモはメラルーなだけあって、この古代文字以上に難解な、アイルーの落書きを理解してくれた

「旦那さんが砂漠に入って真っ直ぐに来たなら、今はこのオアシスニャ。

そんで目的の場所は…ここを北に少し行った場所、もうすぐ着くのニャ！」

相棒…お前を連れて来て本当に良かったぜ…

…などと、感謝の言葉を言うと調子に乗るので、適当に相づちをうってサッサと出立する

俺は砂漠の暑さはもう平気だったが、体毛のある…そしてメラルーで黒毛なために、熱を吸収して早々にくたばった

そう何度もめんどうは見てられないので、俺は比較的温度の低い岩場に入った

岩場に入ってすぐに生き返ったモモに呆れていたが、岩場にポッカリ空いた穴を見つけた

モモに確認を入れてみると、どうやらそこがアイルーたちの住処だったらしい

「（ヨッシャ！
早速話しをつけてこい！）」

「はい、なのニャ！」

俺は身体が大きすぎて入れないため、代わりにモモを住処に向かわ

せた

しばらく待っていると、楽しそうなモモを先頭に、十数人のアイルーが出てきた

アイルーの数はそこまで多くなく、これなら途中敵に襲われても、問題なく護衛出来る

アイルーたちは最初俺を見て怯えていたが、モモと親しく触れ合う俺を見て、警戒を解いた

俺はモモとアイルーたちを背に乗せ、任務通りに移民たちを拠点に運ぶため、帰路につく

順調だった…
簡単に終わる任務のはずだった…

その時俺には……いや、砂漠に足を踏み入れた時点でかもしれない

この砂漠に棲みし悪魔、”砂漠の暴君”と謳われし最凶の竜が忍び寄っていたのだった…

第八話：恐暴竜のお使い（後書き）

次回、この小説で初めてモンスター同士の激突が起こります

敵はヤツが出ますが、二次創作だとして、控えめに見てやって下さい

第九話：恐暴竜の奮戦、憤怒の暴君

アイルーたちを運ぶ俺は、背に乗るアイルーに暑さの影響を与えぬよう、日陰の岩場を突き進んでいる

実のところをいうと、暑さにくたばるのはモモだけで、移民のアイルーは砂漠で暮らしていただけあり、少しの弱音も吐かない

岩場は遠回りになると思いきや、移民アイルーたちは拠点への近道を熟知しており、来たときよりも早く帰れるらしい

最後には結局砂漠を通るらしいが……

「いやだニャいやだニャ！
砂漠はもうコリゴリニャ！
涼しい岩場の方がいいのニャ！」

この話しを聞いたモモは、まるで子どものように駄々をこねる始末だ

少しの辛抱だ、とさとしかけても変わらず文句をたれる

「（あぁそうかい！
ならお前はここで降りやがれ！
その代わり、お前が苦しもうが野垂れ死にしようが、俺は一切責任をとらん！）」

こうまで言われても諦めないモモに、俺は具体例を挙げて脅しをかける

「（この砂漠にはゲネポスっていう鳥竜種がいてな…。
ヤツらの牙には麻痺性の毒があって、噛まれれば手足が麻痺して動かなくなり、次第に呼吸をするのも困難になる…。
完全に動かなくなったら、ヤツらは鋭い牙で肉を貪り、あっという間に骨だけにしちまう。）」

「や、やですよ旦那さん。
冗談に決まってるじゃニャいですか…ニャハハ…。」

本当にこのメラルーは調子のいいヤツだ

これでも文句を言ってたら、本当に置き去りにするところだった

モモもそのことに気づいてるのか、気持ち悪いくらい、俺のご機嫌とりを始めた

岩場を通る途中洞窟に入り、砂漠の地底湖なるものがあったが、そこの気温が低かったので急いで後にした

地底湖を抜けた先は気温の安定した洞窟だったが……

「旦那さん…壁の穴に、何かいるのニャ。」

「（俺も見えた…。
あれがさっき言った、麻痺牙を持つゲネポスだ。）」

俺は背に乗るアイルーたちに注意を呼びかけ、俺自身もいつ飛びかかられてもいいよう、警戒しながら進む

洞窟を進むにつれ、穴から顔を出すゲネポスが増えていき、いつしか周りを取り囲むほどの数にまでなった

俺たちの緊張感は高まっていくが、不思議なことに、ゲネポスたちはこちらの様子を見るだけで、襲ってくる様子は全く無かった

「旦那さん、ゲネポスたちは一体何がしたいニャ？」

「（全く分からない…。
それにリーダー格の、ドスゲネポスが見当たらない。）」

小型の鳥竜種には群れ一つにリーダー格がいる

ランポスだったらドスランポス、ジャギィだったらドスジャギィといった大型の雄がいるはず…

しかしこのゲネポスたちには、群れの首領たるドスゲネポスが見あたらなく、統率の取れていない烏合の衆だ

さらに気付いた事だが、ゲネポスが俺を見る眼は、何かに期待してるように見えた

俺の背に乗るアイルーたちを食べたいのではなく、何かから守って欲しい…そういった心情が感じられる

ゲネポスたちの心情が気になるが、鳥竜種とはコミュニケーションがとれなく、何よりも移民を運ぶという仕事があるため、心を鬼にしてその場を立ち去る

「ニャハハハハ！！
ゲネポスとやらも大したことないのニャ！ビビって襲いもしニャいとは、弱っちいのニャ！」

さっきまでビクビクしていたモモが、洞窟を出た瞬間にまるで自分の手柄のように騒ぐ

コイツのこのどうしようもない性格、いずれ叩き直さなければと思う俺だ…

「（ったく……それよりも警戒しろ。
新しい襲撃者どもだぞ。）」

「ニャ！？どこニャ！？
旦那さん、早くやっつけるのニャ！！」

もはや何も言うまい…

諦めた俺が見据える砂原の先には、砂の海を裂きながら接近する、
黒いヒレ…

砂中を泳ぎ回り、集団で獲物を追い詰めていく砂漠のハンター《ガレオス》だ

ガレオスはその特性を活かし砂中からの奇襲を得意とし、また砂に隠れているために姿を視認し辛く、砂漠を進む商隊が最も警戒するモンスターでもある

ガレオスの一匹が、泳いできた勢いをそのままに飛びかかってくる

そのガレオスは俺の大きく開かれた口に噛まれ、そのまま俺の胃袋へと流れた

「（砂でジャリジャリして最悪だ。
喰うのには値しないな…。）」

ガレオスの食感に不快感を示す俺に対し、仲間を一撃でやられたガレオスは、俺の周りを遊泳する

ガレオスの数は数体と、残念ながら俺を相手どるには心許ない

ガレオスは俺の隙を狙っているのだろうが、毎日親父の奇襲を受けた俺には、隙や油断などといった概念は存在しない

普通なら襲撃を諦めるところだが、ガレオスたちは何が何でも食事にありつきたいようで、執拗に付きまとってくる

「（いくらなんでもおかしすぎるぞ…。
ゲネポスの首領はいないし、ガレオスたちは飢えている…おまけにガレオスの首領もいないじゃないか。
もしかして、君たちが移民したい理由も何か関係するのか？）」

モモが俺の言葉を通訳して聞かせると、移民アイルーたちはギクッとした

怪しいと踏んだモモが問い詰めると、移民アイルーは思い口を開く

「…最近までボクたちは暮らしに満足していて、特に不自由なかったのニャ。」

「最近まで？
何があったニャ？」

俺もモモも、移民アイルーの話しを真剣に聞く

「ボクたちは砂漠のモンスターから素材を頂いて生計をたててたのニャ。
小型じゃ儲からないから、中型から大型のモンスターニャ。
それが…最近猛烈に強いデカい奴が現れて、他のモンスターを一匹残らず縄張りから追い出したのニャ。」

「それで…砂漠で暮らすのが無理になったから、オイラたちの村にニャ？」

移民アイルーはコクっと頷いて見せると、自分たちが住んでいた村を寂しそうに見つめた

「（ふぅん……。
ところで、その現れたモンスターってのはどんなヤツなんだ？）」

「そうだニャ……砂漠を物凄い勢いで駆け回って、とんでもなく力の強い竜ニャ。
身体は用心棒さんくらい大きいのニャ。
でも、同種の竜と少し変わってて……ニャ！？」

突如砂漠の向こうで大地を揺るがす、大きなな雄叫びが轟いた

異変のあった方向をすぐさま確認すると、巨大な”何か”が砂塵を巻き起こしながら、真っ直ぐに俺たちに向かってくる

俺は本能的に危険を感知し、その場から慌てて立ち退いた

以前、俺は地中から盾蟹の突き上げる角を避けたことがある

しかしこのモンスターが地中から飛び出した時、その時の倍以上の砂が巻き上がり、避けた俺の右頬を鋭利な角が掠めた

それもあまりの勢いで、傷口から出た血液は飛沫のように噴出した

反応があと少しでも遅れたのなら、俺の頭部は容易く貫かれていただろう

舞い上がる砂塵が晴れていき、徐々に襲撃者の全貌が明らかとなっていく

棘の付いた襟飾はまるで強固な装甲、頭部から聳える二本のねじれた鋭利な角

一目で凶悪と分かるその風貌は、俺の脳裏にも鮮明に焼き付いている

飛竜種の中でも上位の強さをほこり、その恐ろしい角で縄張りを侵す、数多の不届き者を仕留めてきた

通称
”砂漠の暴君・ディアブロス”

「（なる程…コイツが棲み着いたってんなら、納得だぜ…。
しかし、コイツは一体なんなんだ？
黒い亜種は知ってるけど…。
朱色のディアブロスなんて、俺は知らないぞ？）」

一般的なディアブロスの甲殻は砂漠と同色の土色のはずだ
雌の固体は繁殖期に警戒色として甲殻が黒くなり、これが亜種とされる……と、どこかで見た気がする

だが俺の目の前にいるコイツはなんだ？

甲殻は土色ではなく、砂漠では異質ともいえる朱色の甲殻に覆われている

自分の知らない亜種なのか、あるいは希少種…はたまた突然変異の全く別の竜か

そんな思案を巡らせる俺に隙が生まれてしまい、様子を窺っていたガレオスが飛びかかってきた

とっさに一匹をかわしたが、そのせいで背のアイルーが落ちそうになる

アイルーを気にして動けない俺に、ガレオスはここぞとばかりに襲う

ガレオスの襲撃をかわす行動の中で微かに見えた光景に、俺はとっさに叫ぶ

「（耳を押さえろ！！）」

そして、俺の叫びをも掻き消す大きな咆哮が響き渡った

その咆哮は広大な砂漠に響き渡り、俺も大気の振動を身体でビリビ

リと感じた

幸い俺の叫びはアイルーたちに届き、耳の保護を済ませて俺も耐えられた

しかし、前兆もなしにいきなり…それも聴覚の発達したガレオスたちには大ダメージとなり、ガレオスは残らず全滅した

邪魔者を片付けたディアブロスは、改めて俺を見据える

直感が俺に告げた

コイツは危険だ…

「（モモ…移民たちを連れて、ゆっくり背から降りろ。そして、俺に構わず拠点へと向かえ。）」

「旦那さん何を……わ、分かったのニャ。」

俺と角竜のただならぬ雰囲気を肌で感じ、モモは素直に応じた

モモたちは角竜を刺激しないよう、ゆっくりと背から降りていく

俺とアイルーたちの焦りとは裏腹に、角竜は俺だけを睨みながら見据えている

（狙いは最初から俺か。）

モモたちが十分に離れたのを確認した俺は、角竜の様子を窺うべくゆっくり回り込もうとすると、角竜も俺の動きに合わせる

俺と角竜は円を描きながら距離を詰めていく

接近するにつれ緊張感は高まり、角竜の威圧感も大きくなっていく

この世界に転生して、二度目の飛竜との戦い

最初のフルフルは辛くも撃退したが、このディアブロスはそれを遥かに凌駕する飛竜だ

飛行能力が乏しい角竜と、翼自体が無い獣竜種は同じ土俵で戦えるが、はっきりいってこのディアブロスは俺よりも強い

恐暴竜と角竜といったら、恐暴竜の方が強いかもしれない

しかし、それは成長しきった成体同士の話しであり、今の俺は僅か二年生きただけでまだ未熟な部分がある

対してこの角竜は、俺よりも長い年月を生きてきたことが感じられ、俺よりも実戦経験は遥かに多いはずだ

何より、この亜種とも希少種とも格付けし難い朱色の角竜の力は未知数だ

お互いに睨み合っていたが、角竜の唸り声と共に、熾烈な闘争が始まった

最初に動きを起こした角竜は、身体を反転させ遠心力を活かし尻尾を振る

俺も間髪入れず尻尾で応戦し、互いの尻尾が激突して大きな衝突音が鳴る

尻尾の面積は俺の方が大きかったが、角竜の尻尾は圧倒的な強度としなやかさで、威力はほぼ同等…むしろ角竜の方が若干上手だった

鈍感なはずの尻尾から伝わる痛みに苦悶するが、角竜は逆方向に反転し、容赦なく尻尾をぶつけてきた

直前で防御したが、身体の側面を襲った衝撃に、俺は二、三歩後退りした

さらに角竜は追撃を加えるべく、二本の角を振りかざして突進してくる

攻撃の面で出遅れた俺だったが、角竜の突進を紙一重でかわし、角竜の側面に強烈な体当たりを敢行する

横からの衝撃によろけて転倒する角竜…

俺は親父に教わった対飛竜戦法、翼を鉤爪で押さえての攻撃をすべく、倒れる角竜に接近した

俺がその場を跳んで一気に距離を詰めると、角竜はすぐさま立ち上がって迎撃、宙に浮いていた俺を角竜は頭突きでふっ飛ばす

崖からの転落で鍛えた俺だったが、その時の痛みとは比べ物にならない激痛が、比較的柔らかい腹部を襲う

あまりの激痛に悶える俺に対し、角竜は容赦ない追撃をする

倒れる俺に向けて必殺の突進、俺はすんでのところで立ち回避でき、角竜は勢いを殺しきれず砂を滑っていく

俺が時間稼ぎをしたおかげでモモたちは見えなくなり、作戦はとりあえず成功した

このまま戦っても俺に勝ち目はない

後はこの角竜を撒き、安全に村へ帰還するだけだ

逃げ腰に見えるかもしれないが、親父に教わった教訓の一つ…”勝てない戦いはするな、自然界では生き延びた者が勝者だ”この親父の言葉が、しっかりと俺の中で活きていた

角竜が突進の後でもたついている隙に、俺は逃走をはかるべく走った

背後で凄まじい雄叫びが聞こえたが、俺は構わず走りつづける

今までに無いくらい全力で走る俺は、内心かなり焦っていた

目の前で逃走した俺に角竜は怒ったらしく、凄まじい速さで俺を追い掛けてきて、今では俺の真横を併走している

角竜は走りながら身体をぶつけてきて、俺もなんとか応戦するも、
勢いは角竜の方が強い

進行上の岩場に入れば、いくらか地形を活かした戦いが出来るが、
これではその前にお陀仏だ

焦る脳で対処法を考える俺に、賭けに等しい苦肉の策を思い付く

俺は今ある力をさらに振り絞り、走る速さを加速していく

角竜もそれに合わせ加速、後は角竜の体当たりを待つ

俺の目に大きな岩が見えた時、俺はわざと角竜に疲労の色を見せ付ける

角竜はそれを見逃さず俺に体当たりをし、俺は力一杯それに対抗する

そして大きな岩に近づいた時、俺は抵抗を止めて左に逸れていく

力のやり場を失った角竜は俺の動きに流されていき、俺はそこで身

を捻り尻尾で角竜の動きを後押しし、眼前の岩に角竜を叩き付けた

頭部を激突させることは失敗したが、角竜自身の突進と俺の力が加わり、凄まじい威力になったはずだ

俺は角竜に追撃をすることも、様子を見ることもせず、すぐさま岩場に入っていって身を隠した

「グッ……グガアァァァ！！！」

今まで味わったことのない屈辱……

角竜は憤怒の暴君と化し、砂漠の砂を掘り起こし、その巨大を砂中にうずめていった…

はぁ…はぁ……かなり危なかった、あのままいってたらマジヤバかったな！

とっさの作戦が成功して良かったぜ…。

なんとか追撃をかわした俺は、岩場に溜まった水溜まりの元で、疲れを癒やしていた

腹…減ったな。

あの激戦でかなり体力を消耗したようで、腹の虫が騒いでいる

水溜まりには草食獣がいたのだが、俺が来たためにいつの間にか逃げてしまった

キョロキョロ周囲を見渡しても見つからないので、仕方なくこの場

を移動する

角竜があの後どうなったか知らないが、少なくとも死んではいないだろう

となると、砂漠を進んで拠点に帰るのは危険なので、北の雪山方面を迂回して帰ることにした
それでも少しは砂漠を通るが……

メシィ…メシ……草食獣はどこにいる～

北に向かうついでにエサたるモンスターを探すが、一匹も見つからない

いたのは大嫌いなランゴスタだけだった

前に食べたのは数時間前だが、イビルジョーの俺から言わせてもらうと…人間にして丸一日何も食べないのと一緒だ

何も獲られないまま岩場を抜け、悪魔の棲み着く砂漠に出てしまった

空腹のまま角竜に遭遇したら、今度こそやられてしまう

俺はしばし躊躇したが、日影のところで砂がモフモフしていたので、
つい好奇心にかられて岩場を出た

もぞもぞと動く砂の所をほじくってみると、甲殻種の《ヤオザミ》
がいた

成長すれば盾蟹となる固体で、前に盾蟹を食べた時はなかなかうま
かった

俺はヤオザミを捕獲し、殻ごと食べてみた

盾蟹の幼体なだけあってなかなか美味だが、なにぶん小さいので、
ちっとも腹の足しにならない

俺は他にもいないか探してみたが、見つからなかった

俺は諦めて北へと向かっていく

途中底の見えない谷間が現れ、高所恐怖症の俺はゾッとした
谷の下からは水の音が聞こえるため、どうやら川があるようだ
深さの程は知らないが……

あぁもう…マズくてもいいから、ガレオスか何かこないかな？

俺の切なる願いが叶ったのか、俺の背後から何かが近づいてくる

ただし、それは俺が望んでいたものではなく、今最も望まないモンスターだった

「ガアアアァァァ！！！！！」

俺の目の前に現れたのは、命懸けで撃退したはずの朱色の角竜…

大変お怒りのご様子で、眼が殺人的なまでにぎらつき、口からは黒い息を激しく噴出している

俺の前には怒れる暴君、背後には闇の裂け谷…

行くも地獄、退くも地獄である

確実に追い詰められた俺だが、この状況は不思議にも、俺に冷静さを取り戻させた

窮鼠猫を噛む、背水の陣…今の俺にはこのことわざが当てはまるはずだ

怒り狂う角竜はさっきみたいに様子見などせず、真っ正面から突進する

「（ウリャアアア！！）」

俺は角竜の突進に真っ向から受け止め、全身の筋肉と脚の鉤爪を駆使し、角竜に負けない力を見せ付ける

角竜は一度後ろに下がり再び突進、今度は角で突き刺すつもりらしい

俺は瞬時に片方の角にかじりついたが、もう片方の角が俺の首に突き刺さる

首に激痛が走り、血がドクドクと溢れるが、俺は牙を噛む力を強くしていく

俺の噛む力と牙により、角竜の角が軋みヒビが入り、最後に力を入れて遂に角竜の角がへし折れた

だが角をへし折ったために角竜は自由となり、俺の頭部を突き上げ、身体を反転させて強固な尻尾で俺の頭を打ち抜いた

今まで味わったことのない衝撃が襲い、脳震とうを起こした俺はフラつく

倒れそうになるのを、辛うじて踏みとどまってはいるが、もう戦える余力は無い

角竜は自慢の角を一本折られたのみで、身体はほぼ無傷…

角竜の角は真っ直ぐ俺の心臓を狙っており、次の突進をくらえば確実に死ぬ…

角竜は容赦なく俺に突進してきたが、俺が谷の端に立つと、角竜は慌てて止まり、尻尾を地面に叩きつけて雄々しく吼える

俺が突進をかわせば角竜は谷底に落下する

”正々堂々、前に出て戦え”…そう角竜は言いたいのだろうが、俺にはそんな卑怯な考えはまるで無かった…

俺は純粋にこの圧倒的な強さを持つ角竜を賞賛していた

かといって、このまま無残にもやられるつもりもない

俺の帰りを待つモモや村長のためにも、生きて帰らなければならない

そして俺が唯一生き延びる可能性は、これしか無かった…

「（生きて逢えたら…また戦おうぜ。
それまで……無敵でいてくれよな…あばよ。）」

俺はニヤリと笑い、足場のない背後に後ずさった

最後に角竜と眼が合い、そこには怒りや憎悪の色など無く、俺への敬意があった気がした

俺は角竜に認められた満足感に浸り、暗闇の底へと落下していった

……

「（天晴れなり……いずれ我が強敵として立ちはだかること、心より愉しみにしておるぞ。）」

この朱色の角竜こそが、後に生涯のライバルになると共に、唯一無二の親友となる竜であった…

恐暴竜と片角の暴君、この二体が様々な伝説を作ることなど…今は誰も知らない

第九話：恐暴竜の奮戦、憤怒の暴君（後書き）

はい……

漫画読んだことも無いのに、片角のマオウ出してしまいました…

きっかけはディアソルテ装備を眺めてて、朱色のディアブロスかっこいいかな？

…と思ったからです

漫画を読んだこと無いので登場人物までは出せません

朱色の角竜はしばらく出番無いと思いますが、そのうち小説の重要な役柄につくかもしれません

補足

主人公は角竜にボロクソにやられたように思われるかもしれませんが、挙げましたとおり経験不足と年齢の差です

一番大きな要因は、怒りによる肉体の強化が出来なかったこと

人間の心を持つ主人公には、野生同士の戦いでは怒りに徹しきれな

いのです

第十話：少女と恐暴竜の邂逅

転生して溺れたのは二度目…

最初は島を出る時嵐に遭遇し、激しい波と風雨にもみくちゃにされ、呆気なく溺れた

俺は”砂漠の暴君”と死闘を演じ、この世界に転生して初めて苦戦を強いられた
角竜の重い攻撃を何度も身に受け、鋭い角に肉をえぐられた
最後に角竜の片角をへし折ったが、その後の一撃をかわせず…結果は惨敗

角竜の猛攻でボロボロになっていた俺は、深い谷に落下することで逃走し、幸いに谷の川は深く、深い水が落下の衝撃を消してくれた

ただ、激流の中で何度も岩にぶつかり、その度に傷口から血を流した……普通なら死んでしまうような怪我だが、俺は死ななかった

それは恐暴竜の持って産まれた耐久力と、親父に厳しく鍛えられた肉体と精神力があったからだろう…

からくも生き延びた俺は、緩やかな浅瀬に流れ着いた

俺は意識を保ちながら立ち上がろうとするが、足を滑らして転倒した

角竜につけられた傷、激流の川で新たにできた傷、それらから多量の血が流れており、今の俺には満足に歩ける体力は残っていない

今すぐに何かを捕食し、安らかな睡眠とで体力を回復しなければ……俺は朦朧とする意識の中でそう考え、川のそばにある針葉樹の森へと入っていった

針葉樹林に入ってすぐ、俺は獲物となる草食種のモンスターを見つけた

発見したモンスターは”ポポ”、反り返った大きな牙を持ち毛皮に覆われているが、その肉はとても上手く、またポポの舌は珍味と言われている

俺はポポの群に忍び寄るが、獲物にありつきたいという強い気持ちが滲み出てしまい、離れた位置でポポに察知されてしまった

ポポは一斉に逃げていき、焦る俺は慌ててその後を追うが、怪我のために足を引きずっている

ポポの群から一匹が遅れ、俺はそのポポに狙いを定め、一気に詰め寄って噛みついた

怪我で体力が低下しているとはいえ、俺の鋭い牙はポポを貫き、強靭な顎はポポの剛毛ごと食いちぎった

仕留めたポポをほぼ丸呑みにし、逃げるポポを追撃……大きなポポを二頭仕留め、その二体を喰った

ポポを三頭喰ってもまだ空腹感が残っていたが、すでに残りのポポはいなく、騒ぎでそれ以外の草食種も一匹残らず逃げていた

ただ傷がある上に…今気付いたが、自分がいる地面は白く雪に覆われ、空からも雪が降っている

こんな状況で獲物を探せば、空腹と捕食のいたちごっこがいつまで

も続く

俺は雪の積もらない大木の下に移動し、満身創痍の身体を横にする

ここまで傷ついた身体を動かしてきたのはほぼ気合い、それを解いて気持ちを緩めた俺は、一気に押し寄せる疲労感と眠気に負け、すぐに深い眠りに落ちていった……

《雪山・麓の村》

極寒の雪山の麓に位置する、小さな集落

近くにあるポッケ村に比べると知名度は無いが、寒さをモノともしない逞しい人間が住んでいた

村が麓にあってモンスターがあまり来ないのと、ポッケ村のハンターが活躍してくれるため、モンスターによる被害は無い

村の人々は雪山で採れる特産品を街で売り、雪山では手に入らない物資を買い、他は自給自足でまかなっている

「ママ！
畑仕事が終わったら、雪山草採りに行ってもいい！？」

村の畑で、少女の明るく健気な声が響く
少女は毛皮の暖かそうな衣服に身を包み、となりで畑仕事をする母親らしき女性も同様の衣服だ

「構わないけど、行く時はちゃんと準備して、ギアノスたちに気をつけるのよ？」

母親は畑を耕す手を止め、我が子の頭を撫でるが、少女は不満そうに頬を膨らます

「もう十二歳になったんだから、子ども扱いしないでよ！」

「はいはい、十二歳にもなって一人で寝れないのはどこの子かな？」

母親が笑いながら言うと、少女は慌てて周りの目を気にする
畑仕事をしていた農夫たちは母親の話しを耳に入れており、皆少女を笑いながら見つめていた

「雪山草採りに行く！！」

顔を真っ赤にした少女は、畑の横のかごを引ったくり、針葉樹林めがけ走り去っていった

「わはははは！！
相変わらずマリナちゃんは元気いっぱいだな！」

畑から作物を引き抜いていた農夫が、少女の消えた針葉樹林を見て大笑いする

「畑仕事を手伝ったりしてくれますが、まだまだ子どもですからねぇ。
ああやって、元気に走り回っている方がいいんです。」

母親は慈愛に満ちた笑みを浮かべた

《針葉樹林》

全く…みんなしてマリナのこと子ども扱いして！

確かに…確かに夜は怖くて一人じゃ眠れないけど、一人でおトイレに行けるよ！

それにこうやって一人で村の外に行けるし、外に出れない友達よりもずっと大人だもん！

この前なんか、追いかけてきたギアノスと駆けっこして勝ったもんね！

針葉樹林に入った少女”マリナ”は、誰もいないにも関わらず、自己主張を口にする

マリナの長所はその活発な性格と、ギアノスからも逃げ切れる優れた運動神経

大人でさえも手をやくギアノスに対し、幼いマリナは大人顔負けの動きでギアノスを相手取り、調子がいいときは逆に打ち負かす

マリナが村の外に出たがる理由はこれであり、ギアノス以外にもブランゴをからかいに雪山に行く

ただ今の時期は山に行く道が雪で閉ざされているため、雪山草を採るついでに針葉樹林に入ったのだ
針葉樹林は稀にギアノスが来る時以外、草食種ばかりがいる平和な森だ

マリナは針葉樹林に来ると、ポポの群れに混じって遊ぶのだが、今日に限ってポポたちが一頭もいない
森を歩き回ってみたが、ポポの姿はおろか痕跡が見当たらない

しばらく歩き回って諦めかけた時、雪面に残るポポの足跡を見つけ、マリナは期待に顔をほころばす

足跡の数はかなりあり、また何度も踏み荒らされてどっちに向かったか分からないので、自分の勘で辿ってみた

マリナは足跡を見下ろしながら進んでいくと、視界の端にポポの毛が映り、顔を上げた

しかしそれはポポだったもの……毛皮を喰い破られ、血で雪面を赤

く染めるポポの亡骸だった

マリナが最初に見つけた亡骸のそばに、同じく喰い荒らされたポポの死体……遠くに赤黒い物体が見えたが、それもポポの死体

突如モンスターの死体を見たマリナは腰を抜かし、雪の上に尻餅をつく

な、なんなのこれ…？
なんでポポが死んで…るの？
誰がこんな……もしかして…

マリナの頭に浮かんだのは、凶暴な肉食獣

ギアノスたちにはこんなに喰い荒らせないし、ドスギアノスにも無理
ブランゴはそもそも肉食ではない

残す可能性は飛竜種……だが、ここらで確認出来る飛竜は”フルフル”しかいない
しかしフルフルは麓に下りてまで、大きな体のポポを捕食しに来ないだとすれば誰も知らない、未知の肉食獣……

マリナは得体の知れないモンスターを想像し、その恐怖に体を震わした

今まで相手にしてきたギアノスやブランゴとは、格が違う
ポポを襲ったモンスターが現れたら、自分ごとき簡単に捕まえ、喰ってしまう

マリナには森の静けさが不気味に感じられ、モンスターが自分を狙っていないか周囲を見渡してみると、一つ目を引くものを見つけた

見つけたのは、ポポの亡骸の脇から地面に残る血痕

一見、ポポが引きずられて出た血に見えるが、地面の雪はえぐれていない……
そしてそこには、大きな足跡があり、足跡と血痕は針葉樹林の奥まで続いていた

マリナはモンスターへ恐怖を感じていたが、未知のモンスターを見たいという好奇心が強まり、ゆっくりその足跡を辿ってみた

針葉樹林を進んでいくと、一際大きな針葉樹に辿り着く
巨大な針葉樹の下には雪が積もってなく、足跡はそこを通ったらしく足跡は消えていた

マリナがため息をつき、ふと横を見ると、大木の横には黒緑の巨大なモンスターがいた

マリナは悲鳴をあげそうになるのを、手で口を覆って止めた
幸いモンスターは寝ているようで、マリナに気付かず静かな寝息をたてている

マリナは慎重に近付き、その凶暴そうなモンスターの姿を見る

牙獣種であれば体毛があって四肢が発達しているが、このモンスターは後ろ脚のみが発達している

飛竜種であればつがいの翼があるが、このモンスターにはそれがない

こんな特徴を持つモンスターは見たことがないし、聞いたこともない…

マリナが自分の知識を思い返していると、一つ思い付くものがあった

モンスターにはそれぞれ特徴があり、二本の足で歩き翼を持つ竜を飛竜種、牙があり哺乳類型の獣を牙獣種、飛竜の翼の代わりにヒレを持つ魚竜種など…自然界に生息するモンスターは、学者や研究者の決めた分類に当てはめられるが、中にはそれらに当てはめるのが難しいモンスターがいる

あらゆる生態系から逸脱し、強大な力と驚異的な生命力を持つ生物…それらはまとめて”古龍”と呼ばれている

目の前にいる竜は、マリナが今まで見たモンスターとは異なる構造をし、また知る限りの分類には当てはまらない

さらにさらに、もしかしたらこの竜は新種の古龍で、それを見つけた自分は大発見をして有名になるのでは？

…と胸を踊らせていたが、改めてこの竜を見ると痛々しい傷が無数についていることに気付く

傷口から微量の血が流れ、雪山の寒さがこの竜に一層負担をかけているようだ

このまま放置したら、この竜は死んでしまうかもしれない……マリナはいてもたってもいられず、目の前の竜に近づいていった

傷は最近出来たもののようで、傷口が真新しい

マリナはかごから雪山草と一緒に採れた薬草を出し、それをすりつぶして竜の傷口に塗っていく

時折竜がピクリと動き、そのたびにマリナはビビるが、起こさないよう慎重に傷を癒やしていく

薬草が無くならないうちに治療を終え、竜も起きることはなかったただ傷を癒やした後の竜は、治療する前より心地良さそうに寝息をたてており、一仕事終えたマリナは満足げだった

後はこの竜が起きてくるのを離れて見ていたが、結局起きず、日没が近づいてきたので一旦帰ることにしたが……

「（ありがとう…。）」

「…え……誰？」

突然聞こえた言葉に、マリナは声の主を探してキョロキョロと辺りを見回す

「…気のせいかな？
ここにはマリナとこの子しかいな……。」

マリナが竜に振り返ると、竜も同じくマリナを見つめていた

緊急事態にマリナが固まっていると、竜はゆっくり口を動かした

「（怯えないでくれ…俺は君を襲いはしない。）」

今度ははっきりと、竜の口から言葉を聞いた
しかしそれは有り得ないこと……モンスターが人間の言葉を理解することも、人間がモンスターの言葉を聞くなど不可思議なことだ

「き…君は、人と話せるの？」

マリナが竜に問い掛けると、竜は首を振って否定した

「（すまない…今は答えられそうもない。
少し…休ませてくれ。）」

竜は持ち上げていた首を下ろし、静かに瞼を綴じてしまった

竜がとても疲れていることは分かっており、マリナも帰らなければならないので、聞きたいことはまた今度にしようと決めた

「また来るから…ちゃんと休んで傷を治してね？
バイバイ。」

マリナは寝てしまった竜に手を振り、急いで村の方角へと走っていった

手負いの竜は少女の後ろ姿を見据えていたが、やがて竜は深い眠りへと戻っていった

第十話：少女と恐暴竜の邂逅（後書き）

次も似たような…感じ？

第十一話：俺ロリコンじゃないよ？（前書き）

１５０，８０５ＰＶだって！？

いつの間にこんなに…感動です

第十一話：俺ロリコンじゃないよ？

「ママ！！
今日も雪山草採ってくる！」

麓の村の元気少女は、畑仕事をする母親の後ろ姿にそう叫び、返事も待たずに針葉樹林へと走っていった

母親が娘に振り返る時には、すでに娘の姿は小さくなっており、針葉樹林に入っていくところだった

娘のわんぱくぶりに母親は呆れてため息をつき、切り株に腰かけて休憩する
休む母親にもとに、数人の村人が軽いおつまみを持って来た

母親はありがたく村人の厚意に甘え、村人たちもまじえて小休憩する

人が集まると会話が生まれるが、娘であるマリナの話題がほとんどだ
マリナのわんぱくぶりと親孝行は村で有名である
また、幼いながらも顔立ちはすでに良く、同年代や稀に大人たちをメロメロにしている
もちろん大人は決して手を出さないが、同年代の少年たちはマリナ

の気をひこうと、あれやこれやアピールするも玉砕

普段マリナは、畑仕事を手伝いっているためその邪魔を出来ないし、マリナの大人びた性格に少年たちはなかなか絡んでいけない
さらにマリナは暇さえあれば外界に出るが、少年たちは怖くて出れない…これらが男友達に興味を示さない理由でもある

マリナは自分より劣る異性には決してなびかない、気高く孤高の存在……と、マリナ自身が言っていた

村人たちはマリナに突撃し、打ちのめされて帰って来る少年たちを見て笑い、よく少年たちを慰めている

「あの勢いでやってたら、すぐ百人斬り達成しちゃうんじゃないか？」

村人の一人が、マリナの愛の告白を蹴る様子をたとえると、他の村人や母親は笑った

「そうなりそうで怖いですが…機会を見逃して欲しくないです。」

母親は遠い目をする

成人を迎えていない今だから笑えるが、大人になってもこのまま生きていけば、婚期というものを見逃してしまうかもしれない

「わはははは！
大丈夫ですよ、まだ異性を意識しないだけで、十五にもなれば立派な女の子になりますよ！」

「そうだといいですが…。
それにしても、最近マリナはよく外に行きたがるわね。」

「ありゃ？
奥さんがマリナちゃんにお願いしてるんじゃないんですか？」

村人が意外そうな表情を浮かべたのに対し、母親は首を横に振る

「雪山草を採ってきてくれて助かるんですが、ただ心配で…。」

「マリナちゃんのことだから大丈夫だと思いますけど、今日は森に用事がありますんで、その時は様子を見てきますよ。」

「すみません、よろしくお願いします…。」

《針葉樹林》

長く降っていた雪は止み、針葉樹の葉と地面は美しい雪景色に様変わりした

ただ針葉樹に降り積もった雪も、先ほどから森に起きる振動で、パラパラと地面に落ちていく

森の中心には木々の背丈と同等の体格を持ち、強靭な足で力強く大地を踏みつける竜…

数日前にこの雪山のフィールドに流れ着いた俺は、空腹を僅かに満たし、寒さを感じながら無理に睡眠をとっていた

傷と寒さで体力を消耗していく中、俺は一人の少女に出会った

俺の傷を癒やしてくれた少女を見ると、恐怖に固まっていたが、俺は穏やかな声をかけて少女を安心させた

体力が無い俺はすぐに寝てしまったが、少女はまた来ると約束し、帰っていった

翌日、少女は言った約束した通り俺のもとにやって来た
まだ俺に怯えていたが、昨日同様優しく声をかけると、緊張をほぐしてくれた

それから少女は、傷ついた俺のために薬草を採り、たまに調合した回復薬までくれる
動けない俺のため、かき集めた食料を持ってきてくれて、寒い日には辛い食べ物までくれた

少女の看病のおかげで俺の傷はあっという間に癒え、数日もすればもとのように動けるまでに回復した

今俺は、鈍った体をほぐすように動かし、走ったり地面を踏みならしたりしている
瀕死に追い込まれた後回復した俺は、以前よりも強くなった気がしたが、俺の考え通りであった

足を上げて大地を踏みつけると、凄まじい地響きと亀裂が生じた他、衝撃波で積もっていた雪までも吹き飛んだ

死に際から復活して強くなるなんて、どこのサ〇ヤ人もとい、どこのバ〇ダックだよとツッコミをいれる
おそらく俺を転生させてくれた神さまが、オマケで付けてくれた能力なのだろう

俺は現状の力に満足し、次に太めの大木を見据える
近寄って首を傾け、大木の幹を軽く噛んでみると、まるでチーズを噛むかのように簡単に噛み千切った
次に尻尾を振るって大木に当ててみると、大木は簡単に折れ、その抵抗の無さから小枝に思えた

「モンスターさん！」

自分の実力を確認中に少女の声が聞こえ、俺は声の聞こえた方角に首を傾け、少女の呼び声に応えるべく鳴いた
どうやら死に際からの強化は俺の肺活量までに及んだため、鳴いたというより吠えたで、無意識に普段の咆哮くらい大きかった
俺の大きな声のせいで森が揺れ、走ってきた少女は驚いて前のめりに転倒する
これからは力を制御しなければ……そう思っていると、起き上がっ

た少女が俺を睨んできた

「いきなり大きな声出さないでよ！
驚いて転んじゃったじゃない！」

「（すまんすまん…人間相手には初めてだから、手加減出来なかった。）」

俺が素直に謝ると、少女はニコッと笑い機嫌を戻した

「謝ってくれたから許してあげる！
でも、次やったら許さないからね？」

少女は腰に手を当てて上目で見つめてくる

おや？
なんなんでしょう……この少女の仕草と上目遣い、見てるとなんかこう……胸の鼓動が高まってくる感じだ

俺は首をブンブン振り、この感覚は単に小さい子どもと遊んで楽しいからだ、と思い込む

「それより、もう体は動かして大丈夫なの？」

「（おう、嬢ちゃんの看病のおかげでこの通りだ！）」

元気なことを見せ付けようと地面を踏みつけると、衝撃で木に降り積もった雪が少女に落ちた

雪に半身埋もれた状態で少女は白々しい目で、無言の圧力を当ててくる

泣かれたり騒がれたりしたらと、俺は慌てて全力で謝罪する

「全く…ワザとやってるなら、本気で怒るよ？」

「（め、面目ない…。）」

少女は俺が謝ると快く許してくれる
優しいのか？

「（それより、嬢ちゃんは『マリナ！』…は？）」

少女は俺の話しを遮ると、なにやら誇らしげに…無い胸を誇張する

ふむ……自分はこだわり持ってなかったが、貧しいのもなかなか……って、何考えてんだ俺は？

「私は嬢ちゃんじゃなくて、マリナっていう名前があるの！だからマリナって呼んで！」

「（ああ分かったよ嬢ちゃ…じゃなくて、マリナちゃん。）」

俺が少女をマリナと呼ぶと、少女はやはり機嫌良さそうに笑うあと、名前の後に”ちゃん”を付けることも拒否された理由は子ども扱いされてるみたいだから…と

幼女の言いなりになってる俺って…世間からどう見られるんでしょう？

「（続きの話しだけど、毎日俺のところに来て、マリナの家族は心配してないの？）」

「うん、大丈夫大丈夫！

雪山草採りに来てるって言ってるから、何の心配もないよ！」

「（ありゃ、そうなの？）」

心配をする俺に対し、マリナは笑いながら言う

話しを聞くとマリナは家の手伝いとして、特産の雪山草を採ってくるらしい

こんな歳で親孝行なんて大した子どもだ

そういえば俺は親孝行どころか、親父のスパルタ教育で忙しく、それすら考えたこと無かった

元の親はどうでもいいが、こっちのイビルジョー親父に何かしてやりたい、そう切実に思う俺だった

「（親孝行なんて、今時珍しいことだな。
大した心掛けだよ。）」

「うん。
マリナがパパの代わりにママのお手伝いするんだ！」

スゴいな……父ちゃんはどっか出稼ぎにでも行ってるのかな？

「パパは街の方でも結構有名で、とっても強いハンターだったんだ！」

なぬ…”ハンター”ですと！？

”ハンター”

言わずと知れた大自然を相手にする狩人のこと

植物を採集して魚釣りをしてるならまだしも、ハンターは俺たちのような、所謂大型モンスターに挑んで来るので、お互いに敵視している

俺はまだハンターとは遭遇してないが、太刀やらハンマーでタコ殴りなんてまっぴらなので、出来れば一生会いたくないと思っていた

そのハンマーさんが、目の前にいる少女の父親だと！？

コイツはマズい…もし親父さんがやって来て、ハンターにまとめて

かかられたらボコボコにされて剥ぎ取られちまう！

そんであれか！？
ヤッパリ俺の素材は装備に使われて、自分を殺した奴の身体を守るってのか！？

か、神さま助けて！！

「アハハ！
そんな顔しなくても大丈夫だよ！
パパはもうこの世にいないから、モンスターさんが狩られたりしないよ！」

俺はマリナの言葉を聞いて安心したが……サラッとマリナはとんでもないことを言った気がする

「うちのパパは何年か前、モンスターとの戦いに負けて、帰らぬ人になったの。」

マリナはまるで父親の死が何ともないかのように、笑いながら語っている

俺が笑顔で語る理由を尋ねると、マリナはこう返した

「パパが死んだって聞いた時は悲しかったけど、いつまでも悲しんでいられなかったの。だって私にはママがいるし、パパの代わりに私がママを支えないといけないから。」

この娘はとても強い…

普通なら父親を無くせば悲しみにくれ、頼れる存在である母親に泣きつくはずだ

それがこの娘はどうだろう？

母親にすがりつくどころか、悲しみを克服し、母親を支えていたというのだ

「それにパパは人間の領域の外…弱肉強食の世界を相手にしてたんだから、命を落としても恨み辛みは無しだよ！」

弱肉強食か……どこぞの包帯姿の大悪党も言ってた気がする

弱ければ死に、強いものは生き残る

人間同士ではどうしても私怨が生まれるかもしれないが、異種族間では食うか食われるかであり、生存競争である

モンスターにやられたからといって、モンスターを恨むのは筋違い
領域を犯し自然界に入ったからには、人間も弱肉強食の世界に足を
踏み入れたことになるからだ

本当によく出来た娘だ…
俺がまだ覚悟してないようなことを、幼子のマリナは既に身に付け
ているのだから

「（うんうん…マリナはたくましい娘だね。
お兄さん感心しちゃうよ。）」

俺はマリナの心構えを純粋に讃え、誉め上げたつもりだったが…
どす黒い殺気と何かがブチッと切れる音が聞こえ、俺は恐る恐る顔
をあげる
目の前にいるのは可愛らしい少女のマリナなどてはない！
笑顔だが頬を引きつらせ、背後に鬼の姿が浮かんできそうな夜叉だ！

「（あの…マリナさん？
なぜそんなに素敵すぎる笑顔を浮かべているので？）」

「あんた今子ども扱いしたでしょ？

マリナはね……子ども扱いされるのが、ごはん盗られる次にイラつくの！」

「（ま、待て！
俺がいつ子ども扱いし『問答無用！！』

イタいイタい！
雪玉を投げないで！！

プッツンしたマリナは雪を力強く握り、固くなった雪玉を俺めがけ投げまくる
なんだか知らないが、親父のスパルタ特訓による防御力は大抵の攻撃を弾くが、幼女の怒りの攻撃にはなすすべもないようだ

雪玉でボコボコにされた俺をよそに、マリナは雪だるまを作って遊んでいる

全く…雪だるまを作って遊ぶなんて、どう見たって子どもじゃないか

「ねぇ…今マリナのこと馬鹿にしたでしょ？」

「（！？
イイエ…ソンナコトハ。）」

俺の心を読んだかのように言うマリナに、俺は心臓が飛び出る思いをした
竜だから冷や汗はかかないが、人間であったのなら滝のように流れていることだろう幼児体型マリナが俺に向けてくる蔑むような目つき……

これはなかなかクセに……ハッ！？
いかんいかん、何だか最近俺の中身がおかしくなってるな

妙な感情を打ち消そうと首を左右に振っていると、マリナに小枝で刺された

「全く…みんなしてマリナのこと子ども扱いするんだから！」

「（いやいや、実際まだまだ子どもでしょ？）」

俺が笑いながら穏やかに言うと、今度は十分に殺気のこもった睨みをくれました
ハハ…この娘がハンターにでもなったら、古龍をソロ狩りしちゃいそうですね

「そういうアンタはどうなの！？
モンスターだから分からないけど、せいぜい二歳くらいでしょ！？」

マリナの言った言葉に俺はとぼけてみせたが、本当はかなり動揺していた
前世の年齢と合わせれば二十代の俺だが、転生後は生まれてまだ二年
モンスターが何年生きたかなど、動けなくして充分に調べなければ分からない
さらに、モンスターの専門知識を持つ学者やハンター以外には、皆目見当がつかないはずだ

そういえば、マリナはハンターの娘だと言っていた
もしかして、父親からモンスターの年齢を読み取る方法を伝授されたのでは？
…と思い問い詰めたところ『カン』だそうだ
いやはや…この年齢で女のカンを身に付けているとは、ますますただ者ではないな

「結局のところモンスターさんは何歳なの？
やっぱり二歳？」

ここで下手なこと言うと見破られるが、年下だと明かせば絶対に調

子に乗るので…

「（俺は二十年以上生きてるかな？
詳しい年齢は忘れた。）」
嘘は言っていないはずだ…
俺は転生してからの年月と、転生前の年齢を合わせた数を言った
詳細な年齢は本当に忘れたが、年齢は二十代のはずだ……たぶん

「ふぅん…二十代ねぇ。
それにしては身体が若々しい気がするけど、モンスターと人間とじゃ常識違うもんね。」

とりあえず信用してくれたみたいで、ホッと胸をなで下ろす

「マリナより年上なら…今日からモンスターさんは私の兄ちゃんだね！」

「（は？兄ちゃん？）」

マリナはとびっきりの笑顔を俺に向けてくる

「（いやいや…何で俺が兄ちゃんなの！？）」

「だってモンスターさんは私より年上だから、それにお兄ちゃん欲しかったし。」

「（いやそれにしたって『だめかな？』うぐっ！？）」

マリナの涙ぐんだ上目が、俺の精神に直接攻撃！
先ほどの夜叉とは打って変わって、まるで小動物のように佇む
俺はつぶらな瞳で見上げてくるマリナを、今すぐ抱き締めてお持ち帰りしたかったが、生憎イビルジョーの俺は手が短い！！

声を出さずに悶絶する俺
対してマリナは、俺に拒絶されたと思ったのか、表情がだんだん泣き顔に変わっていく

「（俺が悪かった！！
兄ちゃんって呼んでいいから、泣かないでくれ！）」

恐暴竜にしては情けない状況だが、女は泣かせるな……と、親父が言ってたような気がしてたので、俺は慌ててマリナをあやした
あの親父のこと…言いつけを守らなかったら、感知して殴りに来そうだ

「グスッ……ごめんね。

もう馴れ馴れしくしない……でも、マリナのこと嫌いにならないで？」

「（もう兄ちゃんでいい！
好きに呼んで……いや、兄ちゃんって呼んでくれ！）」

何かがおかしくなってる気がするが、これ以上子犬のようなマリナを見ていたら、俺の理性が持たなくなる

プライドを捨てた俺の行動が功をそうし、マリナは泣くのを止めた

俺は泣き止んでくれたマリナを見て安心する

涙を拭かずに笑顔を向けてきたため、マリナの目尻には涙が溜まり、それから綺麗な雫となって頬を伝う

少女の放つ純真無垢な笑顔を見た直後、俺の胸は高鳴った…

この胸の高鳴り、ときめき……これが《鯉》というものか！！

《鯉》とは何か…
俺は前世でそれを確かめるために、雷オヤジ邸の池に忍び込んだ！
結果は惨敗！
《鯉》とやらを知る前に、雷オヤジの脅威を知ったぜ！

《鯉》とは魚であり、モンハンの世界でいうところの《春夜鯉》だな！！

「兄ちゃん、何一人でぶつくさ言ってんの？
変な風に見られるよ？」

「（ありゃ？
夢でも見てたのかな？）」

見れば、マリナの表情は元に戻り、さっき感じていたときめきもきれいサッパリ無くなっている

「（ん～、俺って何言ってたんだ？）」

「兄ちゃんが知らないならマリナも知らないよ。」

俺は首を傾げていると、森の奥から雪を踏みしめる音が聞こえた
とっさにその方角を見てみると、白い防寒着を着用した人間が数人いた
人間は俺とマリナを見て驚き、手に持った農具を構えて叫ぶ

「マリナちゃん！！
そいつから離れるんだ！」

「（ヤバっ！！
とうとう見つかった！）」

俺の声を聞いた村人はさらに焦り、急いでマリナのそばに駆け寄った
そして村人はマリナをかばうように、俺と対峙する

「おじさん！？
なにしてるの！？」

「なにって…目の前のモンスターが見えないのか！？
それにコイツ…見たこともないモンスターだぞ！」

村人たちもいくらかモンスターを見てきたが、目の前の竜は飛竜種とも牙獣種とも違う体つきをしている
飛竜のような翼は無いが、強靭な後ろ脚と水竜に匹敵する体躯…そして首のあたりまで裂けた大きな口と、そこに並ぶ凶悪な牙に村人たちは戦慄する

村人たちは固まって、俺はどうしていいか分からず動かないでいる
動いたものといえば、村人を押しのけて前に出るマリナだけだ

「全く…おじさん、兄ちゃんに迷惑かけないでよ。」

マリナは恐れることなく俺の元に歩み寄り、首を撫でて危険でないことを見せ付ける
凶悪な竜に慣れ親しむマリナを見て、村人たちは驚きのあまり絶句する

「マ、マリナちゃん…き、危険じゃないのかい！？」

「大丈夫だよ。
兄ちゃんはこっちから手を出さなければ、襲ってこないよ。」

マリナは俺の体を撫でながら語るが、モンスターが人間と…ましてや肉食獣と仲良くするなんて、村人たちは信じられないだろう

「え、そうなのかい？
てっきり…マリナちゃんを食べようとしてたのかと。」

「兄ちゃんはポポ以外食べないから安心して！」
「わはははは！
マリナちゃんが言うなら、そうなんだろうな！」

この村人たちはお人好しなのだろうか？
マリナが言うなら…って、どういう理由だよ！？
目の前の俺に喰われるとか、あぁマリナは頭がイかれてるんだ、とか思わないのか？

その他もろもろあるが、マリナに睨まれてるので止めた

そしてその後に聞いた言葉に、今度は俺が驚愕する

「マリナちゃんの友達なら、村人みんなの仲間だ！
よっしゃ、村に戻って歓迎会だ！」
「良かったね、兄ちゃん！
今日から晴れてマリナのお友達だね！」

マリナと村人は狼狽える俺を無理やり村へと引っ張っていく

これは悪い夢だ…
モンスターがこんなに人間に受け入れられるはずがない！！
やはり俺は、村中のハンターにボコボコにされるんだ！！

クッ、なんでこうなった！？
そうだ、恐暴竜に転生させたあの偽神さまのせいだ！
神さまの大バカ野郎！！
アオアシラにやられちまえ！！

――――――――――

神「ブワックション！！
ちくしょう…。」

天使「どうしたの、○○ちゃん。」

神「なんや知らんけど、めっちゃ腹立つわ。

ウチの噂しとるんは、誰や一体…ったく。」

天使「〇〇ちゃんも大変だね……あ。」

神「なんや…あ！？
このボケアオアシラ！
なんでオドレが罠にはまんねん！
どっか行っとれやカス！！
んなっ！？」

天使「ごめ～ん、ジンオウガにやられちゃった。」

神「やられたって…三乙やないかい！！
どないな弱さやねん！」

天使「二回やられたのは〇〇ちゃんですよ！」

神「や、やかましい！
ウチは何回やられてもエエんや！」

天使「うわっ…ズルいです！」

神「うっさい！
オドレは隅でハチミツでも採集しとれや！」

今日も神さまと、愉快な仲間は平穏だった…

第十一話：俺ロリコンじゃないよ？（後書き）

更新遅れてすみません

やっぱり主人公を適当に遊ばせとくのが、一番書きやすいですね

余談ですが……

神さまは上位ランクに上がれました

第十二話：恐暴竜の弟子？（前書き）

なんか……主人公がいい具合に変態化してる気が…

第十二話：恐暴竜の弟子？

「竜ちゃん、今度はこっちを頼むよ。」

「ギャウ！！」

麓の村から少し離れた位置にある針葉樹林
そこでは数人の村人が木を伐採し、それを手助けする巨大な竜がいた

死を覚悟して村に案内された俺だったが、予想外に村人は俺を殺そうとはしなかった
最初は俺を恐怖の眼差しで見ていたが、マリナの話しを聞いて警戒を解いてくれた

逆に俺は、そのお人好しな態度が怖かった
俺が油断した隙に襲いかかってくるのでは…と、俺はいるはずのないハンターに怯えていたのだ

そんな俺の不安を一蹴してくれたのは、初めて会った人間のマリナだった
マリナは俺を村に馴染ませようと、いろいろ画策してくれた
マリナの純粋さと村人たちの暖かい歓迎に、俺は少しづつ警戒を解いていったのだ

人間に馴れた後は、ただ何もしないでいるのは癪なので、木々の伐採を手助けしている

太い木を一噛みでへし折り、何本もの木々を引っ張る俺は、村人からかなり頼られていた

ただし、いつまでもここにいるわけにはいかなかった……

「（そろそろ潮時かな…。）」

最初は気にとめてなかったが、最近では深刻な事態となっていた

それは……捕食対象であるポポが激減したこと

理由は勿論、恐暴竜である俺の暴食が原因だ

俺の知性と理性が過激な捕食を防いでいるが、寒さでスタミナの減るこの地域では、否応無しに捕食回数が増えていた

１日に５頭、多い時には１０頭以上も捕食する

ポポだけでなく、ガウシカやファンゴですらも捕食するが、腹を満たすには圧倒的に足りない

本来俺のような竜は、テリトリーを持たずに広い地域を移動し、同じ地域に長くいてはならなかった
それは恐暴竜が食欲を満たすために捕食を続け、最悪の場合にはその地域の生物を絶滅させるからだ

幸いこの近くはまだ壊滅していないが、時間の問題だ

一度ふざけて村を離れ、捕食しなかったらどうなるか試してみたが……あんな体験は二度とごめんだ

雪山の寒さが体力低下に拍車をかけ、数時間も経たないうち空腹感がおとずれる
それから全身に苦痛が襲った
目は血走り、口からは強酸性の唾液が溢れる

半日もすれば意識朦朧の状態となったため、俺は危険だと感じて急いで捕食した

あのまま日没まで捕食しなかったら、理性が消え去り、目に映る全てを喰らい尽くす恐ろしい捕食者と化していただろう

これ以上止まったら、村人ですら喰ってしまうかもしれない
それに、俺の帰りを待つ猫たちのこともある…

俺の考え通り……そろそろ潮時だった

「エエエェェ！？
村を出ていっちゃうの！？」

マリナは俺の言葉を聞いてとても驚いた

マリナよ、驚いたとはいえ大口を開けて…その、可愛い顔が台無しだぞ？

今俺は村人の集まる広場にいて、対話するマリナと俺を、村人がぐるりと囲んでいる

ちなみに、俺の言葉が分かるのはマリナなだけだ
ずいぶん都合のいいことだが、おそらくあの神さまが何かしたのだろう

「なんで！？
せっかく仲良くなったんだから、もっと一緒にいようよ！」

そう言われても…ねぇ？
村人たちに目を向けると、揃って頷いてみせた

村人たちには前もって、身振り手振りで出て行きたい理由を告げていた
モンスターの身振りで理解するって…都合の良すぎる話しだが、この際無視だ！

ポポは村人にとっても無くてはならない存在だ
ポポの毛皮・肉・牙は村人の衣食住に使われるためだ

俺がここに居座れば、どっちにしろ村に被害がくる

いくらマリナでも、そういった事情はまだ分からない
マリナは村人たちに説得するよう頼むが、村人たちは皆難しい顔をする

村人たちも俺が出て行くことを望んでいないが、村の存亡とは引き換えられない

何より、これは俺が決めたことだ
誰にも止められない

村人たちに説得してもらうのを諦めたマリナは、涙目になって俺を見つめる

そんな目で見ないでくれ……これはマリナのためでもあるんだ

「（二度と会えないわけじゃないんだから心配すんな！ちょっくら気ままに旅するだけだからさ！）」

「ウソだ…。」

「（俺がウソついたことあるか？）」

「何回もある…。」

ガクッ――俺はずっこけそうになるのを耐えたマリナよ、そこは普通肯定するところだぞ？

「兄ちゃんは外を旅して何をするの…？」

「（ん～気ままに、目的もなく、おもいついた行動のままに…かな？）」

正確には拠点のアイルーたちを守りながら、モモと一緒にだがな

「なら、マリナも兄ちゃんについて行く！」

「（なにぃ！？）」

マリナのその言葉に、俺だけでなく村人たちも驚愕する
ただ一人、村人に混じるマリナの母親だけは、険しい表情をしていた

「（待て待てぃ！！
なんでマリナまでついてくる話しになるの！？）」

「せっかく仲良くなった兄ちゃんと離れたくないから。」

クッ…なかなか嬉しいこと言ってくれるじゃないか

困った俺は、村人の顔を眺め回してマリナの母親を捜すが、母親の姿はなかった

母親に何とかして言いくるめて欲しかったが、いないなら無理だ

仕方ないな……

「（ダメだ、マリナは連れて行けない。）」

「なんでよ、外を旅するくらいいいじゃない！」

「（ダメだ！！）」

俺は今まで発したことがない、怒気を含んだ声で怒鳴る
マリナは俺のただならぬ雰囲気に、開いていた口を閉じる

「（外を旅するくらい…？
外の世界は、そんな生ぬるい考えで生き残れる世界じゃないんだ。
弱ければ死に、強者のみが生きることを許される、弱肉強食の世界だ。

この地では俺が一番強いかもしれないが、外には俺を超える強さの化け物が腐る程いる！）」

マリナは俺を治療した時に見て、感じたはずだ
こんな強そうな、恐ろしい竜にこんな深手を負わせる存在がいるのか…と

「（外にはお前が相手にしてきた、ギアノスやブランゴなど霞むくらい、遥かに強力なモンスターがいる。
仮にお前が無理やり付いて来たとしても、俺は自分の事で手一杯…
お前を助ける程の余裕はない。）」

俺はマリナに厳しい現実を叩きつける
幼い少女にはキツい言い方かもしれないが…
俺の目から見て、マリナが自然界に出て生き残れるとは到底思えない

強靭な体躯を持つモンスターならともかく、マリナはロクに鍛えられていない華奢な少女だ
外に出たら真っ先に死ぬ

俺がここまで強く否定するのは、マリナに死んでほしくないからだ

マリナは何も言い返せず、黙って俯く

ここまで言えば、マリナも考えを改めてくれるだろう
見てみると、さっきまでいなかった母親も姿を見せた
後は、母親が娘に言い聞かせてくれるはずだ

母親はマリナのそばに歩み寄ると、そっと肩に手を触れる

「グスッ……ママ？」
「…あなたが外の世界に憧れるのは分かるわ。
だけど、外はマリナが思ってる以上に危険な場所なのよ？」

うんうん…もっと言ったれママさん！
俺は母親の言葉に頷きながら、母親を心の中で応援する

「マリナが命を落とすのは、私も父さんも望んでいないわ。
だから……これを持っていきなさい。」

いいぞもっとや……なに？
俺が一瞬理解出来ないでいると、母親はマリナに何かを渡した
布に入って分からないが、それは細くとても長いものだ

「ママ…これは？」

「父さんの形見よ。
持っていれば、父さんも見守ってくれるわ。」

マリナは母親の顔を見上げた後、重く長いものを包む布をとる
現れたのは、身の丈を遥かに超える長さの武器
蒼い鞘に紫の帯が絡みつき、鞘から引き抜いた刃は銀色に煌めいていた

武器を見て驚く娘を満足げに見つめた後、母親は俺の方に近づいて来た

「せっかく引き止めてくれたのに…ごめんなさいね竜ちゃん。
だけど、マリナはああなったらもう止まらないのよ。」

「ガウッ！」

「反省するわ……だけど、無理を承知で頼みたいの。
マリナを…父さんが見続けてきた世界に連れて行ってもらえないかしら？」

どうやらマリナのママさんは、マリナが外に出ることを後押ししてくれているようだ

娘の後押しをする母親、感動ものだね……って違ァァァう！！
なにやっちゃってんのママさん！？
言葉分からなくても、今までの雰囲気で分かるでしょ！？
俺はマリナに危険がないように、厳しいこと言ってまで止めたんだよ！？

「ママ…ありがとう。
父さんの武器があれば勇気を持てるし、頑張れる気がしてきた！」

いや…勇気を持たなくても頑張らなくてもいいんだよ？
あれ…？
なにこの雰囲気？

いつの間にか村人たちは、抱き合う親子を囲んでいた
それはまるで、母親から旅立とうとするマリナを祝うかのような…
実際そうなのかもしれない

マリナはそっと母親から離れると、なんとも晴れ晴れとした表情で
俺を見る

他の村人たちは、”頼んだぞ”とでもいいたげな視線を向けてくる

あら…？
ここでまたマリナを拒否したら、俺が悪者になるのは気のせいか…
…気のせいじゃないな

さっき母親が言った通りなら、断ってもマリナは無理やりついてく
るな

俺は盛大にため息をこぼし、とうとう折れた

「（分かったよ…選択間違えたら、寝覚めが悪くなる。
しゃあない、連れて行ってやるよ。）」

途端にマリナは歓喜し、弾丸のように俺に抱きついてきた

抱きついてきたというより体当たりで、俺の腹部を強烈に痛めつけた

「（ウググ……た、ただし条件があるぞ？
外では勝手な行動は控えること！

それから……三年間俺の元で修行し、強くなってから自然界に出る
ことだ！）」

腹の痛みに耐えて、何とか言葉を絞り出す

マリナを強くするというのは、やはりマリナを死なせないため

自分のことで手一杯とはいえ、何もしないでマリナを見捨てるほど
薄情ではない

せめて、マリナが一人でも戦えるくらいは強くしてみせる

「うん！兄ちゃんに強くしてもらえるなら、マリナはどんなハンターよりも強くなっちゃうからね！」

諦めた俺はマリナを不本意ながら引き取る

その日のうちにマリナは出立の準備を済ませる

マリナを乗せた俺は村人たちに見送られ、内心かなり後悔しながら拠点へと旅立つ

「エヘヘ…楽しみだね、兄ちゃん！」

マリナよ、俺はかなり鬱だぞ

背中ではしゃぐマリナとは対照的に、俺は暗く沈んでいた

マリナに何かあったらどうしよう？

怪我をしたら、病気になったら、いなくなっちゃったらどうしよう？

マリナにもしものことがあったらと思うと、俺の胃がキリキリ痛む

はぁ……せめてハンターくらい強くなることを祈ろう

……ハンター？

悩む俺の頭に、一つひらめきがおとずれた
現状を嘆くよりも、それをポジティブに考える

俺の背には幼い少女のマリナがいる
俺はロリコンじゃないが、マリナはかなり可愛いと思う……もう一度言う、俺はロリコンじゃない！

三年も経てばいい女の子になるはず
そして俺が思い浮かべたハンターという存在……

俺の夢はユクモ村で美女と混浴風呂に入ること
これは俺が恐暴竜に転生したために、叶わなくなった

もう一つはキリン装備のハンターちゃんとイチャイチャすること
これもモンスターに転生したために挫折
人間ならまだしも、モンスターの俺がハンターちゃんの前に出たら、

十中八九戦闘開始だ
モンスターと仲良くできるハンターちゃんがいれば、と半ば挫折しかけていたが…
もうお分かりのはずだ

背にいるマリナは俺に懐いてくれている
そして、マリナはハンターの素質がある…

つまり……マリナを育てて、キリン装備のハンターちゃんにすればいいんじゃね？
…という結論に至った

そう考えた俺は、先ほどまでの悩みが全て嘘のように消えた

夢が叶う……興奮した俺は、知らず知らず大地を疾走していた

いきなり走った俺に驚き、マリナは必死になって俺にしがみつき、当然マリナの胸部が背にあたる
慣れ親しんだこのまな板も、数年もすれば立派なものになる
俺はこの貴重な体験を忘れないよう、堪能しながら大地を駆け抜け

ていった……

神さま…最後にありがとう！

第十二話：恐暴竜の弟子？（後書き）

神「ぶえっくし！！

うぅ…なんや今度は悪寒がするわ。
そういや、あん時の青年は何してんやろな？
まさか、幼女たぶらかしてよからぬ事企んでへんやろな？」

天使「あ、○○ちゃん！
わたし、火竜の紅玉とれた！」

神「なんやと！？」

天使「あ、またとれた！
わたしついてるね！」

神「なんでや！？
なんで毎回オドレばかりがとれんねん！
報酬にも無いわ！
えぇい、もう一回付き合わんかい！！」

無限ループ……

第十三話：光陰矢の如し…？（前書き）

三年経っちゃいました（ ▽ ）

特訓風景書きたかったけど、イビルジョー親父と同じになりそうなので止めました

第十三話：光陰矢の如し…？

俺が転生してからはや五年が経っていた…

最初の二年を親父のスパルタ教育を受け、その後に強者が闊歩する大自然へと踏み出した

その後は、まぁ……波に攫われるわ、見知らぬ場所に流れ着くわ、角竜にボコボコにされるわ……正直に言うと、良いことなど何一つ無かった

そんな過酷な毎日を過ごしていた時、俺は天使に出逢ったんだ…

まだ年端もいかない少女だったが、未発達の胸が…ゲフンゲフン、整った顔立ちと風になびく金髪が印象的な可愛らしい少女だ

少女は敵にボロボロにされた俺を健気に治療してくれた

俺は恩返しにと、少女の村で木こり仕事を手伝っていた

しかし、俺のとある事情で村にとどまることは出来なかった

折角巡り会えた少女と離れるのは辛いと思ったが、ここで思わぬ誤算が……

なんと、少女が村を出る俺に付いて来ると言ったのだ
少女を連れて行くか行かないかで、少々いざこざがあったがここでは割愛…

結果、少女は連れて行くことになった
…が、このまま自然界に連れて行ったら危険なので、少女が一人前になるまで育てることにしたのだ

少女が立派に育ったら一緒に風呂に…ゲフンゲフン、キリン装備にしてニャンニャ…ゴホンゴホン……
まぁ、立派になって欲しかったな

住処に帰還した俺は、仲間の猫たちと再会し、新たな仲間となる少女を紹介した
人間が俺たちの住処に来たのは初めてだったが、住人たちは少女を大歓迎した

少女も住処を気に入り、住人たちと仲良くなったところで、俺による特訓が始まった

少女は日頃から駆け回り、猛獣と戯れていたおかげか、類い希なる

運動能力を持っていた
瞬発力・俊敏性といったものが優れていたが、中でも持久力が最も優れていた
まるで強走薬でも飲んだかのように、どこまでも走り続ける体力を持っていた

俺は少女の才能に目を付け、素早さと豊富な体力を活かした戦闘法を教えこんだ

基礎体力がほとんど完成していたが、唯一筋力が劣っていたので、他の才能で補えるまでに成長させる

ある程度の力がついてから、武器の扱いや身のこなし方、更なる高みを目指す訓練をした

これら全ては、俺と実戦さながらに対峙しての特訓だった

世間一般のハンターが、どのように訓練をして狩人になるかは知らない
ただモンスターの俺と訓練する少女は、初心者ハンターが得られない経験を得ているはずだ

実戦に出て訓練することも可能だが、自然界のモンスターたちは、俺のように加減はしてくれない
武器を握ったばかりの初心者でも、モンスターは容赦なく襲い、殺す

俺は少女の成長力に合わせ、少しずつ力を上げていく

最初は緩やかだったのが、次第に速く、力強く、巧妙な動きへと…
…もちろん、少女がギリギリでかわせる力でだ

少女は、元々の素質に特訓による成長も相まって、メキメキと戦闘技術を上達させていったのだ…

《密林・とある湖の端》

フィールドの大部分がジャングルに覆われる密林
そして、そこにある大きな湖
湖と陸地の境界線には白い砂浜と、そこに打ち寄せる穏やかな波
砂浜には波を受けて餌を探す盾蟹の幼体、ヤオザミ
いつもの密林の風景だ
ただいつもと違うことといえば、砂浜から少し離れた位置に、桃毛獣と物々しい人間が対峙していることだ

ピンク色の体毛と、頭にある極彩色の毛が印象的な桃毛獣は、全身傷だらけで荒々しく息をしている

対峙する人間は、橙と青の縞模様の防具に身を包み、背丈ほどの太刀を構えていた

桃毛獣とは対照的に、人間の息は乱れていなく、鋭い二つの眼光が桃毛獣を見据えていた

人間は背丈ほどもある太刀を、目横で水平に構え、右手は太刀の中腹に添えられていた

そのまま長い膠着が続いていたが、互いの間を一陣の風が吹き、人間の長い金髪がたなびいた

それと同時に、人間が地面が抉れる程の勢いで駆け出した

手負いの桃毛獣は一瞬ビクッとしたが、すぐに迎え撃つべく腕を振り上げる

それに対し人間は、背に付けていた面積の広い布を投げつけ、桃毛獣の視界を奪う

怒り状態の桃毛獣は、お構いなしに布ごと殴ったが感触はなく、人間の姿も無かった

桃毛獣は急に消えた人間を捜そうとすると、下部から小さな笑い声が聞こえた

声を辿って下を覗いた時、桃毛獣には銀色に輝く刃が見え、そして
それが最期に見た光景だった

「（見事だ！なかなか良い太刀捌きだったぞ！）」

恐暴竜こと俺は、豪快に笑いながら桃毛獣の傍らに立つ女性に近付く

「あ、兄ちゃん。
我ながらうまくやれたと思うけど、大型モンスターはやっぱりタフだな。
まだまだ力不足だよ。」

「（そうか？
十分強いと思うけどな。
まぁ、マリナは素早さと身のこなしを活かした方がいいのかもな。）
」

マリナはどうも腑に落ちない様子で、太刀を肩に担ぐ

雪山の村の元気娘(マリナ)は、この三年で見違える程の成長を遂げた
小さかった身体は三年でスラッとした、無駄のない容姿へと変わった
髪も伸ばし、光沢のある金髪は背中まである

さらに俺との訓練のおかげで、戦闘技術も格段に上達した
最初は闇雲に武器を振り回していたのが、洗練された技巧的な太刀筋へと変わった
さらに力不足を素早さで補う中、マリナは我流の剣術を身に付けたのだ
太刀の切れ味を活かした斬撃でなく、相手の弱点を的確に射抜く刺突技だ

マリナは天性の観察眼で、モンスターの甲殻の継ぎ目、骨の間などを見抜き、そこに強力な刺突技を叩き込む
無論、斬る・薙ぐといった剣技も扱えるが、一点集中の刺突技が最も強力だった
一対多には向かないが、集団で向かってくるのはほとんど小型の鳥竜種で、大抵一撃で仕留める

どこの”牙突”だよと思うかもしれないが……構えも攻撃もそれに近い
斎藤のソレに比べれば劣るかもしれないが、モンスターを相手にす

るには十分な威力だ

身体的にも技術的にも成長したマリナだが、一番変わったのは……
性格だと思う

出会った時のマリナは、まだ子どもっぽい所が多々あった
それが今では、一つ一つの言動がすっかり大人びている

そして何より……

「（狩りも終わったことだし、一緒に遊ぼうぜ！）」

「忙しいから無理、モモとでも遊んでなさい。」

結果を言うと…マリナはツンになりました
何時の頃からか分からないが、マリナがツンツンし出したのだ

いやツンデレというやつならいいよ！？
普段ツンツンしてるのに、時たまデレる…
そういうギャップがあるならまだしも…マリナはなかなかデレてくれません

アイルーたちには天使のような微笑みを見せるのに、俺にはそんなものありません
あるとすれば、俺がマリナにハチミツをあげる時くらいです…
日中は特訓の日々で、それ以外の時間はエリア移動してるので会えず…
時間を見つけて会いに行けば…

「そんなに暇なの？
たまには捕食以外に、畑仕事でもしたら？」

グスン……
遊びに行けば冷ややかな目つきでなじられる
違う意味で癖になり……とにかく、悲しいのだ！

「……兄ちゃん、なに涙浮かべてため息ついてるの？
トウガラシあげようか？」

慰めにトウガラシって……好きだから貰うけど
ここ最近の俺の野望は、混浴やキリン装備よりも、マリナのデレを見てみたい！に変わったのだ
…けどマリナのデレを見るなど、天鱗や紅玉をとるくらいレアだ

あぁ、悲しい……

重いため息をつく俺の横で、マリナは困ったように眉を歪める

「もう……そんなに落ち込まないでよ。
私がこの後色々やらなきゃならないの分かるでしょ？」

マリナの村での立ち位置は、俺と同じ用心棒だ
だが、狩り以外にも色々出来るマリナは、猫たちに混じって畑仕事や採取に行ったりする

俺がフィールドを駆け回って捕食している間、拠点の防衛をするのはマリナの役目だ

それは俺も分かっているが、たまには息抜きして遊びたいものだ…

「はぁ……分かった。
やること終わって時間があったら、一緒に遊んであげるわよ。」
「（マジで！？
ヤッタゼー！！！）」

俺は歓喜の叫び声をあげ、巨大な咆哮がジャングルを揺らす

「ああもう、ウッサイ！！
その代わり、今日こそ畑仕事を手伝いなさいよ！」

「（了解！！）」

ぶっちゃけ、ツンデレの女の子なんて俺は見たことがない
なので、今まで何度かデレていたが、気づかなかったのかもしれない

まあ、そんなことはどうでもいい！！
マリナの仕事をちゃちゃっと終わらせて、心ゆくまで遊び尽くしてやるぜ！！

あ……腹減った

俺は無意識のうちに桃毛獣を喰ってしまい、マリナにこっぴどく叱られた…

第十三話：光陰矢の如し…？（後書き）

《マリナ・設定》

武器：鬼神斬破刀
＊通常の三分の二の長さ
＊親父さんの形見

防具：レックス一式
＊ティガは主人公と一緒に狩猟
＊防具は竜人族の翁が制作
＊下位装備

発動スキル
千里眼
食事

天賦のスキル
（防具無しでも発動）
ランナー
体術＋２
見切り＋１

戦い方は、まんま”るろ剣”の斎藤〇

牙突は使わないが、突き技主体の攻撃
気刃斬りと気刃大回転斬りも使えるが、滅多に使わない

主人公が教育しなかったら、絶対に罠と閃光玉でごり押ししてた人

異名
”無限ランナー”
”調合率０％”
”ドリンク忘れる人”
”ツンデレ？”

第十四話：軟弱者！！（前書き）

マリナが絡むと、主人公がとんでもないことに…

第十四話：軟弱者！！

どうも、イビルジョーに転生した薄幸の青年こと”俺”です

いやはや、うちのマリナもずいぶん成長してくれましたよ
成長し過ぎて、目のやりどころに困っちゃいますよ（笑）

三年で幼児体型からこんなにエロい……けしからん身体に育っちゃって

一度マリナが入浴中のスキをついて胴装備を拝借したら……
推測だけどCはあったね、うん
俺の最終目標はキリン装備だけど、レックス装備もなかなか乙だと感じてきた

ティガの牙とか甲殻でゴツい外観だけど、腰装備のすき間から引き締まった足が見えるんだ

あのちょっとだけ見えるってのが、最近は俺の感動だね……

「コラ、兄ちゃん！！
サボってないで手伝いなさいよね！」

「（あ、はいは～い。）」

マリナの一喝で俺は妄想で止めていた仕事を再開する
仕事を終わらせればすぐ遊べるため、俺は身体に縄で付けられた農具を引っ張っていく

俺が通ったあとの畑は農具で耕されていく
つい調子に乗って疾走し、滅茶苦茶にしてしまうのは定番だ

今日はマリナの機嫌を損ねたらいけないので、比較的真面目に畑仕事をする

畑仕事を終えた俺は泥で汚れた体を洗おうと、湖へと向かった
途中アプトノスが数匹いたので、全部仕留めて捕食する

体を洗い流し空腹を癒やした俺は、湖に半身浸かりながら空を見上げる
日は真上に昇ってから少し傾いてるくらいなので、遊べる時間はまだまだある

何して遊ぼうか…俺がにやけていると、足に小さな刺激を感じた

下を覗いてみると、ちょうど蒼色の奇妙な頭部が現れる

「シャーー！」

「（お、水竜の坊主！
元気だったか？）」

人間の腰の位置くらいの水竜は、俺の声を聞いて嬉しそうに飛び跳ねる

俺の足にしがみつくコイツは、湖に棲んでいたらしい《水竜・ガノトトス》の子どもだ
物知りアイルーが言うには、支流のどれかから卵が運ばれ、この湖で産まれとのことだ

俺がこの水竜と出会ったのは、この拠点に来て数ヶ月くらいの時だ
水浴びしていた俺のもとにヒョコヒョコ近寄り、黙視してきたのだ
どうしていいか分からず見ていたら、何故か懐いてきた

食べても美味くなさそうなので、とりあえず面倒を見ることにしたのだ

ガノトトスといってもまだ子どもで、魚を食べていること以外、迷惑はない

俺もマリナも三年で随分成長したのに対し、この水竜は一回り大きくなっただけ

水竜の成長は遅いようだ

この水竜が大人になったら俺よりも大きくなが、ここまで人懐っこいなら、多分問題ないだろう…

幼い水竜に軽く別れを告げ、俺は平野の小高い山へと向かっていく

「――これに―これを入れて。

…あ、旦那さんニャ！」

山の洞窟に入っていくと、なにやら怪しげな煙りを立ち上らせる鍋と、モモの元気そうな声が出迎える

「（おう……ところで、何やってんだ？）」

灰色の煙を出し小刻みに揺れる鍋を訝しげに見ると、モモはよくぞ聞いてくれた…とばかりに説明する

「ニャハハハ！
この鍋は《オイラ製調合鍋》なのニャ！
コイツがあれば、調合書・入門編だけで何でも作れるのニャ！
”コンガ”みたいに馬鹿じゃニャければ、絶対に上手くいくのニャ！
ちなみに、今は”特産キノコキムチ”を調合中ニャ。」

「（良く分からないけど、スゴい発明品なんだな？
ところで、マリナはどこだ？）」

「ニャ…マリ姉はいつもの部屋にいると思うニャ。」

モモが指差したのは洞窟の一角、入り口を灰白色のカーテンで覆われた場所だ

「（サンキュー。）」

礼を言うと、モモは片手を挙げて答えた

「（お～い、マリナ？
準備出来たか？）」

俺はのそのそ部屋となる場所に歩いていき、のんきに呼びかける
すると、カーテンの奥からなにやら騒がしい音が聞こえる

「（マリナ！？どうした、何かあったのか！？）」

「に、兄ちゃん！？
今は入ってこないで！」

「（な、一体何があった！？
カンタロスでもいたのか！？）」

「と、とにかく入っちゃダメ！」

カーテンの奥からはいまだに、バタバタと駆け回る音がする
そういえば先日、洞窟内でカンタロスが湧き出して、大騒動になった
虫嫌いのマリナは悲鳴をあげて逃げ回っていた…

カンタロスは俺と奇面族で排除したが、何匹か生き残って、それが
マリナの部屋に入りこんだのかもしれない

そう考えた俺は、急いでカーテンに頭を突っ込み、マリナの名を叫ぶ

「（マリナーー！
大丈夫k『着替え中に入ってくるな変態！！』―グヘアッ！？）」
頭を突っ込んだ瞬間、鼻先にとんでもない衝撃と痛みが襲い、俺は後ろに吹っ飛ぶ
吹っ飛んだ俺の身体は、部屋の前にいたモモの近くを転げた

「ニャーー！？
オイラの”特産キノコキムチ”がぁぁ！！
旦那さん、何てことしてくれるのニャア！？」
モモは泣きべそかいて俺をポコポコ殴りつける

「（痛っ…一体何が？）」

ヨロヨロと立ち上がった俺は、まばたきしながら周囲を見回す
すると灰白色のカーテンが開き、マリナが現れる
……訂正、夜叉が現れた

夜叉ことマリナは、素晴らしく不機嫌そうな顔で、まるで聖帝や拳

王みたいなオーラを纏って近づいてくる
俺の体を叩く感触が無くなったということは、モモは逃げたのだろう…

マリナさんは俺の目の前に立つと、左手で”鬼神斬破刀”を握り、右手で俺の顎を掴む

「（あぁ…マリナさん？
えと、怒った顔も綺麗ですね。
あの、お茶でもどうですか？）」

「ありがとう…だけど、その前にやることがあるの。」

そう言うと右手の力が強まり、俺の顎を力強く握りつぶそうとする

「（あのマリナさん？
とっても痛いんですが。）」
「痛くしてるもの。」

苦悶を浮かべる俺に対し、マリナはお構いなしに力を加えていく
あれ…？

こんなに力ありましたっけ？

顎を締め付けられるのは痛いんですが、それよりも左手の方が怖いです…

あ、今太刀抜きました

「…何か言い残すことは？」

銀色の刃を地面と水平にし、鋭い先端で俺の額を貫くよう構えている

一度”牙突”を間近で見てみたいって思ってたけど、何だろう…

願いが叶ったのに、全然嬉しくないや！

「もう一度言う、言い残す言葉は？」

「（えっと……最後にマリナさんとお風呂に入りたいです。）」

「……却下。

一人で……逝け。」

最後に凍てつくような声で呟き、地面を蹴って左手の太刀を突き刺す

「冗談よ。」

「（は、はい？）」

マリナは呆れたようにため息をこぼし、太刀を鞘におさめる

「全く…女の子の着替えを覗くなんて、信じられない。」

「（うぅ…ごめん。
カンタロスがいるのかと思った……。）」

「ふぅん……許す。
けど、次はないからね。」

俺は素直に反省し、シュンとなる
今度からはノックをしよう

「それにしても……派手に壊したわね。」

俺が無理に頭を突っ込んだために、マリナの部屋はかなり荒れていた
部屋を直すのに数時間かかるため、遊びの約束は吹き飛んでしまった

俺がしょぼくれてその場を立ち去ろうとすると、マリナに尻尾をつかまれた

「これだけ壊されたんじゃ、部屋を直しても今日は眠れないじゃない…。
責任……とってよね。」

ドキッとして振り返ってみたが、マリナはただ部屋を見据えている
ただ、少しだけ見えた頬は微かに赤みがかっていた

「猫ちゃんの寝床じゃ小さいから、兄ちゃんのところで寝るしかないじゃない！」

俺はその言葉に歓喜した
遊べなくなるのは残念だが、代わりにマリナと一緒に寝れる

まさにねがったりかなったりだ

「（やったぁー！嬉しいぞマリナー！！
お前もなかなか可愛いとこあるじゃないか！）」

「かわい…っ！？
か、勘違いしないでよ！
寝る場所がないから…仕方なくなんだからね！」

あぁ、ツンデレってのは見たことがないけど、こういうものをいうんだろうな

俺はマリナの貴重な一面を垣間見れたことを、満足していた

第十四話：軟弱者！！（後書き）

主人公の変態ぶりがエスカレート中

でも次あたりからは、少しシリアスになる……かもです

第十五話：悪食の恐王（前書き）

更新するたびに皆様のご感想がとどき、私もついつい歓喜してしまいます

さて、感想の中にありました《主人公がガキすぎる》ですが…

あれは主人公が、マリナを大好きに思っている描写です

ただ、やりすぎたことは反省しています

なので、今回は少し様変わりしました

気分直しに、どうぞ…

第十五話：悪食の恐王

「…んん……。」

洞窟のすき間から差し込む朝日を顔に浴び、深い眠りから覚めるマリナ

寝ぼけ眼をこすり大きなあくびをし、しばしそのままボーっとする

「……兄ちゃん？」

いまだ醒めきらない様子で声を発する

しかし、マリナが呼び掛けた者の姿は周囲にいなかった

早朝の寒さから身を守るため、マリナは毛布をかぶりながら洞窟内を散策する

洞窟内のアイルーのほとんどが就寝中で、奇面族も頭だけ出して地面に埋まっていた

ふいに地面を見てみると、割と新しい大きな足跡があり、洞窟の外まで続いていた

早起きのアイルーたちに挨拶をすまし、洞窟の外に出てみると……
昨日同様、モモが怪しげな鍋で何かしていた
脇にはトウガラシと、にが虫があった

「おはよう、モモ。」

「ニャ…おはようなのニャ。」

モモもまだ眠いのか、目を半開きにしながら、棒で鍋をかき混ぜている

「今朝は寒いのニャ…。
ホットドリンクなのニャ。
飲むといいニャ。」

モモは怪しい煙を出す鍋から液体をすくい、コップに移してマリナに差し出す

差し出されたコップを受け取り、口に含む
ホットドリンクがのどを通った途端、体がポカポカと暖かくなり、
朝の寒さを感じなくなった

「兄ちゃんの姿見当たらないけど…どこに行ったの？」
「今朝早くに、密林のある方角に向かったのニャ。
物凄い殺気だってたから……例の”アレ”ニャ。」

モモは鍋をかき回すのを止め、鍋の中の液体を全て容器に流し込み、栓をした
調合の後片付けをするモモの横で、マリナはぼんやりと東に広がるジャングルを眺めた

「…もうそんな時期か。
兄ちゃん…大丈夫かな？」

生い茂る草を踏み潰し、乱立する樹木をなぎ倒しながら駆け抜ける、黒緑の巨大な竜
竜が通った後にはなぎ倒された木々と、食い荒らされたモンスターの姿があった…

今俺は、密林の木々を無惨に破壊しながら疾走している
立ち止まろうに、自分の意思では止まれない

それから視界で動いたものがあれば、それがなんだろうと襲いかかり、凶悪な牙で噛み砕いて喰ってきた

いくら喰っても俺の食欲はおさまりそうになく、獲物を探して広大な密林を徘徊していた

俺のこの本来の恐暴竜さながらの食欲は、今に始まったことではない
最初にこの状態に陥ったのは、マリナと出会い、拠点に戻った数ヶ月後だ

ある日俺は、今まで感じたこともない空腹感に目覚めた
おさえようもない空腹感と、肉に餓えた俺の肉体が突発的に動き、身の回りの動物を喰いだしたのだ

幸い、その時はアイルーの住処ではなく、マリナもいなかった
だが、雪山近くの森にいた動物たちは、全て喰い尽くしてしまったのだ

それからというもの、俺は年に何回かこの状態に陥り、その度にフィールドを徘徊し補食を繰り返してしまった

これは俺の推測だが、俺のこの破壊的な補食は今まで抑えてきた食欲のツケだ
人間だった俺の理性が、恐暴竜本来の食欲は抑えられていたが、完全に消えていたわけでなく、体内に餓えが蓄積されていたのだ
それに加え、最近の俺は雪山などの寒いエリアに出掛ける
それが俺の餓えに拍車をかけ、何かの拍子に一気に解放されるのだと思う
貪欲な餓えに支配された俺は、目に付くもの全てを補食し、餓えが満たされるまで補食を繰り返すのだ…

どれくらい疾走しただろうか？
俺の通り道には食い散らかされた残骸があり、俺の口は喰ってきたものの血で染まっていた
だいぶ食欲はおさまってきたが、あと一つ何かを喰いたい気分だ

理性が戻ってきた俺は、もはや小型のモンスターなどには目もくれず、大きな獲物を狙って徘徊していた

大きな獲物…つまりは、牙獣種や飛竜種といった大型で喰いがいのある獲物だ

といっても大型モンスターなど、そう簡単に見付かるものではない

最近では怪鳥や桃毛獣を補食していた

しかし、密林は他のエリアより頻繁に訪れるため、それらはほとんど逃げてしまった

大型の獲物を補食するには、密林のさらに奥にある《森丘》、《沼地》、《樹海》に赴かなければならない

そこまで何があるのか分からないのと、たんに面倒くさいから行かないが…

どっちにしろ、恐暴竜の貪欲な食欲が表面化してきた今は、生息範囲を広げるしかないだろう

先のことは後で考えるとして、今は食欲を満たすために大型モンスターを探すことにした…

密林を徘徊して数時間…
大型モンスターがなかなか見つからないため、諦めて小型モンスターを補食しようとした時だった…

突如密林の奥から竜の咆哮が響き渡る
俺はすぐさま大地を駆け抜け、声のしたエリアへと向かう

声の先には行く手を阻む大きな岩があったが、俺はそれを体当たりで粉砕する
岩の向こうは開けた場所であり、その中央に俺が求めていたものがいた

深緑の甲殻と鱗に覆われ、皮膜のついた大きな二つの翼……恐暴竜ほどではないが、脚力も発達している

見覚えあるその竜の名は《雌火竜・リオレイア》だ

雌火竜は岩を砕いて現れた俺を見て驚いたが、すぐに威嚇してきた

大型モンスター同士が自然界で接触する事態は、あまり多くはない
出会ったとしても、せいぜい縄張り争いになるだけ

威嚇しあい、噛みつきあい、体をぶつけ合う
敗者は身を退き、勝者はその縄張りを獲得することができる

だが、雌火竜が対峙しているのは、縄張りを持たず広い範囲を徘徊し、動物全てを喰う恐暴竜……いわば、天敵に近い存在
本来の恐暴竜がいる地方なら、俺を見た瞬間逃げるだろうが、この地方では恐暴竜など初見の竜だ

俺なら普段は見逃すところだが、生憎今の俺には理性があまりないよって、雌火竜を見た瞬間、俺は勢い良く突進していた

大口を開きながら突進する俺に、雌火竜は火球を放って応戦する
何発かは外れたが、一発が開かれた口に当たり、中で激しく爆発した
雌火竜は勝機とばかりに向かってきたが、逆に大木のような尻尾に殴られ、横転した

すぐさま立ち上がって相手を睨む雌火竜だったが、異様な光景に動きを止めた

自分が相手していた竜の全身の筋肉が盛り上がっていた
何より目を引くのは、竜の身体に浮かび上がった無数の傷痕
それらは赤く光っており、傷によっては隆起した筋肉の影響で傷口が開き、鮮血が吹き出していた

そして竜は、雌火竜の何倍以上もの、木々が軋みだすほどの巨大な咆哮をあげた

自分が相手出来るような存在ではない――本能で察した雌火竜は飛び立とうとしたが、空中で脚に噛み付かれ、地面に叩き付けられた
竜は地面で悶える雌火竜に対し、屈強な脚を上げ、雌火竜の翼を踏み潰す
激痛に悲鳴をあげるも、竜は容赦しない
竜は雌火竜の首に食らいつき、首をしなって雌火竜の巨体を投げ飛ばした

雌火竜はほとんど虫の息だったが……竜は最後の攻撃をくわえる
飛竜自慢の翼を脚で押さえつけ、竜は大きく息を吸い込み、口内から赤黒いガス状のブレスを放った
恐暴竜の龍属性ブレスは、雌火竜を即死させた

竜は仕留めた雌火竜を、甲殻ごと噛み砕き、肉一つ残さず喰らいきった
残ったものといえば、背と尻尾にある毒性の針だけだ

飛竜を補食して理性が戻った俺は、自分が食い荒らした雌火竜を見る
もはや原型などなく、針のついた甲殻と、散らばった鱗しかない

毎度この状態になると暴れまわってしまうが、今回は今まで以上だったな…
前にモモから聞いたことだが、俺のこの暴走は、近隣のアイルーや人間たちには有名らしい

人間にもアイルーにも手を出さないから大丈夫だが、そんな俺に新たな呼び名が出来たらしい

《悪食の恐王》

それが今の俺の呼び名だ

少しだけカッコイいな、と満足しながら帰っていく俺だった…

恐暴竜と雌火竜の闘いを見ていた者がいるともしらずに…

第十五話：悪食の恐王（後書き）

戦闘描写短い気もしますが…

現時点での主人公にとって、雌火竜は敵ではありません
対等に闘えるのは、大型の、
《ガノトトス》
《ディアブロス》
《グラビモス》
あとは《ティガレックス》と、
空を飛ぶ《リオレウス》くらいですね

《ラージャン》もいい勝負してくれそうですが、どう扱っていいか分からないので未定…

それから、主人公の暴走っぷりですが、
食欲を理性で抑えていた反動という設定で、作者の勝手なオリジナルです

恐暴竜が補食を我慢するのは若干無理があるので、時たま《暴食期》として定期的に暴れさせたいです

第十五話：番外編（前書き）

いよいよお待ちかね、モンハンの主役の登場…ですね

それにしても、1日二話投稿キツい…

第十五話：番外編

私の名は《カナメ》

ドンドルマの街でとある猟団の団長をつとめる、上位ハンターの一人だ

猟団では主に後輩育成、ギルドから請ける依頼を組織的にこなしているのだ

私は今回、ハンター育成として一人の後輩を連れ、密林に来ていた

目標は怪鳥イャンクック、後輩の腕を試すには良い相手で、私の後輩も危なっかしい場面があったものの、なんとか勝利した

だが今……私たちはかなり危機的な状況に直面している

太刀を構えて睨む私、恐怖に体を震わせる新米の後輩…

そして目の前で対峙するのは……《陸の女王・リオレイア》

普段の私はソロでも雌火竜におくれはとらないのだが、怪鳥相手であまり物資を持って来なかったのと、新米の後輩を守り抜くので力

を発揮できない

雌火竜の攻撃で後輩が負傷し、かくいう私もいくらか怪我をしている

雌火竜は今にも襲ってきそうな勢いで、私たちに威嚇する

緊張感による手汗で太刀の柄が滑るが、一瞬の隙も見せられない

非常用として閃光玉が一つあるが、確実に命中させなければならないため、今は使用できない

やがて痺れをきらした雌火竜が、大きな咆哮をあげる

密林の遠くまで響き渡るような咆哮だ

だがこちらとしては好都合…雌火竜が冷静さを欠いてくれれば、閃光玉を命中させる隙が生まれる

私は太刀を背の鞘にしまうと、右手に閃光玉を持つ

後輩をいつでも連れていけるよう、左手で後輩の肩を抱いた

「イリス、私が閃光玉を投げたら直ぐに走るぞ。」

後輩は震えながらゆっくり頷いてくれた

思えばこの私も、初めてモンスターと対峙した時、同じように怯えていたものだ…
それが今では猟団の団長で、ギルド内でも上の位置にいるとはな…

こんな状況であるにも関わらず、ふと昔のことを思い出して笑みを浮かべていた

「せ…先輩？」

笑う私の顔を見たイリスが不安そうな声を出した
私は雌火竜に目を向けながら、肩を抱く力を強めた

次の瞬間、雌火竜が私たちに向けて突進してきた
私は冷静に対応し、ギリギリのところ…紙一重で突進をかわす

「イリス！！目を隠していろ！」

私は閃光玉の栓を抜き、雌火竜に向けて投げつけた
雌火竜が振り返った時に炸裂し、まばゆい閃光が放たれた

私は閃光玉が効いたかなど確認せず、後方に向かって走り出し、人が入れる洞穴に滑りこんだ

私はバッと背後の雌火竜を確認する
イリスも一緒になって覗くが、私は彼女の頭を押さえる
どうやら閃光玉はしっかり命中したようで、雌火竜は足元が覚束なく、不自然な動きをしていた
雌火竜はやがて目を慣れさせていったが、私たちを完全に見失ったいまだに安心出来ない状況ではあるが、私は窮地を脱したことで、少し力が抜けてしまった

「…あぅ……すみません、先輩。
私のせいで…。」

こんな状況に陥ったことを自分の所為だと思ったのか、イリスは泣きながら私に謝ってきた
雌火竜は未だ私たちを見つけていない――確認した私は、後輩に微笑みかけ、優しく撫でてやる

「お前の所為ではない……詳細を把握出来ていなかった、私の責任だ。」

私を見上げるイリスの目は、涙で潤んでいた
それからイリスを抱き締めてやると、イリスは小さく震えながら、私の胸で泣いた

それにしてもマズいな…

雌火竜はまだ私たちを捜しているようで、隠れていそうな場所を、手当たり次第に探っている

「クッ……やはり無理に頼んでも、”ヴラド”に協力を要請すべきだったか？」

私が後悔の念にとらわれている時だった……

突如、視界の端にあった岩が粉砕された
イリスはその大きな音に怯え、私の腕の中でビクッと震えた
私と雌火竜はほぼ同時に、異変のあった方向に目を向ける

その先にいたのは、私がこれまで狩りをした中で、見たこともないモンスターだ

飛竜でも牙獣種でもないそのモンスターは、黒緑の巨体と裂けた大口を持っていた

私が呆気にとられていると、謎のモンスターは雌火竜を見るなり、草木を踏み潰しながら向かっていく
謎の竜が地を踏みしめるごとに、大地は揺れる

謎の竜は大口をこれでもかというくらいに開き、雌火竜に食らいつくべく突進する
それに対し雌火竜はブレスで応戦し、三発放ったうちの一発が竜の大口に直撃し、大爆発を起こす

私は一瞬勝負が決まったと思ったが、なんと雌火竜の方が、突然横に倒れた

何が起きたのか理解出来ないでいると、竜は片足をあげ、雌火竜の翼を踏み砕いた

雌火竜の悲鳴が密林にこだまするが、竜に喉笛を噛み付かれ、悲鳴は鈍い声に変わった

竜は喉笛に喰らいついたまま雌火竜を持ち上げ、後方の地面に叩きつける

私は今まで見たことがない、モンスター同士の闘いに、いつの間にか魅入ってしまった

首を噛まれ無理やり投げ飛ばさたことで、雌火竜の声帯は潰れ、首

の骨はへし折れたらしい

勝負は完全に決まったが……竜はさらなる追撃を浴びせる

雌火竜の両翼を脚で踏み、大きく息を吸い込み……一気に吐き出した

竜が吐き出した”ソレ”は一目でブレスと分かるが、そのブレスも

私が初めて見るようなタイプだ

赤黒い稲妻を纏ったガス状のブレスは、雌火竜の身体に触れると、

バチバチと音をたてる

そして謎の竜は、あろうことか死んだ雌火竜に噛み付き、その肉を

食い始めた

私はその光景を、息を飲んで見守っていた

大型モンスター同士が接触し、縄張り争いをするのは分かるが……

喰うために襲うなんて、聞いたことがない

やがて雌火竜は残骸を残すのみとなり、謎の竜は満足げに雄叫びを

あげ、密林の奥深くへと消えていった

謎の竜がいなくなってしばらく待った後、私はイリスの手をひいて、
洞穴から抜け出す

「えと、飛竜は一体どこへ？」

「突然他のモンスターが現れてな……この通りさ。」

私が示した先には、僅かな甲殻と鱗を残すのみとなった、雌火竜だったもの
雌火竜の凄惨な死体に、イリスは顔をしかめた

私たちは言葉を発さず、ただ雌火竜の残骸を眺めていた

そこで、私はあることに気が付いた
それは残された甲殻…

鱗が散らばっているのは、喰い荒らされたせいだと片付けられるが、
甲殻の方は違った…

残された甲殻には鋭く尖った黒い棘があり、残骸にあるのは背中と
尻尾の部分だ

雌火竜が有するこの棘は、猛毒を持つと知られている

棘に傷つけられれば、人間など数時間で死に至る
雌火竜は尻尾にあるこの棘を活用し、”サマーソルト”という尻尾攻撃をしてくる
雌火竜の強力な尻尾の一撃と猛毒で、直撃すれば大抵のハンターは死ぬ
雌火竜の毒針はもちろん大型モンスターにも有効で、こんな棘を喰おうものなら、たとえ巨大なモンスターでも命を落とすだろう

謎の竜は雌火竜を喰ったが、この棘の部分だけはキレイに残してあるこれは偶然などでは片付けられなく、あの謎の竜は、少なくとも雌火竜の毒針を知っていた
そこから考えられることは一つ

あの竜は”知能を有している”だ

私は雌火竜の残骸を残らずかき集め、持っていたレポート用紙にその時の様子を書き込む

竜の容姿、特徴、攻撃方法……そして、凶暴性を

私の名は”カナメ”…
ドンドルマのとある猟団の団長だ

広大な密林の奥深くで見たこの竜の存在を、一刻も早くギルドに伝えなければ…

第十五話：番外編（後書き）

なかなか良い描写が出来ない

力不足で分かり難かったら、ごめんなさい！！

では、久々に神様ほのぼのモンハンプレイをどうぞ

――――――――――

神「ふぅ……やっと雷狼竜の碧玉とれた…。

一体…何頭めや？」

天使「15頭だね！

○○ちゃん、よく頑張ったね！

碧玉とれるのはとっても珍しいよ！」

神「うっさいわボケ！

碧玉8個もとったオドレに言われると、むっちゃ腹立つわ！

もうええ、お前なんか貼れや！」

天使「はいは～い！
じゃあ、これでどう？」

神「どれどれ……ん？
こんなクエスト、ウチは知らんで？」

天使「実はこれ、ダウンロードクエストって言うのだ！」

神「だうんろーどくえすと？
何やねんソレ？」

天使「これは、カクカクシカジカ…なんだよ！」

神「へぇ、おもろそやな！
よっしゃ、ウチもダウンロードしたるで！」

後日…

神「お……アクセスポイント発見！！
早速やろか！

……なんや？
…パスワード？
知るかいな！！

えぇい、次や次！！」

移動……

神「な、何でや！？
どこもかしこも、パスワードだらけやん！
別に悪さするわけやないんやから、アクセスするぐらいええやん（泣）」

結局、神さまは天使ちゃんのお宅でダウンロードしましたとさ（笑）

第十六話：ニューフロンティア・その壱（前書き）

途中、主人公非道いかも

第十六話：ニューフロンティア・その壱

どうも…マリナです

私の村での役目は、主に畑仕事と見回り、そして外敵への対処です
普段は兄ちゃんが外敵を返り討ちにするんですが、今朝起きたらいなかったので、私が外敵に対処します

昨日は《暴食期》…とかいう、年に何回か暴れる日でしたので、今日は普通の捕食でしょう

今日の私の仕事は、盆地の湖に棲み着いたヤオザミの駆除です
湖は私たちも使うんですが、ヤオザミが巣くって危ないため、私が出向きました

ぶっちゃけ、ヤオザミを湖に棲ませたのは兄ちゃんです
兄ちゃんが『蟹は美味い！』とか言うから渋々許可したんですが、いつの間にか増えてとんでもないことになりました

あのバカ兄のせいで、私が無駄な時間を過ごすんです（怒）

今日は数十匹ヤオザミを倒しました
その途中、湖にガノトトスに会ったんですが…

この子、私に懐かないんです！
私を見た瞬間、鳴くわ暴れるわ、水吐いてくるわ…酷い目に合います
それが兄ちゃんには懐いてるんですから、腹が立ちます
いいんです……私にはアイルーたちがいますから（泣）

時刻は昼前、そろそろ兄ちゃんも帰ってきていい頃です
そういえば、兄ちゃんの相方のモモもいません

痺れをきらした私は、近くを通りかかったアイルーに聞いてみました…すると

「聞いてなかったニャ？
用心棒さんとモモは、新しい土地に行くとか言って、東の方角に行ったのニャ。
あ、それから伝言があるニャ。」

――――
マリナよ、俺はとある諸事情でモモと密林の奥、《沼地》と《樹海》をしてくる

最近のお前は俺を邪険にしていたが、しばらく離れれば…俺がいるありがたみが分かるだろう
ってなわけで、モモと小旅行行ってくるわ！
ワハハハハハ！！

――――――

「ってなわけ…ニャ！？」

伝言を伝えたアイルーは、恐ろしい殺気にあてられ、気絶した

「あの……腐れ£¢※野郎！！
帰ってきたら××を八つ裂きにして、ヤオザミの餌にしてやる！！
ああ！！
もう、あのＦ＊※ｋ野郎！帰ったら、地獄が生ぬるく感じるくらい、酷い目見させてやる！！」

マリナの口から放たれる、形容し難い罵声の数々…
普段では想像出来ない程汚れた言葉からはは、マリナの激昂ぶりが伺える……

主人公の運命やいかに！？

「（……っ！？）」

「旦那さん、どうしたニャ？」

「（なんか……凄まじい悪寒が。）」

モモを背に乗せた俺は、何処からか届く恐ろしい殺意に、挙動不審になる

「気のせいニャ！
それよりも……目的地に着いたのニャ！！」

モモの元気過ぎる声に、俺は思案することを止める

俺たちの前には陰気な湿気に覆われる、広大な沼地
降り続く雨により、空気はじめじめしている
さらにタチの悪いことに、雨が止んだ夜には、毒沼が姿を現す
食料事情が切迫していなければ、決して訪れない場所だ

密林ほど獲物は多くないが、雪山や火山などよりは幾分マシだ
火山に行くのは極めて稀で、強力なモンスターも多い
砂漠については言わずもがな……雪山は体力消耗の方が多い
そのため消去法で密林にばかり行っていたが、獲物の減りが激しすぎた

そしてモモと話し合った結果、密林の東の《沼地》、南東の《樹海》、南の《森丘》を活動範囲とすることを決めた

沼地は下見程度で済まして、サッサと次の場所に行こうとしたのだが……

「ニャーー!!
ノヴァクリスタル、とれたのニャー!」
「（俺は白水晶の原石がこんなに発掘したぞ!?）」

たまたま訪れた洞窟で大当たりしていた…

沼地を下見して次の場所へ向かうはずだったのだが、帰り道でモモがまだ見ていない洞窟を発見したのだ

洞窟に入ってみたら、採掘出来そうな場所を見つけ……モモがピッケル、俺が体当たりで採掘…後は見ての通りだ

ねじり鉢巻きをして一心不乱にピッケルを振るモモと、体当たりするたびに洞窟を揺らす俺……
周囲のイーオスたちは、面白そうに俺たちを眺めていた

俺とモモの前に置かれた、ゴツゴツとした出っ張りのある大きな袋中に入っているのは勿論、洞窟で採掘した鉱石の数々だ

俺とモモは洞窟にある採掘場所から…それこそ本来あった鉱石を涸渇させるくらい、大量に採掘してやった

後に来たハンターがいれば、根こそぎ鉱石を持ってかれた洞窟を見て嘆くはずだ

「こんだけあれば、村も活性化するのニャ！
女の子にモテるのニャ！」

俺は下心まる出しのモモは捨て置き、俺は足下に置かれた透き通るような鉱石を見つめる

ピュアクリスタル…
最後に渾身の一撃で壁を粉砕した時に、たまたま見つけた鉱石だ
感傷に浸る俺ではないが、このクリスタルはあまりにも美しかった
ので、マリナにプレゼントすることにした

鉱石に魅入っていると、俺の腹の虫が騒ぎ出した
採掘に夢中で捕食していなかったので、かなりの飢餓感が襲ってきた
このままだとモモでさえも喰ってしまいそうだったので、俺は急い
で洞窟を出て行った

「ガアァァァ！！」
「……ブヒィ！？」

きのこを探るモスの悲鳴が沼地に響き渡る
もちろん、恐暴竜である俺に襲われたためだ

最初のモスをくわえたまま、一匹、二匹と餌食にしていき…最終的
には五匹のモスをくわえる形となる

モスたちはもがいて抜け出そうとするが、鋭い牙と強力な顎の力の

前では徒労にすぎない

モスの一匹が噛まれたこととは別の刺激に、ひときわ大きな悲鳴をあげた

おそらく口の中で強酸性の唾液に触れたためだが、結果的にそれが自分たちの寿命を縮めることになった

捕食時で、一種の興奮状態になってる俺は、その叫びに刺激されるモスの柔らかい肉質は容易に牙を通す
そして鮮血を吹き出した後に丸飲みにされる

僅かではあるが、丸飲みにした方が腹持ちがいいので、俺は小さい獲物は丸飲みにしている

モス五匹を捕食しただけでは、俺の空腹は満たされない
舌なめずりに周囲を見回すと、哀れなコンガが数体…

俺の視線を受けてビクッとしたが、すでに遅し
全て俺の糧となった

腹を満たして戻った俺を迎えたのは、目を回してダウンしているモモだった
外傷は無さそうなので、近くの水溜まりから水を汲み、浴びせかける
俺の唾液を含んだ……弱酸性の水を浴びて、モモは一発で飛び起きる

そして、騒ぎ出す……

「あの変な頭のデカいヤツはなんなのニャ！？
ギャーギャー騒いで走り回って、変な液体吐いてたのニャ！！
それから――――」

らちがあかないので、一旦モモを落ち着かせ、改めて話しを聞くまとめると…
俺の留守中に変な頭におかしな尻尾を持ち、ばかみたいに走り回って毒液を吐く怪鳥…
カチカチ鳴らしたと思ったら光って、そこから意識が無いらしい…

うん…十中八九アイツだね

モモが襲われて気絶させられただけならまだ許せるが…

「ニャ！？
旦那さんが採掘したクリスタルが無いニャ！！
きっとあのバカ鳥が盗んだに違いないのニャ！！」

俺の抹殺リストに一匹追加された

逃亡者ＶＳ追跡者
沼地を舞台にした、史上稀に見る逃走劇と追跡劇の始まりだ

第十六話：ニューフロンティア・その壱（後書き）

次回、
狂走ＶＳ恐暴

＊この小説での怪鳥は、おふざけキャラになりそう…

第十七話：熾烈苛烈激烈！！毒沼狂走連盟！！（前書き）

ちょっとグダグダ？

第十七話：熾烈苛烈激烈！！毒沼狂走連盟！！

「（うらぁーー！！
クリスタル返せ、この盗っ人野郎！！）」

「グギャーギャー！」

日が落ちて雨が止み、沼地には新たに毒の沼気を放つ毒沼が現れた
その毒沼に足を踏み入れるのもお構いなしに、巨大な竜とそれより
小さな怪鳥が走り回っている
歩幅で負ける怪鳥だったが、それ以上に逃げ足は速く、疲れを知ら
ない走りを見せる

大事な物を奪われて激昂した俺は、沼地のエリアを隈無く探し回った
相方のモモも、”ヤツ”にやられて大変ご立腹のご様子で、目をぎ
らつかせている

俺たちは沼地を駆け回り、エリアの境界をぶち壊しながら、怨敵を

探し求めた
そして沼地から離れた、俺の膝丈まである草が一面にあるエリアに、
”ヤツ”はいたのだ

体の表皮は灰色で、今まで見てきた表皮とは質感が違って見える
何より、ヤツのヘンなくちばしとおかしなトサカが目を引く

俺たちが探し回っていたお騒がせ者は”ゲリョス”
驚異的な持久力を利用し、毒を吐き散らしながら走り回る怪鳥
そして光る鉱石を盗んでいく、迷惑極まりないバカ鳥だ

普通、ゲリョスは他のモンスターに比べて臆病な個体で、自分より
格上が現れたら真っ先に逃げるはずだ
だが、俺たちが相対するゲリョスは、怯えるどころかふてぶてしい
態度で挑発している
ゲリョスのくちばしの間には、貢ぎ物のピュアクリスタルが輝いて
いた
そしてゲリョスは、そのピュアクリスタルを飲み込んでしまった
正確には、喉の奥にしまったのだが、それを理解出来ない俺はブチ
切れて突撃した

「（死にやがれバカ鳥！）」

スカッ…ズドン！！

俺の渾身の一撃はいとも簡単にかわされ、勢いあまった俺は、正面の岩に頭を激突させた

ゲリョスはとても臆病であり、とても狡猾な怪鳥だ
閃光、窮地には逃げる、死んだふりからの騙し討ち……そして今やったような、相手をわざと突っ込ませて倒す方法だ

毒怪鳥は悠々と背後を振り返るが、一瞬にして余裕が消えた

「（やってくれるじゃねぇかバカ鳥めが！
ゴム皮剥いで、焼き鳥にして喰ってやる！！）」

ぶつかり合って粉砕したのは岩、俺は額の薄皮が切れただけだ

ゲリョスは焦っているのか、飛び跳ねながら後ずさっていく

じわりじわりと、ゲリョスを壁際に追い詰めていくと…
突然その場で暴れ出し、両翼を広げてくちばしとトサカを強く打ちつけて……俺の目の前で強烈な閃光を発した
至近距離で閃光を浴びて目が眩んだが、俺はひるまず攻撃する
しかし目が見えないために闇雲になり、攻撃が当たった感触は一つもない
そんな中で聞き取れたのは、俺のマヌケな姿を見て、楽しそうにはしゃぐゲリョスの声だった

目がなおったので、憎たらしい毒怪鳥を探す
毒怪鳥はすぐに見つかったが、間合いから遠く離れた場所で、挑発するように飛び跳ねていた

毒怪鳥の行動に苛ついた俺は、大きく吠えて走り出す
ゲリョスは再び楽しそうにはしゃぎだし、首を大袈裟に振り乱しながら、俺に負けない速さで逃げ出し……今に至るのだ

毒怪鳥が誇る”狂走エキス”
無限に等しい持久力を生み出すそのエキスのおかげで、ヤツは全速力で走り抜けていく

俺と毒怪鳥の速さは互角だが、スタミナの面ではヤツに劣る

全速力で走ることで距離を維持していたが、無限のスタミナの前では、徐々に距離を離されていく

そして距離が開くと毒怪鳥は立ち止まり、俺の方を向いて……挑発する

距離が縮まれば再び走り出す

そう、ヤツは俺相手に楽しんでいるのだ

毒怪鳥の苛立たしい行動に、俺の脳の血管がブチ切れそうだ

おまけに、怒りで膨張し過ぎた筋肉もブチ切れそうだ

それでも切れないのは、少しばかりの冷静さがあるためだ

ただ追いかけているだけではなく、さり気なく、慎重にヤツを狭い場所に追い詰めているのだ

沼地の地形は、昼間に練り歩いた敵に鮮明に記憶した

普通なら誘導されていることに気付きそうだが、ヤツは俺をからかって楽しんでるため、全く気付いてないようだ

それにしても、どこまでヤツは走るのだろうか？

ふと疑問に思っていると、ゲリョスがまた立ち止まった
今度のは挑発のためではなく、角を曲がったところで岩壁に遭遇したからだ

追い詰められて焦るかと思ったが、意外に、ヤツは冷静だった

じわりじわりと距離を縮める俺と、改造ピッケルを片手に黒い笑みを浮かべるモモ

「今こそ復讐の時ニャ！！」
「（観念しやがれ！）」

「ギョアーー！！」

いきり立って襲い掛かる俺とモモ、しかし……

ズドーン！！

俺たちの攻撃はむなしく空振り、逆に俺たちが岩壁にぶつかるはめになった
さっき当たった岩と違い、しっかりとした岩壁はとても堅く、痛かった

ゲリョスはというと……俺たちの頭上を羽ばたきながら、楽しそうにわめいていた

「（グウゥ…その手があったか…。）」

冷静さを欠いていたのは俺のほうだった
ヤツが飛べることなど容易く考えられることだ
しかも、ヤツは俺の企みにのった上で、それを利用したのだ
どうやら、ヤツと俺とでは、ヤツの方が策士らしい

ゲリョスは俺の後方に降り立つと、挑発してから再び逃げ出した
モモは脳天をぶつけて失神、目を回してくたばっている
最初から期待はしていなかったが、ここからは俺だけでヤツを捕まえるようだ

「（くそっ、あのバカ鳥どこに消えたんだ！？）」

開けた場所に出てから、ゲリョスを見失ってしまった
足跡を探して見つけたいところだが、再び降り出した雨により、怪鳥の足跡など消えて無くなった

ゲリョスが隠れていそうな場所を探していると、カチカチと、あの忌々しい音が雨の中から聞こえた

音を辿って振り返った矢先に閃光が放たれたが、幸い離れていたために効果は無かった

もしかしたら、わざと閃光を発して居場所を教えたのかもしれない

ゲリョスいるのは高台の上、俺ではなかなか登れない位置にいた

絶対的優位な位置にいるのが嬉しいようで、勝ち誇ったようなたたずまいだ
それからまた挑発が始まるのだが、はっきりいって慣れた

冷静さが戻った俺の頭に、ゲリョスを叩き落とす戦法が浮かぶ
単純な実力行使だが…

俺は口を大きく開き、何もかも吹き飛ばすような雄叫びをあげる

ヤツはビクつき、一瞬のスキが生じる

俺は下顎を地面に突き刺してえぐり、首を振りかぶって巨大な岩を投げ飛ばす

えぐり取った岩石はきれいな放物線を描き、毒怪鳥に直撃した

強力な攻撃を受けた毒怪鳥は転倒し、そのまま気絶したようだ

俺は勝利の余韻にひたった後、迂回してゲリョスのいる高台へと回る

小柄なモモなら簡単に高台を登れるが、気絶していて戦線離脱中

迂回して通っている道も決して楽ではないが、図体のデカい俺にはこの道しかない

「（はぁ…はぁ……こんな荒れた道、歩かせやがって！
ぶちのめしてやる…あれ？）」

苦労して登った高台には、毒怪鳥の灰色の姿は無い

違う高台に登ったのか――と不安に思ったが、その高台にはさっき投げた岩石の破片があったので、ここで合っているようだ

「ギャギャー！」
「（…あ？）」

あの憎たらしい金切り声が沼地に響く
高台の下、岩石も届かない安全圏にヤツはいやがった

「（一体何だってんだ！？
確かに仕留めたはずだぞ！）」

苛立ちのあまり声に出してしまう
言ったことを理解したのか、ゲリョスはうなずく

すると、ゲリョスはさっきの場面を再現する
岩石にぶつかってよろける様子、少し大袈裟な演技で倒れる

しばらくした後、ゲリョスは何食わぬ顔で起き上がり、一声鳴く

なるほど、その手があったか……って、ふざけんなー！！
絶妙な場面で”死んだふり”してんじゃねぇよ！
もう、ぶっ殺す！！

激怒した俺は高台から一気に飛び降りる
超重量の巨体が着地した瞬間、大きな振動と風圧が生じる

怒りの赴くままに突撃するが、ゲリョスは飽きたのか翼をはためか

せて飛翔する

距離は絶望的で、俺が半ばあきらめかけた時だった…

ゲリョスの体が空中で不自然に止まり、いきなり地面に墜落した
無理な体勢で落ちたために、ゲリョスは翼を痛めてしまい、しばらくは飛べない

何が起きたのか知らないが、俺はこの好奇を見逃さない
しかしゲリョスも負けてなく、すぐさま起き上がって大量の毒液を吐き散らす

毒液は着弾した場所で噴水のように吹き出し、無数の毒の噴水が俺の接近を拒む

毒液が当たれば死ぬ危険があるため、岩石をえぐり出して砲弾のように放つ
一発だけでなく、連続して岩石を投げ飛ばす

さっきの岩石弾と違い、水平に放つために威力は比にならない
その岩石を、ゲリョスはなんとか横に跳んでかわしている

その膠着状態が続くかに思われた時、俺の頼れる相棒が現れた

「…オイラがここまで怒ったのは初めてニャ！！
旦那さん、頼んだニャ！！」

ゲリョスを倒す大役を託したモモは、ゲリョスに向かって何かを投げつけた

キラキラと光るそれは”ライトクリスタル”
毒怪鳥は光るものを集める習性があるため、視界に映った鉱石に反応し、注意を逸らしてしまった

次の瞬間、高速で放たれた岩石弾が頭に直撃する
ゲリョスはふらふらとよろめき、派手に転倒した
ピクピクと痙攣し、目を回してる様子から、今度こそ倒せたようだ

ゲリョスの口から、盗まれたピュアクリスタルがこぼれ落ち、モモはそれを回収して俺の元にやってくる

「（良いアシストだったぜ、相棒。）」

「ニャハハハ！
旦那さんも良い攻撃してたのニャ！！」

実際、モモのとった行動は素晴らしいものだ
ゲリョスの習性を見抜き、それを利用したのだから
もしかしたら、モモは洞察力が優れてるのかもしれない

「（バカ鳥叩き落としたのもお前の仕業だろ？

一体どうやったんだ？）」

「…ニャ？

一体なんのことニャ？

オイラは旦那さんが岩石投げ飛ばしてる時に駆けつけたのニャ。」

「（え…ウソつくなよ。

お前以外に誰がアイツを叩き落としたってんだ？）」

しかしモモは首を横に振る

どうやら本当に知らないようだ

どうも腑に落ちないが、ゲリョス追跡の疲労がどっと来たので、考えるのを止めた

「（…疲れたから、今日のところは帰るか。）」

「そうした方がいいニャ。

運ぶ鉱石もたくさんあるしニャ。」

予定では森丘にも足を運ぶはずだったが、大量に採掘した鉱石があるので、今日のところは帰還だ

俺とモモは、走り回ってくたびれた体に鞭を打ち、その場をあとにしたのだった……

竜と猫の消えた沼地の一角には、時折呻く毒怪鳥以外に何者の姿もない

しかし、毒怪鳥の呻き声に混じって、水をはじく音が沼地に小さくこだまする
地面の水溜まりに大きな波紋が広がるが、奇妙なことにそれを生み出す者の姿は見えない

やがて水をはじく音は止むが、水面に浮かぶ波紋はまだ存在した

しばらくすると、何も無かったはずの場所に、謎の輪郭が浮かび上がる
次第に鮮明になっていき、その姿が露わになる

目をギョロギョロと動かすが、目は左右別々の動きを見せる
その目は、竜と猫が消えた場所に向けられた

しばらく見つめた後、長い舌で眼球を舐め、視線を戻した

そして体を揺らしながら歩き出し、現れた時と同じように、徐々に風景に溶け込んでいった…

第十七話：熾烈苛烈激烈！！毒沼狂走連盟！！（後書き）

天使「ねぇ、〇〇ちゃん。
ちょっと手伝ってくれないかな？」

神「なんや、自分からお願いなんて珍しいやないか。
よっしゃ、手伝ったるわ。
ほんで、クエストはなんやねん？」

天使「えへへ、火山の素材ツアーなんだけどね。
お守りとりに行きたいの。」

神「はぁ？
お守りなんぞどうでもええやないかい。
んなことより、ハチミツ集めてた方がええわ。」

天使「〇〇ちゃん、お守りバカにしちゃいけないよ？
お守りの質が強さを左右すると言っても過言ではないのだ！
見たまえ、これが私がとったお守りだよ。」

神「どれどれ……。
剣術＋5に罠師＋8…しかもストックが二つやと！？
待て待て、ウチこんな高性能なお守り持ってへんで！？」

天使「〇〇ちゃんあまり採掘行かないもんね。
だから、一緒に行こ？」

神「よっしゃ！！
なんや燃えてきたで！！
待ってろやお守り！！」

天使（…単純。）

第十八話：マリナ街を行く　Ｎｏ．１（前書き）

バトル無し

これからしばらく主人公は空気と化します

ただマリナが暴走しますＷＷ

第十八話：マリナ街を行く　Ｎｏ．１

沼地で一騒動やらかした俺たちは、深夜遅くに住処へと帰ってきた
久しぶりに激走したのと、帰り道に補食したことで猛烈な睡魔に襲われたので、俺はサッサとあなぐらにこもって横たわる
マリナにプレゼントを渡しておきたかったが、睡眠欲に負けたので、明日渡すことにした

俺の睡眠時間は短い
どれだけ疲労がたまっていようが、眠りについてから数時間で起床する
理由はよく分からないが、危機管理と異常な食欲がそうさせているのだろう

今日は深夜遅くに寝たために、明け方に起床した
といっても、他の者と時間を合わせるために、いつも深夜に就寝しているので、いつもと変わらない

習慣化した朝の水浴びをするため、俺はあなぐらを抜ける
そして……地面が抜けて、俺の半身が埋もれた

突然の出来事にパニック状態になっていると、首筋に冷たいものが触れる

恐る恐る目をそちらに向けてみると……なんといか、無表情の能面のようなマリナがいた
手にしているのは”鬼神斬破刀”、切れ味は良いし付加した属性は俺が苦手とするもの
手が滑って首を斬られでもしたら、笑い事では済まない事態になる
冗談だとしても許し難い行いだが、マリナのあまりにも怖すぎる無表情を前にして、俺の怒りの炎も小さな火種と化す

「兄ちゃんが勝手に連れて来た蟹を片付けて戻ったら…ふざけた伝言残してくれたじゃない。」

声にまでその様子が現れていたが、その奥には身も凍り付くような憤怒と憎悪が感じられる
恐怖で声を発せられずにいると、首にあたる太刀の力が強まる

「（ま、待て！プレゼントだ！
マリナにあげる贈り物を探すために、ちょっと出掛けたんだ！
伝言は…ちょっとした冗談だ！
たちのわるい冗談だと思って、笑い飛ばしてやってくれよ！）」

すると、マリナはニッコリと笑ってくれた

マリナの表情がほころんだのを見て安堵するが

「笑ったよ…気がすんだ？
もう思い残すことはないよね？」

「（ストップ！！待てっ、待てだ！！
プレゼントがあるんだ、死んだら渡せないだろ！！）」

俺の最後の弁明を聞き、マリナは首にあてる太刀を離す

「（モモが持ってるから、アイツのところに行かなきゃ！）」

穴から抜け出そうとすると、太刀を向けられ制される
どうやら、逃がしてはくれないようだ

マリナはたまたま近くを通ったアイルーに、モモを呼んでくるように頼む

しばらくして、上機嫌のモモが堂々とやって来る
モモが上機嫌なのはいつものことだが、この状況で見るとかなりイラつく

そればかりか、モモは俺のこの姿を見て、腹を抱えて笑い転げた

うん…死刑確定だ

落ち着いたモモに、プレゼントの”ピュアクリスタル”のことを話すと、とんでもないことを言った

「鉱石は竜人のじいさんに全部あげたのニャ。
ピュアクリスタルは特にスゴいと言って、すぐ使った気がしたニャ。」

「（なにやってんだお前！！
アレはプレゼント用だぞバカ野郎！！）」

「プレゼント用なんて、一言も聞いてないニャ。
オイラは悪くないニャ。
そういうわけで……バイバイなのニャ。」

モモはまるで逃げるように立ち去っていった
ヤツは火山の火口に縛り付けて放置する刑に決まりだ

だが、失態を犯した相棒の処遇よりも、この怒れる夜叉の方が大事だ

なんとか弁明しようとすると、マリナは呆れたような、可哀想なヤツを見る目で俺を見下ろす

少し喜ばしいことに、下から見上げる形となるために、マリナのきわどい部分が見えてしまった

おもてに出さないよう興奮していると、マリナは大きなため息をつく

それから踵を返し、なにやら荷物の入ったポーチを手にする

「（ど、どこか行くのか？）」

「ここを出て、ドンドルマの街に行く。」

マリナはなんでもなさそうに言うが、俺には大きな衝撃だった

「（んなっ！？家出か！？
ダメだぞ、街にはお前に手を出す不貞な輩が大勢いるぞ！）」

「家出じゃないよ…猫ちゃんたちに頼まれたから、私が買い出しに行ってくるの。」

なるほどそれなら安心…じゃない！
街に行くまでには、危険なモンスターが大勢だ！
怪鳥や桃毛獣なんか比ではない、恐ろしい飛竜がいるぞ！

俺はマリナに、外界に行く危険性を話してみせる
ここら一帯は俺のテリトリーなので、あまりにも危険というモンスターはいない

しかし、街に行く道はおそらく縄張りの外、どんなモンスターがい

るか分かったものではない

「ご忠告ありがとう。
だけど移動手段は馬車だから問題ないわ。」
マリナは実家の村に戻り、そこからポッケ村に向かって、そこから
街に向かうための馬車に乗るとのこと

「少し離れれば、私のありがたみも分かる……でしょ？
ということで、さようなら。」

「（ま、待てぇ！！
せめて…せめて穴から出してくれぇ！！）」

立ち去るマリナの背に向かって叫ぶが、俺の声は聞き入れられなかった

「はぁ……なんか無駄に疲れたわ。」

後ろで兄ちゃんが何かわめき散らしてる気がするけど、たぶん気のせいよね

荷物の入ったポーチを肩にさげた私は、ため息をしきりにこぼしながら洞窟の外に出る

毎度恒例ながら、洞窟の入り口には鍋で何かを調合するモモがいる

”私も調合上手くなりたいな”と思っていると、モモが私に気付く

「旦那さんには悪いことしてしまったのニャ。

プレゼント用だと分からなくて、じいさんにあげてしまったニャ。」

言葉とは裏腹に、全く反省している素振りは無い

それから、兄ちゃんが私にあげるはずだったプレゼントについて話してくれた

沼地で体を張ってクリスタルを見つけたこと

毒怪鳥に盗まれたクリスタルを、私のために必死で取り返したこと

モモの話しを聞いた私は、自然と笑みを浮かべていた

あの怠け者で馬鹿で間抜けで、後先考えないで行動する阿呆が、そんなにも真面目になれるんだ…

そう思うと、兄ちゃんの一連の行動も許したくなってしまう

「…似合わないことして。

ねぇモモ…兄ちゃんに、伝えといいてくれない？

さっきは怒ってごめんなさいって。
帰ってきたら、疲れて動けなくなるくらい、たくさん遊んであげるし、一緒に寝てあげる…ってね。」

「分かったニャ！
早速伝えてくるのニャ！」

モモはそう言うと、鍋を放り投げて洞窟に走っていった
別に今すぐでなくていいのに…

――――――――――

「（テメェ、モモ！！
何しに来やがった！）」

「マリ姉から伝言ニャ。
怒ってごめんなさいってにゃ。」

「（はは…マリナが許してくれたのか。）」

「それと、帰ってきたら…。
一緒に寝てあげるって言ってたのニャ。
疲れて動けなくなるまで遊んであげるってニャ。」

「（んなっ！？
マリナが……そんなことを！？
一緒に…寝る？

疲れ果てるまで…遊ぶ……グハアッ！！）」

――――――――――

「……なんか、ものすごいことになってる気が…。
フゥ…気のせいよね。」

嫌な感じがするが、私はそれを気のせいだと片付け、実家のある雪山へと向かう
歩いていっても構わないが、鍛錬代わりに村まで走って行くことにした

村を出て三年経つが、実は年に数回帰郷している
帰郷するたびに私の成長過程が分かるため、村人たちは自分のことのようにはしゃぐのだ

あと同年代の男たちが寄ってくるが、外の土産でも期待してるのだろうか？

休まず走りつづけたおかげで、昼前には村へと到着
前もって来ることを伝えていたので、村人たちは驚くことなく迎えてくれた

それからママにお昼ごはんを誘われたので、ご馳走になった
久しぶりのママの料理はとても美味しかった

ポッケ村からドンドルマに向かう馬車の時間は正午
時間に余裕はあるが、慌てて駆け込むのはイヤなので、村を発つことにした

村を発つことを聞いた男たちは残念そうな顔をした
ついて来られても面倒なので、私は青年の一人の手をとり、燃えないゴミを渡す
燃えないゴミを受け取った青年は歓喜したが、すぐに他の男たちにボコボコにされた
みんな燃えないゴミが欲しかったのだろうか？

不思議に思いながらも、関わり合いになりたくないので、サッサとポッケ村への道を進む

ポッケ村には、幼少期の頃一度訪れたことがある
訪れた時には大きな印象も無かったが、当時珍しい存在だった”轟竜・ティガレックス”雪山に現れ、それを討伐したのがポッケ村のハンターということで、はっきりと覚えている

それからポッケ村にハンターが集まり、結果として私の村も安全圏に入っているというわけだ

ポッケ村と私の村は似たような雰囲気なので、特に驚くようなことは無い
露天や工房を横目で眺めながら、私は馬車のある所へと向かう

雪山の村では異彩を放つ黒い馬車に近付き、操縦するアイルーに挨拶を済ませて馬車に乗り込む

しばらく馬車の中から外を眺めていると、二人のハンター風の女性が乗車し、ゆっくりと馬車が動き出した
どうやら、ポッケ村からドンドルマに行くのは、この三人だけのようだ……

「ま、待ってくれぇ～！！」

訂正、遅刻者一名

停車した馬車に、息を乱れさせた一人の若者が乗車してきた
年齢はたぶん私に近い、身なりを見るかぎりハンターのようだ
といってもこの若さなら、新米ハンターだろう

先に乗車していた女性の一人が、若者に”大丈夫か”と声をかけている
もう一人の大人びた女性は、私と同じく若者に興味を示さず、手に持つ資料を眺めていた

ここで三人についての身なりを紹介したい

遅れて乗車した青年は”チェーン一式”に片手剣の”ハンターカリンガ”という装備で、損傷の無いあたり実戦はまだ経験してなさそ

うだ

次に青年と話す少女
彼女は”ハンター一式”で、青年と同じく片手剣の”ボーンククリ”だ
装備にいくつか損傷が見受けられるが、傷は少ないために実戦経験は浅い

最後に大人びた女性についてだが、彼女の装備は私が知らない防具だ
防具は綺麗な蒼色で額に鉢金を付けている
武器は私と同じ太刀だが、それも初めて見るものだ
防具の損傷は少女よりも少なかったが、実戦経験の少なさのためではない
無意味に攻撃を受けずモンスターを倒してきた、本当の強者なのだろう

他二人はどうでもいいが、彼女には興味が湧く
それと同性の私が言うのもどうかとは思うが、彼女のその稟とした佇まいはとても美しく、魅力的だった

「どうか…いたしましたかな？」

無意識に彼女を直視してしまっていたようで、彼女は資料を見るのを止め、私に声をかけてきた

「あ…いえ、アナタがとても綺麗でしたので……って、私は何を！？」

いきなり声をかけられたために、焦ってとんでもないことを言ってしまった
恥ずかしさに顔を赤らめていると、彼女は私に優しく微笑みかける
彼女の優しげな笑顔に魅入ってしまい、私は恥じらい以外の理由で赤面した

「ふふ…お褒めいただき、光栄に思います。
そうおっしゃる貴女も、とてもお美しいですよ。」

「は…はわわ…美しいだなんて、そんな！」

彼女の褒め言葉と凛々しい口調に、私は頬に手を当て身悶える

いけない！！
彼女は女性…ときめくなんていけないわ！！
で、でも……愛に性別は…
あぁ、兄ちゃん！
私はどうしたらいいのよ！

私が危険な妄想しているとは知らず、彼女はクスクスと楽しそうに笑う

「貴女はなかなか面白い御方ですな。
名を名乗らせてもらってもよろしいですかな？」

「は…ひゃい！！」

あうぅ…噛んじゃったよ

言葉を噛んだ私に対し、彼女はやはりクスクスと小さく笑う

「本当に面白い御方ですな。
私はドンドルマでとある猟団の団長を務める”カナメ”と申します。
」
「は、はい！！
あの…えと、わ私は！！」

「ハハ、落ち着いてお話しなされ。」

「はい！！
えと…私は、マリナと申します！
よ、よろしくお願いします！」

緊張で半ばパニックにおちいりながら、私は彼女に自己紹介を済ま

せる
彼女が微笑みながら手を差し出してきたので、私は慌てて握り返す
カナメさんのすべすべした肌に感嘆の声をこぼすと、彼女は再び微笑む

「これも何かの縁、以後お見知りおきを…マリナ殿。」
「は…はい！
よろしくお願いします！
カナメ様！」
「うむ……ですが、様とはどういうことですかな？」
「カナメ様は運命のお方です！
ですので、カナメ様と呼ばせてください！」
期待に目を輝かせる私に、カナメさん…カナメ様は困ったように苦笑する
美人は喜怒哀楽全ての表情が美しい
カナメ様の困った表情も、私にはとても美しく見えました！

恋は盲目とはよく言ったものだ
人生において初のときめきを抱いた相手は、まさかの同性

それから私は、ドンドルマへと到着するまで、カナメ様にベッタリでした

他二人は唖然としてたけど、カナメ様に愛でてもらえるなら構いません

はぅ……カナメ様のお肌、すべすべでとっても柔らかいですぅ

第十八話：マリナ街を行く　Ｎｏ．１（後書き）

《カナメ・設定》

武器
龍刀【朧火】

防具
稟・皇一式

発動スキル
？？？

知る人ぞ知る、ドンドルマの大きな猟団を率いるかなりの実力者

街でのハンターでは上位に位置する実力を持つが、決してかなわないというハンターが一人いる

面倒見の良い頼れる姉御

マリナは執心だが、同性愛者ではない

第十九話：マリナ街を行く　Ｎｏ．２（前書き）

相変わらずバトル無し…
しばらく無し…

ドンドルマ編が長くなりそうなので、サブタイトル変わりました

スミマセン…
自分の無計画さに呆れてます

第十九話：マリナ街を行く　Ｎｏ．２

カナメｓｉｄｅ

はて…この状況は如何なるものか？

私の右腕を抱き締め、うっとりとした表情で甘い喘ぎを零す少女がいる
かれこれ数時間、このなんとも言えない状態が続いている
別に悪い気はしないのだが……この娘の…私を見る目が、何やら危ない気がするのだ

ヴラドよ……私は一体どうすればよいのだ？

カナメｓｉｄｅ　ｏｕｔ

馬車に揺られること数日…
ドンドルマに向かう馬車は、途中ある村に何度か停車して休憩、新たな乗客を乗せて出発を繰り返していた
もっとも、馬車内のマリナの様子を見て、大抵の乗客はひきつった顔で立ち去っていく
ドンドルマの街にはもうすぐ着く

マリナは下車する準備を済ませた後、愛しのカナメに抱き付くのだった……

「ところでマリナ殿は…街で何をなさるおつもりで？」

「市場で色々お買い物したいと思ってます。
村に配送してもらう必要がありますから…時間がかかりそうです。」

「ほぅ……マリナ殿は村のために都市部まで来られるのですか。
感心いたしますな。」

そう言うと、カナメ様は私の髪を優しく撫でてくれました
私は彼女の包容力のある、優しげな愛撫…コホン
彼女に撫でられると、どこか落ち着きます

「カナメ様は、街に帰ったら何をするんですか？」

私はちょっといたずらっぽく上目で見つめましたが、逆にカナメ様の真っ直ぐな瞳に見つめ返されてしまい、恥ずかしくなって顔を背けてしまいました

カナメ様反則です……そしてとても美しいです

「私はギルドに向かい、いろいろと報告しなければなりません。
おそらくその後に何かしらあるでしょうから、休みはあまりとれないでしょうね。」
苦笑いを浮かべながら窓の外を眺めるカナメ
その顔には、これから街で行わなければならない、数々の仕事への憂いをおびていた

彼女も苦労人なのだろう

「お時間がありましたら、一緒に街を歩きたいと思ってましたが……仕事なら仕方ありませんね。」
「最近では外界に出てハンター業に勤しむ者ばかりでしてね…。いや、元気があってよろしいのですが……執務をこなす者がいない分、私の方に回ってくるのですよ。
一人有能な方がいますが、諸事情で手を貸してくれません。」

「む…ならその者を私がぶっ飛ばしてきます！！
カナメ様の助けなら、喜んでやりやがれ！
……ハ、すみません！」

興奮し過ぎたマリナは、自分の口から出た乱暴な言葉に気付き、慌てて陳謝した
幸い、カナメは特に気にしてはいなかった

「マリナ殿も元気があって良いですな。
ですが、彼に手を出すのは止めておきなさい。
街のハンター全てが認める、歴戦の狩人ですから。」

「歴戦の狩人……そんなに強い人なのですか？」

「えぇ…私など小さくみえるくらいです。
ギルドでも手に負えないモンスターが現れれば、ギルドが彼に直接依頼するくらいですから。
十年程前に古龍が襲来してきましたが、事実上、彼が一人で撃退させました。」

古龍がいかに強大な存在かは、遭遇したことのないマリナでも熟知している
それを一人で撃退するなど、にわかに信じられない

カナメの話しでは他にもハンターがいたそうだが、強大な古龍に対してなすすべもなかったらしい
人々が諦めていく中、その英雄が現れて、死闘の末撃退したらしい
最後にはお互い満身創痍だったが、カナメが言うには撃退させた英雄の勝利だという

「その…その人の名前はなんですか？」

珍しく真剣そうな表情で尋ねるマリナ
カナメもその真剣さを認め、ゆっくり頷いた

「彼の名は”ヴラド・ウルバヌス”…。
又の名を”異名殺しの英雄”…。
モンスターに付けられた二つ名が、霞む程の勇猛さを誇るが由縁です。」

「異名殺し…ですか。」

マリナはまだ見ぬ狩人の姿を想像し、身震いする
兄ちゃんと呼び慕う恐暴竜の元では、二番目に強いと自負していた
しかし外界に出てみれば、自分よりも遥かに強いカナメに出会った
そしてそれをも超えるハンターがいるというではないか
マリナはここに来て、自分が井の中の蛙の一匹だったということを知った

しかしマリナが震えたのは畏怖のためでなく、強者を前にする武者震いだった

今の自分は未熟だった、それを知れただけでも大きな収穫だ自然界で生き抜くためには今以上に強くならなければならない
それがひいては、兄ちゃんのためである
自分が自然界に出てここまで成長出来たのは兄ちゃんのおかげであり、彼のために自分が一人前になった姿を見せたい
兄ちゃんの足手まといにならないためにも、自分はもっと強くなりたい

ではどうするか？

簡単だ

目の前にこんなにも、経験豊かな先輩がいるのだから、教えを乞えばいい

勝利を得るためには手段を選ばず、強くなりたければ教えを乞え…

…兄ちゃんの教えの一つだ

悪い兄ちゃん…帰ってくるの、時間がかかりそうだよ

だけど我慢してね？

立派に一人前になれたら、真っ先に兄ちゃんに会いにいくから！

私はかたく決心した

兄ちゃんの力になれるよう、強くなることを…

窓からは見える先には、ドンドルマの街が見える

新米ハンター二人がはしゃぎ声を発する

道中やかましい彼らだったが、この時ばかりは彼らに同調する

ただの買い出しに来たわけだったが、こんな決心をすることになるとは…

人生何があるか分かったものではない

第十九話：マリナ街を行く　Ｎｏ．２（後書き）

次話、作中最強となるハンターが登場します…するはずです

ヴラド・ウルバヌスの由来ですが、

ルーマニアの”串刺し公””ドラキュラ公”と言われた、ヴラド・ツェペシュからと

第一回十字軍遠征の必要性を演説した、ウルバヌス二世からもじりました

作者は名前を考えられないので、歴史上の人たちから引用させていただきます

第二十話：マリナ街を行く　Ｎｏ．３（前書き）

いまだにバトルは無し、次の次くらいかな？

ドンドルマの旅長引きそう…

第二十話：マリナ街を行く　Ｎｏ．３

ドンドルマの街に到着したマリナは、長く座っていたために鈍ってしまった体をならしながら、馬車から降り立った

それから、驚嘆の声を発する

今まで村や自然界を飛び回っていたマリナには、このドンドルマの街がとても雄大で圧巻に思えた

連なる建造物と整えられた道路、そこを行き交う人々、露天の賑わい…

マリナの目に映るのは全て真新しく、感動的なものだった

マリナは急務があるとするカナメと名残惜しそうに別れる

後の二人とは一言で済ませ、マリナも当初の目的だった必要物資の買い出しに、市場へと向かった

市場にやって来たマリナは、早々に物資を買い上げ、街の配達業者にポッケ村を経由して自分の村に送るよう依頼した

村に送られた物資は、引き取りに来た兄ちゃんかアイルーの手に渡り、住処へと運搬される手はずだ

マリナが街に来るにあたって、アイルーの村長から余分にお金を貰

っていた
それは、自分たちを助けてくれるマリナに対する純粋なお礼の気持ちであり、街に着いた時にマリナが好きなものを買えるようにはからったものだ
マリナもこの時は素直にその気持ちにあずかった

街ではレックス装備がゴツくて違う意味で目立つ
ちょうど目先に衣服を扱う店があったので、マリナはその店に入っていく
目を輝かせて衣服を眺めるその姿は、まさに年頃の女の子の様子だった

今は服のセンスが分からないマリナの変わりに、店主に選んでもらっている
だが……

「な、なら…この服は！？」
「絶っっっ対にイヤ！！
そんな丈の短いスカートはけるか！！」
「じゃあこの服は！？」
「さっきのよりお断りよ！！
っていうか、なんでさっきから露出が多いやつばかりなのよ！！」

もう何回このようなやり取りが続けられたか分からない
マリナと店主の周りには、脚下された衣服が散乱している
中には衣服と呼べないような、異常な露出度の服もある

マリナと店主の騒ぎを聞きつけ、店の前には大勢の見物客が集まってきている

今ではその見物客も店主に味方し…
『いいぞいいぞ！』
『けしからん、もっとやれ』
『はぁはぁ…あんな服きたら彼女の肌が露わに…』
などといった…まるで兄ちゃんみたいなやつが騒いでいる

田舎育ちで無知な私をいいことに、彼らはさらに白熱する
野次馬の一人が『街ではみんなやってる』と言ってから、他のヤツらも口々にそう言うのだ

右も左も分からない私は、皆が言うことを馬鹿正直に信じてしまい、やがて言われるがままに様々な服を着せられた

「うぅ…なんでこんな目に。」

「とってもお似合いですよ。」

マリナは泣く泣く試着室にて、渡された衣服に袖を通す
流石に試着を手伝うのは、女性の店員だ

最初店主が入ってきたから、怒りの鉄拳で退場させたからでもあるが…

出来るだけ試着の時間を長くしようとしていたが、店員の慣れた手つきであっという間に着替えさせられる

マリナが観念すると、店員は笑顔で試着室のカーテンを開く

途端にマリナの姿を見た野次馬が、大きな歓声をあげる

「おぉう！！めっちゃ可愛い！！」

「絶世の美女たる受付嬢が降臨したー！！」

マリナが試着させられたのは、ギルドの受付嬢が着用するという”メイド服”なるものの、店主改良型だ

オリジナルのスカートをギリギリまで短くしたもので、野次馬たちはしゃがんでアレを見ようとしている

不快感を露わにして睨んだが、逆効果…

涙目で睨んだことにより、かえって興奮を助長させてしまった

熱狂した野次馬が次に提案してきたのが、これまでで一番露出が多いもの

店主が言うにはハンター装備のレプリカらしいが、露出度が高くてマリナが必死で避けていたものだった…

「最後はこの店主自慢の”ノワール”装備でどうだ！！」

「いや待て、この”キリン・X”をかたどった装備を着せるべきだ！！」

野次馬たちの熱狂ぶりに、マリナはおろか女性店員まで表情をひきつらせる
しばらく口論を続けてきた野次馬たちだったが、何か納得したような表情でマリナに迫る

「話し合いは解決した！
君にはどちらも着てもらうことになった！！」

「いや解決してないよ！
私の意思の尊重ってものはないのかよ！？」

マリナが抗議したが、興奮が最高潮に達した野次馬たちは止まらない
マリナは怖くなって女性店員に抱き付き、助けを求めた…

『すまないが、どいてくれないかな？』

この喧騒の中心にいるマリナにまで聞き取れるような、存在感のある声が響く
その刹那、先ほどまでの熱狂ぶりが嘘のように、野次馬たちが静まり返る

マリナが分けも分からずにいると、奥の方から野次馬たちが左右に別れていき、一人の人物が近付いてくる

最後の一人が退いたとき、その人物の姿がマリナの目に映る

身長は高く筋骨隆々とした肉体に、丈の長い黒色の布を纏う
何より目をひくのは、布の下の白い包帯…よく見れば頭部や指先まで白い包帯に巻かれ、あるはずの素肌は見えない
おそらくは、全身を包帯に覆われている

「頼んでいたものを取りに来たのだが…大丈夫かな？」

包帯の男から発せられたのは、常人とはかけ離れた、あまりにも枯れた声だった

男の声を聞いて少しした後、女性店員がハッとして立ち上がり、男に頭を下げる

「し、少々お待ち下さい。」

そう言うと店員は店の奥に駆け出していく
店員がいなくなると、店の中を重い沈黙が包む
いつの間にか大勢いた野次馬たちも消え、今はマリナとその男のみ
男は店員を待つ間、赤いカバーに金色の刺繍が入った本を開き、それを読んでいる
店員はすぐに戻って来て、男は本を大事そうに胸ポケットにしまう

「ご注文の品です。」

「ふむ…。」

男は頷くと、店員から渡された品と引き換えに、代金を支払った

「ところで…店主の姿は見えんが、何処に?」

すると店員は恐る恐る、マリナの脇に転がる店主を見る
男がつられて視線を移すと、偶然マリナと目が合う
男はそこで初めてマリナの存在に気付いたようで、少し驚いていた

「……ふむ、店主の悪い癖が出たようだな。」

男はゆっくり歩を進め、倒れる店主の元に近寄る
男が店主を立たせ後頭部をつくと、店主はようやく目を醒ました

「は…私は何を！？
こ、これはこれは”ヴラド”様！
いつの間にお越しに！？」

「ついさっきだ…。
それより…店主のせいで、一人の娘が面倒事に合ったらしい。
何かしら、詫びをすべきだろうな。」

男はマリナに一度視線を落とした後、店主にマリナへの謝罪を促す
店主が頷くと男はローブを翻し、店の外に向かう

その折に男から何かが落ち、マリナはそれを拾い、男の背に向かって声をかけた

声を聞いた男が振り返り、マリナは近寄って落とし物を手渡す

それは何かのカードのようで、光を反射して煌めく水色の表面に、
何やらたくさんの文字が書いてあった

「すまないな…ギルドカードを落とすとは。」

男は謝礼の言葉と共にカードを受け取ると、マリナの顔をマジマジと見つめる

「街に来るのは初めてのようだな…。
名を聞いても……っと、名を聞く時は先に名乗るのが礼儀だな。
私の名は”ヴラド”、街の一角でハンター業をする男だ。」

「…は、はい。
私はマリナと申します。
あの…あなたのことはカナメ様よりうかがっておりました。」

「カナメ？
あぁ……あの腕の立つハンターのことか。
しばらく会っていないから、忘れていた。」

「はい…カナメ様から、アナタが街で尊敬を集めるお方だと聞いております。」

間近で話しをしていて気付いたことがある
ヴラドの包帯から微かに覗かせる肌は、火傷に覆われていたのだ
赤黒く焼け爛れた素肌は、まるで最近になって出来たような火傷に見えた

マリナの視線に気付いたヴラドだったが、特に隠そうともしない

「気になるか？
昔…古龍につけられた火傷でな、ほぼ全身が醜い火傷で覆われている。
…カナメは他に何か言ってなかったか？
例えば……街の人々からの噂とかな。」
「いえ、それ以外は特に…。」
カナメが言っていたヴラドへの評価は、主にハンターのものだ
街の人々からの評価は、特に聞いてはいなかった
「そうか…。
ところで、その”斬波刀”はどこで手に入れたのだ？」
ヴラドが尋ねてきたのは、マリナの背にある”鬼神斬破刀”
マリナは斬破刀をとると、ヴラドに見せながら説明する
自分が雪山のとある村の娘であり、父がハンターだったこと
そして父の形見である斬破刀を、自分が譲り受けたことを…
マリナの話しを聞いたヴラドは、納得したように頷く
「名を聞いてもしやとは思ったが……。
君はメルヴィスの娘か？」

「――――っ！？
パ、パパを知ってるんですか！？」

マリナが急に食いつくと、ヴラドは少し驚いてたじろぐ

「この活発さ、やはりアイツの血を引いているだけはあるな。
私は君の父、メルヴィスのハンター仲間であり、友だった。
君とは前に一度会ったが……あの時は幼かったから、覚えていないだろうな。
それに…今ほどハンサムではなかったからな。」

ヴラドは火傷のある顔を撫でながら笑う
事情を知ったマリナから見れば、笑えない冗談だ

「ふむ…マリナ、君に渡しておきたいものがある。
メルヴィスの遺したものだ…家に来てくれるかな？」
皮肉った冗談を聞いて苦笑していたマリナだったが、父の遺品と聞いて表情を変える

「父の遺したものですか？」

「あぁ……メルヴィスの家を片付けている時に出て来たもので、今まで渡せなかったものだ。」

「そうですか。
ありがとうございます、父の遺したものはこの斬破刀だけかと思ってましたが、ヴラドさんが守っていてくれたんですね。
お願いします、父の遺したものを見せて下さい！」

「フッ……そう言うと思っていたよ。
その前に……そのよく分からない服装を直した方がいいんじゃないか？」

「あ…。」

途端にマリナは羞恥し、顔を赤らめて俯く
ヴラドは一つ頷くと、やり取りを眺めていた店の店主に目を向けた

「店主、何かくれてやれ。」

店主は身震いすると、先ほどの店員以上の速さで店の奥に消え、すぐさま戻ってくる

「あいにく…マシなのはこの”アスール装備”しかありません…へへ。

レプリカではなく本物ですが、詫びに貰っといてくだせぇ。」

「うぅ…なんか嫌な予感するけど、仕方ないか。」

ガックリとうなだれながらも、マリナは試着室に向かっていったのだった…

「あうぅ……なんでこんなに胸元開いてんだよぉ…。」

「に、似合っていますぞ！！」

「店主よ…お主も真面目にしていれば、完璧な人間性なのにな…。」

マリナは街で、骨董品のアスールFを手に入れたのだった…

第二十話：マリナ街を行く　Ｎｏ．３（後書き）

なんか試着会みたいな雰囲気になった…

動画見てたらアスール発見したので、マリナの装備にさせていただきました（笑）

主人公の夢は潰えそうでせね、マリナの好き嫌いでＷＷ

第二十一話：マリナ街を行く　Ｎｏ．４（前書き）

ちょいシリアス？

第二十一話：マリナ街を行く　Ｎｏ．４

マリナ　ｓｉｄｅ

私は自分の役目である仕事を済ませた後、前々から欲しかった新しい服を見に、たまたま見つけた服屋に入っていったの
だけど、雪山育ちで俗世間に乏しい私でも、この服屋が異常なのに気付いたよ…

だって、展示されてるほとんどの服が、マニアックな服か露出の多い服ばかりだったんだもん！！
そればかりか店主や他の客も変だったよ！
反抗しないことをいいことに、恥ずかしい格好させて…コノヤロウ！

そんなイかれた試着会を助けてくれたのが、前にカナメ様が教えてくれた最強のハンター”ヴラド”さんだったのだ

ヴラドさんを見た時は、黒装束で包帯姿だったからとても怖かったんだけど、予想外に気さくに話しかけてくれた

それになんと、ヴラドさんは私のパパの友人だったんだって！
それを聞いて私がはしゃぎだすと、ヴラドさんは少し驚いたみたいだった
さらに会話をすると、ヴラドさんはパパの遺品を所持しているから、家に誘われたの

家に行く前に気をきかせて服を貰うよう働きかけたのだけど、正直貰った服も…危ない気がする

店を出たら案の定、街の人たちの視線が集まったけど、ヴラドさんと話しているのを見ていきなり顔を背けた

カナメ様の話しでは凄い人らしいけど、凄過ぎて目を合わせられないのかな？

最初はそう思っていたけど、賑やかだった場所をヴラドさんが通ると、ヒヤッとするくらい静寂につつまれる

人々はひそひそと何かを囁き合い、ヴラドさんを指差していた

流石に不審に思った私がヴラドさんに尋ねたけど、”黙して語らず”っていう感じだった

結局その異様な光景が街の外に出るまで続いていた

っていうか、ヴラドさん街の外に住んでるの？

マリナ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

街の門から出て数十分ほど移動した先、草原にポツンと建つ農場に、

マリナは連れて来られた
農場の周辺には、家畜化されたらしい”アプトノス”がおり、和やかに草を食べている
マリナは少々呆気にとられた
街を救った英雄とは思えない、あまりにも質素な家だからだ
普段洞窟で暮らすマリナから見たら幾分マシだが、それでも嵐が来たら軽く倒れそうな、悪く言えば廃屋にしか見えない
煙突から出る煙と、飼われた家畜がなければ、人が住んでるなどとは考えられないだろう
ヴラドが農場に近付いていくと、数匹の犬が出迎える
ヴラドは後ろ足で立ってすり着く犬を一撫ですると、その鋭い目を農場の玄関へと向けた
「また君らか……何度来ても答えは同じだ。」
「いいえ、今日こそ満足のいく返事をいただきますわ！」
玄関の前にいたのは、学者風の衣服を着た二人
片方は男性、もう一人は眼鏡をつけた女性だ
眼鏡の女性はヴラドの前まで詰め寄ると、威張るように腕を組む

「もう今までのような回答はごめんですわ！！
アナタはまだ自分の立場を理解されていないようですから、話しに付き合ってもらいますわ！」

「何度も言うように…来るだけ無駄だ。
あいにく先客がいるのでな、今日はお引き取り願う。」

眼鏡の女性は絶句すると、ヴラドの背後にいるマリナを見つける
女性はマリナに何か言おうとするが、ヴラドに遮られ、はぶかれた
女性は背後でヒステリックを起こしたように叫ぶが、ヴラドは無視、
マリナもそれにならって続く

玄関の前にはもう一人の男性がおり、近付いてきたヴラドたちに一礼する

眼鏡の女性よりは、幾分マシなようだ

「アナタが来てくれれば、組織の内部もまとまり、アナタのカリスマ性が組織を強くしてくれます。
ヴラドさん、どうしても考えは変わらないのでしょうか？」

「変わらないな。
君が私を評価する理由も分からないでもないが、君が思うように優秀ではない。

それに、組織の重役には興味が無いし…私が上に立つべき人間だとも思わん。
はるばる訪ねて来て申し訳ないが、私を説得するのは時間の無駄だ。」

ヴラドは男にそう告げると、マリナを先に入らせ、二人に黙礼して戸を閉めた

家屋の中は、予想外に良く整っていた
必要最低限の家具と飾り付けの無い室内は、やや殺風景だったが、定期的な整理整頓・掃除がされているようで、小綺麗な内装だった
そんな殺風景の中で目立つのが、唯一飾り気のある小さな祭壇

「へぇ…ヴラドさんは、神さまを信じているんですか？」

振り返って尋ねてみると、ちょうどヴラドが黒装束を脱いだところだ
黒装束の下にも衣服は着ていたが、痛々しく巻かれた包帯がさらに露わになった

「私の生まれ故郷で信仰されていてな…幼い頃から信仰心は持ち続けている。この地域では、私のような者は珍しいようだがな。」
小さく笑いながら言うと、ヴラドは隣室へと入っていった

マリナは脇にひかえる子犬を撫で、もう一度祭壇へと目を向ける
蝋燭に灯る炎が、窓の隙間から入る風に揺られ、金細工の祭壇を煌々と照らしている

祭壇の隣には、ヴラドが持っていたのと同じ、赤い刺繍の入った本が置かれていた

興味本位で本を眺めてみたマリナだったが、難しすぎる文字の並びに顔をしかめ、読むのを諦める

祭壇を眺めて待っていると、隣室から木箱を抱えたヴラドが来た
木箱をテーブルに置き、中身を丁寧に並べていく

それが父の遺品だということが分かったマリナは、そっとテーブルに近寄っていった

「メルヴィスの遺品を見るのは久しぶりだ。」

ヴラドは懐かしそうに遺品を並べていくと、一つ取り出して、それをマリナに手渡した

それはマリナの父、メルヴィスの日記帳だった

日記帳には狩りの様子やその日の出来事が記され、随所に家族への言葉が書き残されていた
日記帳の始まりはマリナの誕生日、そこから毎日欠かさず日記を書き続けていた

自分でも詳しく知らない父のことを知れて、マリナは嬉しそうに頁を捲っていく

日記には時折ヴラドのことが書いてあり、どれも仲の良さが伝わってくるような内容だった

そして父の、自分に対する言葉を見つけた時には、自然と涙が浮かんでいた

そして頁を捲っていくと、何も書かれていない空白の頁が続く…
最後の日記の日付は、父の訃報が届いた1ヶ月前だった…

先ほどまでの歓喜は沈み、マリナは酷い喪失感を覚えた

日記帳をテーブルにゆっくり置くと、ヴラドの手で並べられた遺品の数々に目を向ける

父の衣服・財布・食器など、ほとんどが日常品だった

その中で、マリナは小さな御守りに目がついた
手に取ってみると、まるで何か特別な力が働くような、不思議な感覚を感じた

「それは力の護符…メルヴィスが最期まで身に付けていたものだ。持っているだけで、力を得られることのできる、神秘的な護符だ。」

父が最期まで所持していたもの…
持っているだけで、父が見守ってくれるような気がする

「ヴラドさんはパパの…父さんの最期を知っていますか？」

日記はおそらく、帰宅してから書いていたものだ
なので日記には父がこの世を去る前については書かれていない
ヴラドは知っているかと思ったが、彼は首を横に振った

「残念ながら…詳細は知らない。

分かっているのは、考古学者から護衛の依頼を請けたこと。
そして”シュレイド地方”にある、とある古城で…メルヴィスは命を落としたということだけだ。
すまないな…。」

「いえ…。」

落胆してないといえば嘘になるが、ヴラドが謝る理由は無い
同行していなかったのなら、仕方のないことだ…

そこから会話が無くなり、室内に重い空気がのしかかる
しかし意外にも、その空気を打ち破ったのはマリナだった

「父さんのことはだいたい理解出来ました！
なので、今度はヴラドさんのことを教えてもらってもいいですか！
？」

「…あぁ、構わんぞ。」

最初こそヴラドは戸惑ってはいたが、やがて優しげな笑みを見せた
（目元しか見えないが）

「ヴラドさんって、いつからハンターに？」

「ふむ…最初からハンターだったわけではない。
元は第三王女付きの王国騎士だったのだよ。
まぁ…二十歳の時に辞めて、依頼ハンター生活だな。」

あっさりとんでもない経歴をこぼしたヴラド
王国騎士といえば、エリート中のエリートで、知識に乏しいマリナでも分かることだ
辞めた理由を尋ねてみると、ヴラドは苦笑しながら答える

「第三王女のわがままっぷりは、私の手には負えなくてね…。
せめて第一王女様のような、聡明な御方に仕えておれば、もう少し長続きしていたかもな…。
まぁ、本当の理由はたくさんの人々を助けたいと思ったからだがな。
」

「エリートへの道を捨てて、人助けに生きるですか…なんだかカッコイいですね！
そういえば、さっきの学者さんみたいな人たちは、ヴラドさんに何て？」

「あれは……ハンターズギルドの職員だよ。
私にギルドで重役を担ってほしいらしいが、権力渦巻くような所には行きたくないのでな。
こうやって…悠長に暮らしていた方が、遥かにいい。」

のんびりとしたその口振りから、本当に権力や金といったものには興味が無いらしい

狩りで得た報酬は、日々を暮らしていけるだけのお金を残し、後は寄付をするとのこと

本当に欲の無い英雄だ…

最後に気になっていた、愛用の装備を尋ねてみると、ヴラドは頷いて地下室へと案内する

薄暗い地下室の松明に火を灯すと、明かりに照らされ壁に立て掛けられた武具の数々が浮かび上がる

自分の鬼神斬破刀と同等の武器の数々を眺め、マリナは感嘆の声をこぼす

大剣、片手剣、双剣、弓…ボウガンなど、数多くの武器が並ぶ

ヴラドが手に取ったのは、マリナが見たことがない形状の武器

「とある任務を帯びてユクモ村という場所に行っててな、この”スラッシュアックス”というものを造ってもらった。
扱いは難しいが、なれれば強力だ…。」

興味深くその武器を見つめた後、もう一度壁を見回してみる

多様な武器が並ぶ中で、圧倒的な存在者を放つ防具が一式あった…

漆黒の装甲で出来、赤い模様がある
防具の各所に見受けられる鋭い棘や牙らしきものからは、素材となったモンスターの獰猛さが伺える

マリナは防具を見て、あまりの威圧感にブルッと体を震わせた

「それは”黒き神”と謳われし覇竜を討伐した折に、街の有名な工房で加工させた防具だ。
その防具は妙に馴染むのでな…それしか防具は無い。

ふぅ……炎王龍と対峙した時にコレがあったならば、結果は幾分変わっていたのかもな…。」

防具を眺めてシミジミと語るヴラドは、どこか後悔と自責の念が感じられる

「ふむ…マリナよ、君はこの後何か予定があるかね？」

「いえ…特にありません。

街には数週間ほど居残る予定ですが？」

「なら、狩りに行ってみないか？
メルヴィスの娘がどこまで成長したのか、見てみたいのでな。」

マリナは少し思案したが、返事はすぐに決まる

「ぜひ！！
できれば、強くなれるよう御指導お願いします！」

マリナの快い返事に満足するヴラド

「良い返事だ。
指導となると…ヤツを連れていくといいな。」

「はい！！
……えと、誰をですか！？」

「まぁ、そのうちヤツの方から来るだろう。」

ヴラドの言う人物が気になるが、地下室を出て行くので、マリナは

慌ててついて行った…

ドンドルマの”悲哀の英雄”…
最強と最凶がぶつかり合う日は、着々と迫ってきている
そのことを知るのは、誰一人としていない…

第二十一話：マリナ街を行く　Ｎｏ．４（後書き）

次話で、ヴラドがとんでもない戦闘力を発揮する予定です

伏線っぽいのはりすぎましたね

第二十二話：マリナ街を行く　Ｎｏ．５（前書き）

久しぶり？に長い話しになりました

戦闘描写良く分からないんで、このくらいです

第二十二話：マリナ街を行く　Ｎｏ．５

マリナが街に来てから数日…

滞在している間、街の宿とヴラドの農場を、何度も行き来していた
農場に来るのは優秀なハンターであるヴラドに、狩りをするための
訓練を受けるのが目的だ

訓練といっても、マリナは身体能力や戦闘技術が出来上がっている
ので、その他ハンターに必要な知識や立ち回り方を学ぶだけだ

モンスターの生態や素材の有用性、そしてマリナの唯一の欠点…”
調合”だ

知識を覚えるのは良かったが、調合については…適性が皆無なので
は、と思えるくらい下手くそだ

ヴラドは課題としてマリナに、初級中の初級の回復薬の調合をさせ
てみたら、燃えないゴミが出来上がった
試しに難しい調合をさせてみたところ、怪しい煙を立ち上らせ、爆
発が起きたのだった…
間近で指導を受けながら調合するが、マリナがやると何故か失敗…
爆発する要素も無いのに、爆発する…

どうやらマリナには、調合の才に悪霊の加護がついているらしい

「まぁ…練習を積み重ねれば、いつか上手くなる。」

今日も調合の練習をしたのだが、やはり失敗…
回復薬に蜂蜜を混ぜただけなのに、毒々しい色に変色……ゲリョスの毒液みたいな色になった

「大丈夫だ。
むしろ毒液を調合出来たんだから、素晴らしい才能じゃないか？」

「グスッ……フォローになってません。」

毒液？を怨めしげに見つめ、マリナは肩を落としている
ツッコミをいれられるぶん、まだ元気はあるようだ

マリナとヴラドとでは、天と地の差があった

マリナが調合書とにらめっこしながらするのに対し、ヴラドは調合書も見ずに手際良く調合していく
先ほどからヴラドが調合しているのは、暑さ対策のクーラードリンクと、治癒力を高める活力剤だ

古龍に付けられた火傷の後遺症により、ヴラドの体は今でも炎熱に侵されているようで、苦痛を和らげるためにその二つを常用しているのだという…

マリナはヴラドの達人並みの調合術を、羨ましげに見つめる
回復薬すら満足に作れない自分に腹が立ち、何度も悔しい思いをした…

今までに成功した調合は無かったが、負けん気の強いマリナは諦めず、再び調合の訓練を再開しようとした

「今日はここまでだ。
その代わり、今日は狩りにいくぞ…。」

行動を遮られてムッとしたマリナだったが、狩りという言葉を聞いて、表情を明るくする

狩りはヴラドと出会った日以来行ってなかったのだから

ヴラドはいつの間にか防具に着替えていたので、マリナも急いで狩りに行く準備をするといっても、常にアスール装備なために、斬破刀を手にするだけで用意は済む

太刀を手にしたマリナを確認すると、ヴラドは玄関に手をかける
生身の姿でも威圧感はあったが、防具を着用したその後ろ姿はさらに威圧感が増している

前回は軽い狩りなために、ヴラドの本気の武装は見れなかったが、今回はヴラドの完全武装を目に出来た

背に差す大剣は”封龍剣・真滅一門”
マリナにはそれがどれだけ価値あるかは知らなかったが、防具同様それからも強い力を感じていた
ヴラドは大剣だけでなく、腰に重量のある片手剣を差し、自作の皮ベルトでライトボウガンを左肩にさげている
一度に三種類の武器を装備するなんて、ずいぶん欲張りなハンターだと思ったが、見た目がカッコイいので気にしないことにした

ガチャッ――ウワッ！？

ヴラドが玄関を勢い良く開くと、何かがぶつかる音と小さな悲鳴が聞こえた

「……何をしているんだ貴様は。」

「玄関を叩こうとした時に勢い良く開けられたら、誰だって転ぶと思うが？」

玄関の向こうにいたのは、蒼い防具姿の女性…カナメだ
扉を開いた時に弾き飛ばされたようで、草の上に尻餅をついて、ヴラドを睨んでいる

「あっ、カナメ様！？
お久しぶりです！！」

「え、マリナ殿――わわっ！？」

立ち上がろうと地面に手をついた時に、マリナが弾丸のように体当たりしてきて、今度は草村に押し倒される形となった

「カナメ様ぁ、クンクン……はぁ、やっぱりカナメ様だ！！」

「うぅ…頭が…。」

「えっ！？どこか怪我をしているのですか！？
誰ですか、カナメ様に手を出す不届き者は！！」

「キミだぁ！！」

マリナの天然ボケに激しくつっこむカナメ
それでもマリナが周囲をキョロキョロ見回していたので、諦めた

「そういえば、お前ら知り合いなんだってな？
どういう関係だ？」

「はい！乙女と乙女の関係です！！」

「そうだ……って違う！！
マリナ殿、少しの間お静かに願いたい！！」

「はぁ～い。」

マリナの気の抜けるような声に、ついついカナメの厳しい表情も綻んでしまう
ハッとして表情を締まらせ、カナメは用件を伝えようとしたのだが…

「丁度良い…貴様もついでに来い。」

「…一体何のことだ？
それより大事な案件が。」

「その案件は断る。
これで貴様の用件は済んだ、よって一緒に来い。」
「私の意思は無視なのか！？
えぇい、そのような勝手な真似はさせんぞ！」

「…いいから来い。」

抵抗しようとしたカナメだったが、マリナに抱きつかれて上手く動けない
もがいているうちに捕まり、ヴラドの手で二人まとめて引きずられていった…

さすがに街中を引きずられるのは嫌なので、諦めてヴラドの言葉に従う
カナメは呆れ、疲れ果てたようにため息をこぼす
右腕に可憐な少女がしっかり抱きついているせいで、カナメは歩きにくそうだ

そして街の人々は、その異様な光景に目を奪われていた

美女が美女に抱きついてれば嫌でも目立つが、主な原因はヴラドだ
黒い防具にたくさんの武器で武装した姿は、街の景観の中ではかなり浮いている

まるで戦争か、大掛かりな狩りに挑むような雰囲気だ

人々のそういった視線を感じたカナメは、途端に不機嫌そうな表情に変わる
マリナがキョトンとしていると、カナメはヴラドに一言何かを告げる
ヴラドは黙って頷くと、歩く速度を上げ、街の集会所へと向かった

集会所に着く頃には、ヴラドに集中していたイヤな視線が消え、代わりに好奇心と尊敬の眼差しが増えた

街の人々と違う反応を見せるのは、全てハンター及びギルドの職員だ
皆が皆ヴラドに憧れの目を向け、中には手を振ったり名を呼んだりしている

「ヴラドさん、人気者なんですね。」

ヴラドが手を振り返すと、ハンターたちは嬉しそうに騒ぎ出す
街を救った英雄に反応され、よほど嬉しいのだろう

「同業者にはな…。
街の住人からは、忌み嫌われている。
まぁ、当然だろうな。私の力が及ばないばかりに、街は古龍に破壊されたのだから。」

「何を言うのだ！
アナタがいたからこそ、炎龍を最小限の被害で退けられたのだぞ！
覇竜だって、アナタが討伐したではないか！！」

「多くの犠牲のもとにな…。
この話しは終いだ……それより、お前の猟団のヤツらが見ているぞ。
」

大きな声を出したために、ハンターたちの注目はさらに増えた
何より、普段冷静で物腰の柔らかいカナメが、珍しく取り乱すのだから
カナメが少し目を離していると、ヴラドはいつの間にか受付嬢の所に行き、クエストを受注していた

「カナメ様、一体どういうことなのですか？
街の人々がヴラドさんをあんな目で見てたのは、何か理由が？」

「……うむ。」

カナメの歯切れは悪く、やはり難しい表情をする
カナメだけでなく、マリナの言葉をたまたま聞いた他のハンターも、
同様に暗い表情を浮かべる

「我々ハンターは…彼が街を救った英雄と認めています。
ですが…街の人々は……彼を。」
「疫病神、死神と呼ぶ…か？」

そこへちょうど戻ってきたヴラドが、言葉を詰まらした先を言う

「このことはもう忘れろ。
私の評価など考える意味は無い…。」
それ以上何も言うな

そう付け加えた後、ヴラドは態度を一変させて、受注した依頼書を
二人に見せた
カナメは見せられた依頼書に注目し、それまでの憤りも消えた

「黒狼鳥の討伐…場所は森丘か。
なるほど、アナタとマリナ殿とで行くには、ちょうど良いクエストでは？」

カナメが笑みを浮かべると、二人は何を言っているんだ？
…というような表情をする
何かおかしなことを言ってしまったかと、微妙に焦るカナメに対し、ヴラドは一言言う

「お前も行くんだよ。
付いて来い。」

自分を連れて来た意味をようやく知ったカナメだったが、既に手遅れで、マリナの緩みかけた抱き締めが強くなった

「待ってくれヴラド！！
いくらアナタの言葉でも、私にだって予定というものが！」

「貴様は書類の上で死にたいってのか？
貴様もハンターなら、死に場所は自然の中でとは思わんのか？」

「ちょっ…危うく肯定しそうになったではないか！
それに死ぬのが前提って、何かおかしくないか！？」

「人はいずれ死ぬんだ、その中でやりたくもないことをするのは、時間の浪費だ。」

もちろんカナメとしては、書類整理などよりは、狩りに行きたいと思っている
それでも返事を渋らせるカナメは、良くも悪くも真面目な苦労人なのだ

唸るだけのカナメに対し、ヴラドは抱き付くマリナに視線を向ける
後は任せた

マリナはウインクして返すと、早速カナメの顔を覗き込む
その時マリナが火照ったような表情を浮かべたのを、ヴラドは無視しておいた

「カナメ様、ヴラドさんもそう言っているんですし、一緒に行きましょう？」

「…し、しかし私にはやるべき事が。」

「ダメ……ですか？」

「うっ…！？」

少女の涙で潤んだ上目を受け、カナメは明らかにたじろいだ
同性で”その気”が無いカナメでも、マリナの小動物のようなソレには、耐性が無かった

おまけに周囲には、猟団のメンバーも何人かいて、少女を泣かせようとするカナメに、非難の目が向けられている

二つの選択肢に葛藤したカナメは、恨めしげにヴラドを見る

明らかに、楽しんでいた

「ヴラド…帰ってきたら、仕事を手伝えよ？」

「お安い御用だ。」

結局はヴラドの手の内で、カナメは弄ばれていた

ため息をこぼして、自分に非難を浴びせたハンターを見ると、冷や汗を流して目を背けた

全員を訓練の名目でシバき倒すことを決めたのだった…

《森丘》

「それで……コイツをどうやって討伐する？」

呆れ声で呟くカナメ

「貴様らに任せよう。」
投げやりな言葉のヴラド
「ハイ、私がやります！」
元気に名乗りをあげるマリナ…

黒狼鳥を討伐するために、三人は森丘にやって来た
黒狼鳥を探すため、ヴラドの勘とやらで移動し、見事黒狼鳥を発見出来たのだが…

その黒狼鳥が何故か、段差にしゃくれた嘴が刺さった状態でもがいていたのだ

気付かれないよう、三人は背後から接近していく
一番槍は誰にするか、マリナは自分がやりたいと言っていたので、カナメとマリナの二人でかかることにした
ヴラドは岩場に登り、胡座をかいて高みの見物だ

「…私はあの毒を持つ尻尾を狙う。
マリナはそれ以外を、効率的に攻めて欲しい。」

「分かりました。
ですが、一撃目は私にお任せ下さい。」

そう言うとマリナは斬破刀を抜き、地面と水平に構える刺突技の構えをとる
マリナの珍しい太刀の構えに、カナメは興味をひかせるが、すぐに自分の龍刀を構える

「マリナ、任せたよ。」

マリナは頷くと、一気に地面を蹴る
地面に転倒してしまうのではないかというくらい、駆け出した時の体勢に不安があったが、それが黒狼鳥の目にも止まらない速度を生む

狙うは、黒狼鳥の頭を支える首

攻撃の動作に入った瞬間、予想外の動作が起きる

黒狼鳥は突き刺さっていた嘴を引き抜く、つまり首があるべき位置が変わった

対象の一点を狙うマリナの剣術にとって、それは一大事だった
だがマリナは瞬時に目標を変え、嘴を引き抜いたために浮き上がった下あごに、鋭い刺突を突き刺した

斬破刀の切っ先は黒狼鳥の嘴を貫き、深いヒビをつくり、大量の出

血を起こさせた

黒狼鳥は嘴を砕かれた痛みに叫ぶが、すぐに持ち直し、襲撃してきたマリナを睨む
黒狼鳥が目の前の標的に釘付けになっている時、カナメが動き出す

無防備な尻尾を龍刀の鋭い太刀筋が襲う
一撃必殺の一閃だったが、流石黒狼鳥といったところで、堅い甲殻が尻尾の切断を防いだ

それでも尻尾は切断寸前で、あと一太刀いれれば、完全に切れる

襲撃者が二人いることを知った黒狼鳥は、激痛と不意打ちによって激怒する
マリナとカナメを遠ざけるために、切れかけた尻尾を闇雲に振る
その際に赤い鮮血の他に、色の違う液体も飛ぶ

その正体に気付いたカナメとマリナは、飛んでくる体液をかわす

「誤算だな…。
毒腺のある場所を斬ってしまうとはな。」

カナメが斬った尻尾の位置に、運悪く毒腺があったのだ
切断面から毒液が流れ、尻尾を振る度に毒液が飛び散る
となると、もっと根元の位置で尻尾を切断しない限り、毒液が飛び散ることになる

カナメが思案する中、マリナは果敢に敵を攻めていた
危険をかえりみず、黒狼鳥の懐に潜り込み、平突きで攻撃
刺突技が堅い甲殻の間を貫き、かわされても平突きを横に振り抜き、
微々たるものながら確実なダメージを与えている

カナメも負けじと、黒狼鳥に突撃する
振り返った黒狼鳥の顔面を斬り、そのまま股をくぐって尻尾の位置
に行き、斬り上げる
根元に近い尻尾はやはり固かったが、龍刀の切れ味が勝る

最初の一撃ほどではないが、血液が流れ出し、毒液も流出していない

立て続けに攻撃を浴びた黒狼鳥は、距離を保つ意味で、背後に羽ば
たく
その時の風圧が、二人の体勢を崩した
間髪入れずに、黒狼鳥がマリナに突進する
マリナは横に大きく飛んで、突進を回避する

「危ない危な…やばっ！！」

マリナが振り返った先から、黒狼鳥が再び突進してきた

黒狼鳥は走り抜けず、かわされた位置で立ち止まり、体勢を崩した
マリナに攻撃してきたのだ

迫り来る衝撃に身構え、目をつむっていると、横から引っ張られた

「うぅ…ありがとうございます、カナメ様。」

「構わん、次が来るぞ！」

黒狼鳥はまた立ち止まり、再びこちらに突進する
ただし、同じ手はくらわない

突進間近で左右に分かれた二人は、黒狼鳥の脚を左右から斬りつけた

脚へのダメージによって転倒し、大きな隙が生まれる
倒れ込んだ黒狼鳥に容赦ない剣撃を浴びせると、深追いせずに離れる

その行動は正しく、黒狼鳥は立ち上がりざまに尻尾を振り乱した

お互いに距離をとって見据えるが、黒狼鳥はお構いなしに突進

同じ動作には慣れていたが、黒狼鳥は立ち止まって再び突進ではなく、金属音のような咆哮をあげた

耳を裂くような痛烈な咆哮に、マリナの動きは泊まり、黒狼鳥はそこへ必殺の一撃を浴びせようとする

尻尾はまだ切れていなく、鋭い甲殻と猛毒は健在
全力の力と憤怒のこもった、最強最悪のサマーソルト

逃げようにも、予備動作に入った黒狼鳥からは、逃げられない

「そう来ると思ったぞ？」

黒狼鳥の凶悪な尻尾が迫ったと思った時に、カナメの不敵な声が聞こえ、次の瞬間には尻尾があらぬ方向に吹っ飛んでいった

尻尾を失った黒狼鳥は体勢を崩し、地面に墜落する

「危ないところだったな。
半分賭けみたいなところだったが、うまくいって良かった。」

「い、一体何をしたんですか！？」

マリナの疑問に頷くと、どこか誇らしげに語る

黒狼鳥の咆哮には自分も怯んだが、前もって耳を防いだために、大した被害は無し

狙いをマリナに定め、サマーソルトを敢行した時に、最高の一太刀を尻尾に合わせたそうだ
皮肉にも、黒狼鳥の強力な力が尻尾を切断させることになったそうだ

説明をしていると、黒狼鳥に動きがあったために、気を引き締める

しかし、黒狼鳥の目を見たカナメは、静かに武器を下ろした
マリナも同じく、構えを解いた

黒狼鳥の目は先ほどまでのような獰猛さは無く、幼竜のような弱気な目だ

二人は今まで、このような目をするモンスターを、何度も見てきたかなわないと悟り、逃げ出そうとするモンスターの目だ

中には最期まで諦めず、大きな怒りを持って反撃する者もいたが、それは稀少な存在だ

だが依頼を請けた以上、弱ったモンスターであろうと、命乞いをするようなモンスターであろうと、仕留めなければならない

武器を構え直した二人を見て、黒狼は脚を引きずりながら、反対の方向に振り返る

「黒狼鳥の呼び名も形無しだな。

弱さを知った貴様は、デカいだけのただの雛鳥だ。」

『ギャ！？』

突然黒狼鳥の前に立ちはだかったヴラドは、驚愕する黒狼鳥の顔面を、大剣で殴り倒す
嘴は完全に砕け散り、殴りつけられた顔面は、大きく陥没した
瀕死とはいえ、一撃で死に至らせたヴラドに、マリナは心の中で賞賛した

「どうだヴラド、初めてとはいえ我々の連携はなかなかのものだったろう？」

カナメはマリナの肩を抱き、誇らしげにに言う
マリナも彼女に認められたようで、とても嬉しそうだ

「確かに”連携”だけはな…。
高台で見物していたが、お前たちの欠点はだいたい分かった。」

大剣わ地面に刺し、ヴラドは腕を組む

「マリナ、貴様は無闇やたらに攻めすぎだ。
持久力と俊敏性を持って戦うのはいいが、その荒削りな攻め方は見直していった方がいい。

多少の傷は覚悟しているつもりだろうが、黒狼鳥のような、毒のあるモンスターには気をつけろ。」

「あぅ…す、すみません。」

ヴラドの厳しい言葉に落ち込むマリナ

「だが、自分に合った戦い方をしているのは良いことだ。
突きを主体とした攻撃は威力に欠けるが、敵の弱点を的確に攻撃するのは賞賛にあたいする。
ごり押し気味を解消すれば、ずいぶんと良くなるはずだ。」

最後に頭を撫でてもらい、マリナはぱっと表情を明るくする

「なかなか良い指摘だな。
私には何か指導することはないか？」

カナメも期待したような表情をし、ヴラドに教えを請おうとしている

「…貴様には何も無い。
自分で考えろ。」

「ええぇ！？な、何故だ！？

マリナにも教えたんだから、私にもアドバイスしてくれてもいいじゃないか！」

「お前はハンター歴が長いんだから、一人で考えろ。」

「グスッ……マリナと私の差、酷くないか？
こんなにも可憐な少女が泣いて頼んだいるというのに。」

カナメは以前、マリナにくらったような、涙目＋上目を試してみる

「お前は少女と呼べるような歳ではないだろう。
そんな嘘泣き見たところで、私の心は少しも歪まん。」

ヴラドに容赦なく一蹴させられ、カナメは怒って涙を吹き飛ばす

「私は十代だ！！
よってまだ少女と呼ばれる権利は持っているはずだ！！
そんなんでは、女性にモテないぞ！！」

「心配無用。
私には妻がいるし、子どもたちも世に送り出した。
よって、私の男としての役目は終わった。」

「ウググ…。」

ヴラドの整然とした態度に何も言えなくなり、カナメはワナワナと震える

もはや最初のアドバイスをもらえなかったことより、女性として扱ってくれないヴラドへの怒りだけだ

「もう、ヴラドさん！！
あまりカナメ様をからかってはいけませんよ、アドバイスくらいあげて下さいよ。」

「ふむ…貴様がそう言うならな。」

「おい、なんだその私との差は！！
酷すぎないか！？」

ヴラドはカナメの抗議を無視し、腕を組んで思案する
真面目に考えてくれてるのが分かったので、黙っている

「貴様は…難しいんだよ。
ほぼ完璧だからな…。
自分に合った戦いもするし、的確な行動もするし…。
お前は、自分の何が悪いか分かるか？」

「完璧というのに、欠点などあるのか？」

「質問に質問で返すな。」

やはり突き放されるような口調で言われ、カナメはたじろぐ
自分の欠点は何か？
カナメは必死に考えるが、欠点という欠点が見当たらない
それでも、何かしらあるはずだと悩み考える

それに対しヴラドはため息をこぼし、自分の頭を指差す

「貴様は何事も真面目に考え、物事の表面だけを捉えすぎなんだよ。
言うなれば、人に右を向いてろと言われたら、一生右を向いてるよ
うなヤツだ。
だから、もし不測の事態に陥った時、貴様は焦って使いものにな
らなくなる。

だからお前は、もっと馬鹿らしくなれ。」

「ば、馬鹿？」

カナメは面食らったようになり、横のマリナはもはや話しが分から
ず、虫を追い掛けて遊んでいる

「お前はマリナと一緒に、しばらく訓練を共にしろ。
そうすれば、お互いに足りないものが何か…自ずと分かるはずだ。」

そう最後にまとめると、地面に刺さった大剣を肩に担ぐ

「さて、ここからは私の出番だな。
マリナを連れて、少し離れていろ。」

「何故だ？」

カナメの問いかけに、ヴラドは大剣の切っ先を、森丘の中心にそびえる山に向ける

「お前ら…騒ぎすぎだ。
飛竜のつがいが、私たちに気付いたじゃないか。」

不敵なその言葉のすぐ後に、山の方角から大きな雄叫びが響き渡った

山から赤い竜と緑の竜が、一直線にやって来た

「な、火竜のつがいだと！？
依頼書にはそんなことは書いてなかったぞ！？」

「だからお前はダメなんだ。
敵が黒狼鳥だけなど、誰も言ってはいない。
さあ、貴様らは邪魔だから隠れていろ！！」

カナメは混乱しながらも、マリナの手を引いて草村に飛び込む

「まずは、雌火竜に死んでもらおう。」

皮ベルトで下げられたライトボウガンを左手で掴み、銃口を空中の雌火竜へと向ける
引き金を引くと銃口が火を吹き、弾丸が雌火竜の顔面に直撃し、時間を置いて弾丸が爆発した

爆発に驚いて雌火竜は墜落した

リオレウスは空中から火球を放ちまくるが、ヴラドはそれらを無視し、雌火竜に接近
立ち上がった雌火竜の脚を、一撃で切断した

脚の支えを失った雌火竜は再び倒れ、ヴラドはその頭に封龍剣を根深く突き刺した

しばらくもがいていた雌火竜だったが、大量の出血と強力な龍属性により、絶命する

ヴラドは雌火竜を仕留めたことに慢心せず、次なる火竜へと目を向ける
リオレウスは地上に降り立ち、雌火竜が殺されたことに激怒していた

火竜は怒りのままに、ヴラドに向かって突進する
先ほどの黒狼鳥などとは比べ物にならない、直撃したら即死するような勢いだ

それに対しヴラドは、腰に差してあった片手剣を抜き、火竜に向かって投げた
片手剣は回転しながら飛んでいき、火竜の右目へと突き刺さる

右目を奪われながらも、火竜はそのまま突進
しかし、ヴラドは動じない

封龍剣を両手で持ち、肩に担いで最大限にまで力を溜める

火竜が範囲に踏み込んだ時、ヴラドの封龍剣が溜められた力から解放され、空を斬る音と共に振り下ろされた

しかし、肉が斬れるような音ではなく、鈍い音がエリアにこだました
目の前の火竜は斬れていなく、代わりに大剣の威力を受けた地面が割れていた

「怖じ気づきやがって…。
貴様ももはや、空の王者などという、大層な存在などではない！！」

火竜は封龍剣が振り下ろされる瞬間、立ち止まっていたのだ
ヴラドは地面を割った封龍剣を持ち、身を捻って火竜の側頭部を殴りつける

火竜は脳震とうを起こしてよろめき、雌火竜の亡骸近くに倒れる
ヴラドは火竜の片翼を封龍剣で刺し貫き、身動きが出来なくした
それから火竜の右目に突き刺さったままの片手剣を引き抜き、ボウガンの銃口を頭部に向けた

「汝がため、安寧なる死後を迎えられるよう神に祈ろう…。
安らかに眠りたまえ。」

今までの激情を感じさせない、穏やかで透き通るような声で呟く
そして、ボウガンの引き金を引き、弾丸が火竜を苦痛から解き放った…

「あの……なんだか分からないけど、凄かったです！！」

マリナがはしゃぎながら飛び出していくと、ヴラドはちょうど、火竜の開いた目を閉じさせてやっているところだった

「優しいんですね…。」

「神を信仰する私が勝手にやってることだ…。」

火竜の目を閉じさせると、ヴラドはゆっくりと立ち上がった

「飛竜のつがいか…もうそんな時期か。
私も今より忙しくなりそうだな。」

「そうだな…。」

「え？どんな時期がくるんですか？」

自分が知らない話題で置いて行かれないよう、カナメに尋ねる

「モンスターの繁殖期がやって来るのだよ。」

納得したような顔で頷くと、頬に指を当てて空を仰ぐ
（ってことは、兄ちゃんも繁殖期なのかな？
いいお嫁さんでも見つけるといいのにね。）

「なあ、ヴラド…。
時間が空いた今だから言うが…。
密林地帯で、外来種と思われるモンスターを発見した。
ギルドにそれを報告したところ、私が再び調査に向かうことになった。
出来れば、協力してくれないか？」

封龍剣を肩に担ぐヴラドは、高台から草原を見下ろしながら聞いていた
それからため息をついて、背後のカナメに振り返る

「残念ながら、私はまた古龍観測局と行動を共にする。
街にはしばらく帰らない。」

「そうか…残念だな。
ではアナタがいない間、犬や家畜たちの面倒を見よう。」

良き回答を得られず肩を落としたが、すぐに立ち直る

「すまん、助かる。
報告ではシュレイド地方で、老山龍が動きだしたらしい。
私もそれに参加しなければならない。」

「いえ、大丈夫です。
ただ外来種が自然界にどう影響を与えるか、少し不安でしてな。」

「心配するな…。
そのモンスターが自然の秩序を乱すようなら、私が神の名の下に裁きを下す。」

カナメにそう約束すると、マリナに視線を向け、話題を変える

「アイツは優秀なハンターになるだろう。
私がいない間、あの娘を鍛えてやるといい。」

「フッ、元よりそのつもりだ。
そういえば、アナタが珍しく彼女に目を止めているのは、どういった理由ですかな？」

「なに……友との約束を守っているだけだ。
火竜の素材は全てやる…私は一足先に帰る。」

そう言うと、ヴラドは火竜の亡骸を横目に、その場から立ち去っていった

「あ、カナメ様！
ヴラドさん、どこ行ったんですか？」

「彼なら、用事があると言って先に帰ったよ。」

「へぇ……。」

ポーッとヴラドが消えていった方を見た後、マリナは満面の笑みを浮かべて振り返る

「なら…カナメ様と二人きりですね。
そうだ、疲れたことですし……キャンプでお休みしませんか？」

「うむ…そうだな。
いろいろあって、私も疲れたな。」

マリナはニッコリ笑うと、カナメの手を引いてキャンプへと帰っていった…

第二十二話：マリナ街を行く　Ｎｏ．５（後書き）

ヴラド・ウルバヌス　設定

武器
・封龍剣【真滅一門】
・マスターバング
・クロノスパンツァー

防具
アカム一式

発動スキル
・見切り＋３
・切れ味レベル＋１

天賦のスキル
・心眼
・業物
・風圧【大】無効
・火事場力＋２
・装填速度＋３
ｅｔｃ……

本作最強のハンター

主人公はチートじゃないけど、コイツはチート

大剣を軽々と振り回し、片手剣を投げナイフのように投擲し、ライトボウガンを片手で撃ちまくる剛腕を持つ

昔、炎王龍の火焔を身に浴び、以来ずっと火傷の後遺症に苦しめられている

カナメはヴラドといると、いじられ役になる…

第二十三話：再戦（前書き）

サブタイトルの通り、ヤツと再戦です

主人公の隠れた力が開花？します

第二十三話：再戦

マリナが街に行ってから、二週間が経とうとしていた

獣人たちの村は、相変わらず和やかでのんびりとしていて、いかにも平和を満喫しているような雰囲気だ

ただ忘れてはいけないのが、その平和を維持していられるのは、一匹の竜がいるおかげだということだ…

モモｓｉｄｅ

マリ姉が帰ってこないと知った旦那さんは、それはもう、何て言っていいか分からニャいくらい暴れたニャ

まぁ、暴食期の時よりは幾分マシだったニャ…

でも二、三日暴れたと思ったら、急に大人しくなったニャ

旦那さんが壊れたのニャ

今旦那さんは、西の方角を眺めてるのニャ

砂漠しかない景色を見て、旦那さんは何が楽しいニャ？

オイラの旦那さんは、痴呆症なのニャ

「（さて、そろそろ行くか。）」

ん？旦那さんどこか行く気かニャ？
まぁ、オイラの知ったことじゃないのニャ
旦那さんの言葉を無視して居眠りしてたら、頭に物凄い衝撃が来たニャ
痛かったニャ

「（さて、そろそろ行くか。）」

ニャ？旦那さんがまた同じこと言ったニャ
いよいよ認知症になったのニャ！

ゴツンッ！
ブニャ！？

「（おいコラ、何か言うことあんだろ。）」

旦那さん何か言って欲しそうに見てるけど、痛くてそれどこじゃないのニャ！！
でも無視してまたやられるのは嫌だから、聞いてやるニャ！

「えと…旦那さんはどこ行くニャ？」

「（昔、あるやつと決闘してな…お前覚えてるか？）」

「んなもん知らないニャ、そんな下らない話し…。」

決闘なんてバカバカしいニャ、そんな暑苦しいことは御免だニャ
それに、オイラは覚えが悪いから、昔のことなんて忘れたニャ

「（よし、お前の部屋のマタタビは全部燃やしてやるよ。）」

「ニャーー！！ごめんなさいニャ！！
もう言わないから、許してニャ！！」

オイラは慌てて地面に額をこすりつけて謝ったのニャ
プライド？
そんなもん、旦那さん相手にはゴミクズでしかないニャ
なんたって、言ったことは本当にやるからニャ！

「分かったニャ、話しを真面目に聞いてやるニャ！」

「（オイ、なんだその態度は？）」

「うっ……それで、旦那さんはどこに何をしに行くニャ？」

「（うむ…だがこれはヤツと俺との因縁、他人が知ることではない。）」

うん…とりあえず言わせてなのニャ

最初から話す気ないなら、オイラに話しをふるなーーなのニャ！！

モモｓｉｄｅ　ｏｕｔ

《砂漠》

「（相変わらず…バカみたいな暑さだな、ここは。）」

今俺は、獣人の村から西に広がる砂漠に来ている
ギラギラとした太陽と、どこまでも広がる熱砂の海…数年前来た時と一緒だ
壮大で過酷な大自然は、今も昔も変わらない

だけど、俺はだいぶ変わった…

数年前の俺とは比べ物にならないくらい、俺の戦闘力は上昇したし、
過酷な気候に対する適応力も身に付いた
俺の身体は、親父並みに大きくなり、今では水竜や鎧竜に匹敵する
巨大にまで成長した

喰えば喰う程に、闘えば闘う程に俺は最強に近付き、連戦連勝の毎日…

ただし、無敗ではない

俺は数年前に、砂漠の暴君と謳われる角竜に、完膚無きまでに叩きのめされた

当時は未熟だったとはいえ、負けは負け…

だが、やられっぱなしの俺ではない

今日はヤツに再戦を挑み、汚名を返上する時だ…

「（といっても、どこにいるのかねぇ？）」

俺の周りには砂丘しかなく、小型のモンスターも、砂竜の姿も無い

俺はその理由を知っている

ここを縄張りとする角竜が、その絶対的な暴力をもって、あらゆる肉食獣を寄せ付けないからだ

数年前に訪れた時には、群れの首領を失ったゲネポスや、餓死寸前の砂竜がいたが、今はそれもいない

どこまで広がる砂漠しかない、殺風景な景観だ

砂漠をしらみつぶしに探すのもいいが、俺には食料事情があるので、却下
ヤツと闘うとしたら、村の位置に近いこの場所で闘いたい

そこで俺は一つ、角竜についてのことを思い出す

確か…プライドが高かったはずだ…
モモとは大違いだな

俺は空気を大量に肺に吸い込み、大きく口を開けた

「（オラ出てこい！！
脳筋片角猪突野郎！！）」
「（誰が脳筋じゃあぁ！）」

「（うおっ！？）」

こんなにうまくいくとは思わなかった

俺が罵声を飛ばした瞬間、目の前の岩場付近から、大量の砂塵が巻き上がった

砂塵から姿を現したのは、朱色の甲殻に覆われた角竜、角は一本し

かない
前回、俺が最後の最後でつけてやった、唯一の傷痕だ
角竜の希少種？っぽいやつは、派手な登場とは裏腹に、穏やかに近付いてきた

「（ほう…デカくなったな、小僧！）」
「（お前はどこの聖帝だ！
というか、お前脳筋のくせに話せるのか！？）」
「（脳筋言うんじゃねぇ！
話す程度のことなら、我輩には朝飯前だボケ！！）」

どうやらコイツは、脳筋という単語に過敏らしい
あれ？コイツってこんな性格だったっけか？

「（テメェ…だいぶキャラ崩れてんじゃねえか！）」
「（えぇいやかましい！！
元はといえば、貴様が全部悪いんだ！！）」
「（責任転嫁か！？）」
「（黙れ、とにかく死ねぇ！！）」

コイツの怒りの理由はまったく分からないが、行動が早くて助かる
俺はコイツと話すためではなく、闘うために来たのだから

角竜のあの重厚な尻尾が、勢い良く振られた
速度・角度・威力、それら全てが合わさっている
怒りで冷静さに欠けているというのに、こんなにも最高の一撃を繰り出せるとは、賞賛に価する

だが今の俺には、かわせない攻撃ではない

俺は後方に素早く退き、姿勢を低くする
俺の頭上を尻尾が通り過ぎたのを感じ、俺も同じように、尻尾をなぎ払う

角竜は俺の攻撃に驚いていたが、そのまま回転し、俺の尻尾に自分の尻尾を叩き付け、威力を相殺させた

「（どうやら、見かけ倒しの雑魚とは違うようだな。）」

「（あぁ、油断してると大怪我するぜ？）」

俺の攻撃をかわした角竜の雰囲気が一気に変わった
先ほどまではどこか余裕感が感じられたが、今の角竜からは、油断を廃した鋭い殺気が放たれている

「（ほざくな！貴様如きにおくれを取る我輩ではないわ！！）」

凄まじい怒気に突き動かされ、角竜十八番の突進が迫る

俺が横に回避すると角竜が側面をかすり、勢いのままにそのまま突進、数十メートル先でブレーキをかける

徐々に速度を緩めていったが、角竜は突如反転、勢いが消されないうちに再び突進

虚をつかれた俺は完全に反応が遅れ、角竜の堅い肉体が激突する

角竜は激突する寸前に、頭を下げて俺の体に潜り込ませ、一気に突き上げた

激突の威力と角竜の筋肉が合わさって、重量級の俺を宙に浮き、ロクに受け身もとれぬまま地面に墜落した

「（フハハハハ！！

その程度の力で我輩に勝とうなど、夢のまた夢よ！）」

「（まだまだ、テメェの遅い動きが可哀想だから、ワザとくらってやったんだよ！

さあ来い、脳筋野郎！！）」

「（だから脳筋言うなー！！）」

角竜は再び高威力の突進をする

バカの一つ覚えと言いたいところだが、コイツのは磨き上げられた、最高の突進だ
だが、真っ直ぐに走る突進の欠点は、改善されていない

俺は角竜の激突を前に、素早く横に跳んで回避する

巨体で重量のある恐暴竜には、本来無理な動作だが、俺は鍛錬と日々の戦闘である程度の身軽さを覚えた
素早い動きのモンスターには劣るが、コイツ相手には十分だった

横に跳んですぐ、俺は跳んだ先の地面を再度踏みしめ、横の角竜に渾身の体当たりをぶつけた
砂漠の砂に足をとられ若干威力が下がったが、側面からの攻撃を受けた角竜は、見事なまでに吹き飛んだ

すかさず追い討ちをかけようと接近したが、素早く立ち上がって角を振り回す角竜の動きに、追撃は失敗する

「（おのれ…やってくれるじゃないか貴様！！
我輩を地面に伏させたこと、後悔させてやる！）」

プライドが高い角竜は、案の定激怒した
怒りで身体能力が上昇したために、今度は上手くはいかない

俺は突進を連発される前に、至近距離にまで接近する
近距離でも角竜は強力だが、俺は近距離なら力を発揮出来る

立ち上がったばかりで安定していない角竜は、俺の二発目の体当たりで、大きくよろめく
よろめく角竜に、尻尾の一撃を浴びせるが、かろうじて角竜は踏みとどまる

攻撃を受け続けた角竜は、もはや言葉を発さず、血走った目で俺を睨んでいた

その怒りに満ちた目を直視した俺は、一瞬動きが鈍ってしまった

俺に出来た一瞬の隙を見逃さず、角竜は身を捻って角を振り上げる
角の先端が俺の目の上を切り裂き、血が血飛沫となって噴き出す

攻撃でひるんだ隙に、角竜はそのまま角で砂を掻き分け、その巨体は砂中に姿を消した

突如静けさに包まれる砂漠
俺は次に来る攻撃に備え、周囲を警戒した
付近に砂塵が巻き起こることも、砂中を移動する振動もないため、

どこから襲ってくるか分からない

周囲を警戒していると、前方の砂原で動作があった
砂塵が舞うそれは、次の瞬間に弾丸のように飛び出してくるものだ
特攻に備える俺だったが、飛び出して来たのは角竜ではなく、大量の岩弾

岩石は空高く吹き飛んでいき、俺の近くに降り注ぐ

意表を突かれた俺は混乱し、その俺に対し角竜は砂中から一気に飛び出し、全重量をのせた体当たりをぶつけてきた

俺の巨体は砂の上に転倒し、大きな衝撃音が響く

「（やはり本気の闘争は心躍るものがある！！
さあ立ち上がれ！
立って怒りのままに、我輩に全力を出し切ってみそろ！！）」

「（この…戦闘狂が！！
調子に乗るなよ！！）」

肉体に感じる激痛に意識を持っていくと、沸々と俺の感情が煮えたぎっていく
それに伴い、全身の筋肉が隆起していき、一回りデカくなる

「（ハハハハ！もっとだ、もっと怒れ！！
激情を力に変え、我輩に全てを見せ付けろ！！）」

「（テメェ、ぶち殺す！）」

怒りはまだ浅く、身体の傷痕は開いていない
だが、怒りによって力は上昇している

角竜は初めて見る俺の異様な変異ぶりを見て、ひるみもせずむしろ、心底楽しそうに狂喜した

俺と角竜はほぼ同時に走り出し、勢い良く衝突する
爆発音にも近いような、形容し難い凄まじい衝撃音が響き、俺と角竜は後ずさる

それから、至近距離で互いの乱撃が起こる

角竜が自慢の角を突き、俺はそれを首の動きでかわして噛みつく
俺が大口を開けて噛み付こうとすれば、角竜は角で俺の動きをいなして、角を突き上げる

激しい乱撃をいなし合いながらも、たまに攻撃が抜けて血肉が飛び散る

お互いに傷が増えれば増えるほど、闘いの激しさはましていき、また、怒りの絶頂に近付いていく

そしてソレは、同時に達した

俺は傷の痛みと苛立ちにより、角竜は戦闘の興奮により全力を発揮する

「（素晴らしい、最高の気分だ！！
貴様と闘うに小細工は不要！
真っ向勝負の誇り高き死闘をしてみたくなったわ！！）」

「（御託はいいからかかってきやがれ！！
お望み通り、本気の力でテメェをボコボコにしてやる！！）」

闘いに酔いしれる角竜が狂ったように叫び、俺は身も竦むような唸り声をあげて再び激突する

俺は大口を開けて突進して角竜の肩に喰らい付き、角竜は片角を俺の肩に深々と突き刺した
極度の興奮状態が互いの痛覚を鈍くしているが、傷からは大量の血が流れ出ている

俺が顎の力を強めれば角竜は負けじと、首を動かして角をねじ込んでくる
お互いに膠着状態が続き、どちらの体力が尽きるかの勝負になる

互いのサイズ的に体力は互角だったが、ジワジワときた激痛に対し、

俺の怒りは限界点を超えようとしていた…

シュー…シュー……

膠着状態で何の動作音もない中、液体が蒸発するような音が鳴り出す

（ム？この音は一体？）

その不思議な音に角竜の興奮が鎮まり、冷静になった角竜はその音の原因を探る

そして、ソレが何なのかをすぐに理解した

自分が相対する恐暴竜の体に流れる血が蒸発し、赤黒く凝固していたのだ

それだけでなく、恐暴竜に突き刺さった角から伝わる熱は、生きている生物が持つものとは思えないくらい熱かった

角竜は驚愕のあまり角を引き抜いてしまう

そして次の瞬間、恐暴竜の筋肉が更に隆起し、凝固していた血液の塊が弾け飛ぶ

隆起した筋肉は多数の古傷を開くが、それだけでなく、古傷が開きすぎておびただしい血が流れ出た

血は高熱の体温により凝固し、すぐさま傷は塞がる

その際、水の中に焼け石を入れたような、大量の蒸気が生まれた

今の恐暴竜は定期的に来る暴食期など比にならない、凶悪な状態と化している
限界を超えた怒りが理性と知性を無くし、目に映る敵を抹殺する”恐王”となった

恐王と暴君の死闘…

苛烈を極める第二戦が勃発しようとしていた

角を外してしまった角竜だったが、恐暴竜は恐るべき力で肩に噛み付いたまま

角竜は外しにかかろうとしたが、恐暴竜は単純な力のみで角竜を投げ飛ばした

「（ヌゥウウ！！なんという力だ！！）」

投げ飛ばされた角竜は、かろうじて受け身をとって威力を軽減させていた
顔を上げて恐暴竜を見れば、堅い何かを噛み砕いて喰っていた
それは角竜の肩の甲殻、及びその下の肉だった

自分の肉体を喰われた角竜は怒り、必殺の突進の構えをとる

肉を飲み込んだ恐暴竜は、次に大きく息を吸い込み出した
その動作からブレスが来ることを予感した角竜は、突進を停止させ、回避行動を取る

恐暴竜は極限まで吸い込んだ後、一瞬動作を止め、次の瞬間前方に向かって赤黒いガス状のブレスを吐いた
既に回避行動をとっていた角竜は、恐暴竜のブレスを見て戦慄した

恐暴竜の口から放たれたブレスは、前方に扇状に広がる
ブレスは広範囲でいて、放たれたブレス自体の長さも尋常ではない
それで恐暴竜はブレスをなぎ払うのだから、前方１８０。全てが射程に入っている

ブレスを吐き終えた恐暴竜は、再び息を吸い込む
今度は角竜を正面に見据えているため、回避行動は無意味だ

一か八かで角竜は恐暴竜に向かって、突進を敢行する
この距離なら、ガス状のブレスすらも突き破り、強力な一撃を与えられるはずだった…

もう少しで角が恐暴竜の顔面を刺し貫くところで、角竜は耳をつんざく程の大咆哮が襲う
それと同時に、凄まじい衝撃をくらって角竜は後方に吹き飛ばされた

予想外の攻撃を受けた角竜は、信じられないといった表情を浮かべる

（我輩は何をされたのだ！？
ブレス？体当たり？
否…あれは正しく轟竜の、もしくは…。
いや有り得ん、ヤツ以外にアレをなせる者はおらんはずだ！！）

角竜の頭は混乱していたが、前方の恐暴竜が動き、直ぐさま戦闘体勢を取る
しかし、先ほどの強力な攻撃により、意識もうろうとなっていた
恐暴竜と角竜は睨み合うように視線を交わしていたが、やがて……
恐暴竜が大地に沈んだ
そして…スースーと、気が抜けるような呼吸音が聞こえてきた

かくいう角竜もまた、体力消耗によって砂原に崩れ落ち、恐暴竜と同様に意識を失った……

熱砂の闘争ここに終結

この死闘は引き分けという形で幕を閉じた

しかし、この死闘を見つめていた一部のモンスターたちによって、

悪食の恐王と片角の暴君の闘いは永久に語り継がれることになる…

第二十三話：再戦（後書き）

主人公が途中圧倒的に強くなったのは、とてつもない怒りのため…

激しい憤怒が体内のエネルギーを熱に変え、圧倒的な力を生み出す
高熱の体温は、体外の血液を一瞬で蒸発させる

身体能力、恐暴性、肺活量などが上昇
その力は角竜の巨体をも投げ飛ばし、ブレスを広範囲に放つという
尋常でない戦闘力を発揮する

反動として怒りが過ぎれば深い休眠状態になり、休眠でエネルギー
が回復しなかったら、高確率で暴食状態となって目覚める

この小説内では、この状態を第二段階目の怒り状態と設定しますWW
これを考えついたのは、ラージャンみたいになったらいいなぁと思
ったからです

この怒り状態になる前動作としては、咆哮をあげて一瞬で古傷が開
き、血が蒸発する姿を想像してもらえれば…

あと主人公の最後の一撃ですが、
轟竜の咆哮＋
覇竜のソニックブラストの小型版を併せ持ったものであります
ちなみに予定では、もう一段階の怒り状態を計画しております

第二十四話：義兄弟の誓い（前書き）

主人公と角竜は仲良くなっちゃいます

第二十四話：義兄弟の誓い

スピ～…スースー…パチンッ！
フガッ！

何かがはじける音と呼吸が苦しかったことで、俺は突然深い眠りから醒めた

起き上がろうとしたが、ものすごいけだるさに全身に力が入らない
心なしか、空腹感もある
無理して動くのも面倒なので、俺はそのままの姿勢でジッとする

だんだんと意識がはっきりし、今までの経緯を思い出していく

自分は確か、あの憎たらしい角竜をぶっ飛ばすために、砂漠に来た
闘いの途中に意識が無くなったが、自分がこうして倒れているということは、リベンジならずに負けたのだろうか？

そう思うと、虚しくなって大きなため息がこぼれる

「（オイ……なにため息なんかついてんだバカ者。）」

はて…おかしな声が聞こえるぞ？

俺は声のした方向を向いてみると、あら不思議…
自分と同じように、傷だらけで倒れている角竜がいた
俺が驚いたような表情をしていると、あからさまに不機嫌になった

「（ジロジロ見てんじゃねえぞコラ…。）」

「（なんだこの野郎。
テメェがぶっ倒れてるってことは、俺がボコボコにしてやったってことか？）」

「（寝言は寝て言いやがれバカ野郎。
俺が倒れてんのは、足が滑ったからだボケ。）」

目が合った瞬間に、お互い罵声を浴びせ始める
しかしどちらも倒れていて、その状態で罵り合う姿はおかしな光景だった

「（いいか、貴様は我輩に勝ったわけではないぞ。
貴様の方が最初に倒れたのだから、勝者は我輩だ。）」

「（ケッ…小せぇ野郎だなテメェは。
そんな下らねぇこと言ってるから、俺にやられちまうんだよ。）」

「（何だとコラ！もう一度言ってみや――ガッ！？）」
「（上等だ！何度でも言って――アガッ！？）」

お互いにいきり立って無理やり立ち上がったが、体に残る激痛が響いてまた崩れ落ちた
しばらく悶絶した後、また睨み合いが再開される

「（忌々しい…この痛みが無かったら、お前を八つ裂きにしてやるのにな。）」

「（貴様に我輩を超えるなど、一生涯かけても不可能だ。
そうやって言い訳をしてるのが、いい証拠だ。）」

「（負け犬が偉そうに講釈垂れてんじゃねぇよ、この脳筋野郎！。）」

「（脳筋って言うんじゃねえ！）」

やはり脳筋という言葉には、過剰に反応してきた
そんなあからさまに否定したのでは、自分でもそれを認識しているのが分かる
脳筋という言葉を始まりに、またまた罵り合いが再開された

やがて罵声のネタが尽きたのと、闘いの疲労とでお互いの口数は減

っていき、最後はただの睨み合いになる
その睨み合いも、やがては飽きて止めてしまった

「（はぁ…貴様とのやり取りは疲れる。）」

「（全くだ……だけど全力でぶつかり合った後に、こうやっているのもなんか心地良い気がするな。）」

今の俺には闘いに勝てなかったことへの悔しさなどなく、むしろ全力を出せた清々しい気分でいっぱいだった

「（フッ…同感だ。
我輩がここまで本気になったのは、貴様が初めてかもしれんな。）」

暴言・誹謗を飛ばしながらも、俺たちはお互いの健闘を讃え合っていた
それを素直に口にすることは無いが、言わなくても通じるものが俺たちにはあった…

「（全く…貴様に噛まれた肩が未だに痛むではないか。）」

「（それを言うなら、お前が角をねじ込んできたせいで、肩の感覚が全くねぇよ。）」

俺たちは互いの傷を見比べ、苦笑した
怒りと興奮で我を忘れていた俺たちは、まさかこんな大きな傷を互いにつけたのかと驚いた
それから俺たちは、同じタイミングで大笑いした
もはや俺たちに私怨や確執などなく、互いに傷を付け合い、力を認め合った好敵手となった

「（お前となんか闘ってたら、命がいくつあっても足りないな。）」

「（貴様とはよく考えが合うのう。
……なぁ、貴様さえよければ我輩と兄弟分にならないか？）」

「（は…辛気くさい面して、何言ってやがる。）」

「（我輩は真面目に言ってるのだぞ？）」

俺は角竜の真剣な面もちと声色に、浮かべていた笑みを引っ込めた

「（いいぜ…ただし、上下のない五分の兄弟分だぞ？）」

「（最初からそのつもりだ。）」

俺たちは不敵な笑みを浮かべると、痛む体を無理やり起こす
まだ癒えていない傷から出血するが、真剣な場面に俺たちは激痛を

無視する

「（我輩たちには互いに付け合った傷痕がある。
以後、これが我輩らの兄弟としての証となる。
貴様が危機に陥ったり、助けを必要とした場合、地の果てであっても駆けつけよう。
絶対にだ…。）」

「（へッ、地獄の果てでも…だろう？
地獄から来た兄弟、ここに誕生ってな。）」

「（地獄から来た兄弟か…どこかで聞いたことがある気がするが、
良い呼び名だ。
―――っ！？）」

角竜は突然体勢を崩して砂の上に倒れる
傷だらけの体で無理をしたせいで、体が動かなくなったのだろう
もっとも、俺の傷はあらかた癒えているおかげで無事だが

「（勘違いするなよ！！
砂に足を取られて滑っただけであって、耐えられずに転倒したわけ
ではないぞ！！）」

「（はいはい分かってるよ。
俺は腹減ったから補食しに行くが、しっかり休んで体癒やしな…”
兄弟”。）」

俺は不敵な笑みを残し、岩場の方角へと走っていった
後には傷だらけで砂上に伏せる朱色の角竜だけ

「（ケッ…化け物めが。
貴様の攻撃痛すぎるんだよ。）」

角竜は一言ボヤくと、目を閉じて再び深い眠りについたのだった…

翌朝……

「（ふぅ～腹一杯だぜこのやろう…。
にしても、最近喰う量が多いな……そろそろハンターか何かに狙われそうだな。
ム？あの野郎、まだ寝てるのかよ。）」

朝日が昇ると共に、角竜のもとに戻ると、なんとも気持ち良さそうに寝ていた
近付いて叩き起こそうとしたが、悪戯する前に起きてしまった
警戒心の強いヤツだ…

角竜は寝ぼけ眼で起き上がったが、欠伸一つかいたら眠そうな様子が消えた

その後、角竜の朝食とやらに付き合わされる
角竜は飛竜の中では珍しく、草食のモンスターだ
砂漠での食料となると限られるが、角竜は乾燥に強いサボテンなどを食べる

鋭い針をモノともせず角竜に俺はヒヤヒヤするが、本当に何ともないみたいだ

それにしても、殺風景な砂漠だ…

俺が向かった岩場に草食獣はいたが、やはり肉食獣の姿は無い
前に訪れたことのあるゲネポスの巣にも足を運んだが、生物の痕跡は無く、地面には無数の白骨化した骸があった

ある意味、角竜は俺なんかよりも生態系を破壊しまくっている
肉食獣がいなければ草食獣は安泰だが、エサとなる植物は涸渇してしまう

この砂漠では食物連鎖の頂点である、肉食獣が存在していなかった

俺が深刻に考えていると、食事を終えた角竜が振り返ってきた
俺は考えるのを止めたが、角竜が口にしたのは俺が危惧していたこ

とに関わる話しだった…

「（さて…貴様に一つ頼みたいことがある。
一人でも出来るが、貴様も連れていきたいのでな。）」

「（まさか人間の村を襲うなんて言うなよ？）」

「（ワハハハハ！！心配するな！
人間の村など、とうの昔に全て壊滅させてやったわ！）」

冗談で言った俺に対し、角竜はとんでもないことを笑いながら告白する

「（お、おい…お前本当にそんなことを！？）」

「（我輩の領を何度も侵すから、ハンターごと村を滅ぼしてやった。
下郎共が泣き叫んで逃げ惑う姿は、正に圧巻であったな！

おっと、話しが逸れたな。

我輩が遠出していた時、身の程をわきまえぬ下郎が巣くいおった。
我輩と兄弟とで愚かな愚物を抹殺しようぞ。）」

人間を抹殺したことをサラッと流す角竜
少しの罪悪感も後悔もしない口振りに、俺は言いようもない不安に

駆られる

とんでもないヤツと兄弟分になったものだ…

「（モンスターの一匹、二匹くらいいいじゃないか。
それに…自然界では自分一人で生きてるわけじゃないんだし、上手く共生しないと。）」

「（兄弟…本気で言ってるのか？）」

角竜は意外といった感じで見つめ返してくる
当然だ、転生してきた俺には未だに人間としての知性があるのだから

「（人間らしい考え方だな…確かに共生していくことも大事かもしれん。
だが…そんなものはやりたいヤツが勝手にやればよいのだ。）」

兄弟から返ってきたのは、予想通り否定の応え

「（人間の営みはどうだか知らんが、は闘争に勝ち続けた猛者こそが絶対…それが我輩の持論だ。
我輩は力をもって外敵を駆除し、砂漠の支配を絶対的なものとしたのだ。
自然の営みなど知ったことか…我輩がいる限り害獣共にこの地は踏ませぬ！！）」

「（さすが、暴君と謳われるだけはあるが…兄弟は草食獣は追い払わないのか？）」

「（彼らは特別だ！！
彼らは孤児だった我輩を育ててくれたのだからな！
昨夜は特別許したが、彼らを標的とするなら兄弟であっても承知せぬぞ！）」

急に声を荒げてきた角竜を、俺は困惑しながらなだめる

なるほど、そういう過去があったのか…
自分を育ててくれた草食獣たちに恩返しをすべく、天敵である肉食獣を退けてきたとは…
それが本当だとするなら、まだこいつを見限るのも早いかもしれない…

「（それと群れる雑魚共を駆逐するのは気分が良いぞ！
逃げ惑う輩を追い詰めるあの感覚は素晴らしい！）」

訂正する…
やはりコイツはサディスト・バトルジャンキー・タイラントだ…

結局、あの後俺は砂漠に棲み着いた外敵とやらの討伐を強制された
腹が減るが、兄弟が草食獣を喰うことを許さないので、俺もソイツを喰うという名目で向かうことにした
どうでもいいが、コイツが草食獣を食べることを許可しないなら、砂漠に進出するのは不可能になる

俺たちは標的がいるという場所まで、雑談しながら向かっている
その中で俺の暮らす拠点の話しをしたら、えらく興味を持ってきた
どうやら、砂漠にある自分の縄張り以外では暴君っぷりは発揮しないようだ

こうやって話している分にはイイ奴なのだが、敵を見つけるとすぐに突進するから困ったものだ…

たった今、標的がいる場所に近付いたところで角竜が突っ走りだした

あとに続いていくと角竜は岩場に入っていった
岩場の奥にいたのは、轟竜だった

傍らには草食獣の子どもがいて、轟竜に襲われそうになってるとこ

ろだった

轟竜は突然現れた俺たちに注意が向き、そのスキに子どもは逃げていった

隣を見れば、草食獣を手に掛けられたからか、凄い殺気を放つ角竜がいる

「（下郎めが…一瞬で惨たらしく殺してやる！）」

『ガアァァァ！！』

突進した角竜に対して轟竜は大咆哮を放つが、角竜は無視して轟竜を吹き飛ばした

モンスターが空高く吹き飛ぶシュールな光景に、俺は愉快な気分になった

「（まだまだぁ！！
我輩の制裁はまだ終わっておらぬわぁ！！）」

怒れる角竜に吹き飛ばされ、踏み潰され、叩き潰される轟竜は、どんどんボロ雑巾のようになっていく

そんな微笑ましい光景の場所に、逃げたはずの子どもが戻ってきてしまった

轟竜はスキをついて抜け出し、子どもに襲いかかろうとしたが、そこは俺が阻止しておいた

「（でかしたぞ兄弟！！
この卑怯者めが、死に絶えろ！！）」

「（そうだそうだ！！
幼児虐待未遂で、お前は集団リンチの刑だ！！）」

『ギャアアアアア！！』

屈強な足を持つ二体に蹴られ、さすがの轟竜もあっという間に虫の息になった

轟竜が動かなくなっても暴行は続き、何度も叩きのめされて、最後は俺の腹にしっかりとおさめられた

後には、角竜と恐暴竜の大きな大きな雄叫びが砂漠に響き渡ったという…

第二十四話：義兄弟の誓い（後書き）

ディアブロス：希少種？
通称：片角の暴君

砂漠に広範囲な縄張りを持つ、朱色の甲殻を持つ角竜の突然変異種

主人公にも匹敵する実力を持ち、主人公並みにしぶとい
脳筋と言われると激しく怒る
その通りで、頭はかなり残念なヤツ

強者至上主義なために、弱い存在には興味を示さず、どうでもいいと思っている
ただし、草食獣は命を懸けて守護するダークヒーロー

この角竜のモチーフは、もちろん片角のマオウ

戦闘時の性格は、聖帝サウ〇ーみたいになります（笑）

さて…

この後の展開で少し悩んでいます

あと一体恐暴竜を登場させるのですが…

ソイツを主人公の実の妹としてか、ちゃんとした嫁として出すか迷ってます…

どっちの方がよろしいでしょうか？

感想、お待ちしております

第二十五話：リア充してんじゃねぇぞテメェ！！（前書き）

タイトル通りです…

第二十五話：リア充してんじゃねぇぞテメェ！！

モグモグ…ムシャムシャ

「（どうでもいいが兄弟……貴様はいつまで喰っておるのだ？）」

「（喰い終わるまで…ハムハム。）」

「（それはそうだろうが…まぁいいか。）」

不届き者の轟竜を二人でボコボコにしたあげく、それをうまそうに喰っている俺

人間社会だったら、猟奇的殺人事件で捜査されるくらい、轟竜の亡骸は酷かった

ちなみに今、轟竜をくわえながら砂漠を移動している

いつもならサッサと喰うが、兄弟が草食獣の捕食を認めないので、こうやって少しずつ喰っているのだ

どうでもいいけど、轟竜の肉美味いな…

俺たちがどこに向かっているかというと、角竜の寝床だ
理由は、義兄弟となった俺を信頼して寝床とある者を見せたいとのこと

乱暴者だが、ここまで俺を信頼してくれるのなら、俺も家に招待しなければならない…

移動している最中、ふと砂漠に似つかわしくない光景が見え、俺はそれに視線を向けた

「（兄弟…あれはもしかして？）」

「（あぁ…我輩が滅ぼした村だな。
勘違いするな…人間が先に手を出した。
やられたらやり返す、人間の自業自得だ。）」

コイツなら、肩ぶつかっただけでも因縁つけてきそうだ
それにしても、この廃村は土台がある以外、村だった面影はない
角竜が襲撃してきたことを想像すると、俺は恐ろしさに身震いした

俺たちが砂漠を移動して数時間経つ
いいかげん移動に飽きてきたところで、角竜は岩場の方に入っていった

入っていった先には、湧き水が溜まって出来た小さな湖があり、そこにはたくさんの草食獣がいた
草食獣は俺たちを見ても逃げなく、のんびりと散歩などをしている

角竜に守られているおかげで、ずいぶんと警戒心が無くなったらしい
やろうと思えば、この場の全ての草食獣を仕留められるくらいだ

「（これだけいると、肉食獣も頻繁にやって来るだろう？）」

「（あぁ…だが不届き者共は我輩によって砂漠の塵と化す。）」

「（納得だ……そうだ。
肉食獣を殺すだけなら、死体はとっといてくれよ。
飛竜はなかなか美味いからさ。）」

「（構わんが…あまり長くは置いておけぬぞ？）」

これで砂漠における食料調達は、いささか楽になる
他人が倒した生物を喰うのは少し悪いかもしれないが、ライオンやハイエナも普通にやってると聞く

ただしハイエナのように腐肉食ではないので、腐った肉は遠慮する
雑談をしていると、角竜は岩場にあるほら穴の前で立ち止まった
穴は俺でも入れる大きさで、中はよく見えないがけっこう広く感じられる

ほら穴の奥には何かがいるらしく、足音が聞こえてくる
足音の大きさからして、草食獣などではない
俺はくわえていた轟竜を地面に置き、角竜に尋ねてみる

「（奥には何がいるんだ？
この足音からして、大型の生き物だろう？）」

「（ふむ…家内だ。）」

「（いやそうじゃなくて……って、なんだと？）」

俺が情けない声を出すと、角竜は意味が分からなく首を傾げる

「（だから我輩の家内だ。
別の言い方なら、妻もしくは嫁だ。）」

「（なにぃーー！？）」

俺が大声を出して叫ぶと、ほら穴の奥からガタッと音がした
角竜は俺に静かにするよう戒める

「（大声を出すな…家内は体調が優れないのだ。）」

「（うっ…すまん。）」

俺が素直に謝ると、角竜はほら穴へと俺を招いた

ほら穴の奥にいたのは、もう一匹の角竜
体の大きさは兄弟を二回り小さくした感じで、体の色は黒…亜種だ

「（お帰りなさい、あなた。
さっきの大声は……あの…そちらの方は？）」

雌の角竜は俺を見て、少し怯えたような声で尋ねる
恐暴竜を初めて見れば誰だって怯えるが、怖がられるとへこむ…

「（我輩の義兄弟だ。
心配するな…強面だが根はいいヤツだ。）」

角竜がそう説明すると、雌の角竜は警戒心を解いた
よほどコイツを信頼しているのだろう…

「（あの…はじめまして、私はこの方の妻です。
主人の御兄弟に対し、失礼なことを…。）」

「（い、いえいえ…お気になさらずに。）」

ぺこりと頭を下げてきた角竜の嫁さんに、俺は慌てふためく
とりあえず頭を上げさせると、嫁さんは首を傾げて見てきた

なにこの子…メッチャ可愛らしいやん！
兄弟には勿体ないくらいよく出来た子じゃないか！！

と思ったが、他人の嫁に手を出すゲスじゃないし、まず兄弟がおっ
かなくてやれるか！！

「（無理はするな、しっかり休んでおけ…。
そういうことで、兄弟とは仲良くやってくれ。）」

「（はい……主人に仕える愚妻でございますが、どうぞよろしくお
願いします。）」

「（えっと…こちらこそ、よろしくです。）」
俺が挨拶を終えると、嫁さんと視線が合う
困惑している俺に対し、嫁さんはニコッと微笑む

めっちゃ良い子じゃねえか！
兄弟の嫁さんじゃなかったら、確実にお持ち帰りしてたわ！

俺は意味不明な言葉を叫びながらほら穴を飛び出し、目の前の湖に飛び込んでいった…

「（暖まったか？）」

「（だいぶな…もう一つくれ。）」

飛び込んでいった湖の水は、かなり冷たかった
実際はさほど冷たくないのだろうが、砂漠の気候になれた俺にはかなり冷たく感じた

今は兄弟に看病され、体を温めるためトウガラシをかじっている

「（それにしても、良く出来た嫁さんじゃないか。
お前には勿体ないくらいだ。）」

「（自慢の家内だ。
兄弟…手を出しやがったら殺すぞ？）」

「（おいおい、他人の嫁に手を出す鬼畜じゃないぞ俺は。）」

「（どうだかな。）」

兄弟は俺をどんなヤツだと思ってるのだろうか？
ど突いてやろうかと思ったが、トウガラシを取り上げられたので謝罪した

「（黒い角竜か…亜種の娘にしては、やたら大人しかったな。）」

「（知らないのか？
角竜のおなごは繁殖期が近付くと、ああいうふうに変色するのだ。）
」

「（ソイツは初耳だな…。

カプコンめ…追加要素でもいれたのか？）」

「（かぷこん？なんだそれは？
強いのか？）」

「（いやいやこっちの話し！）」

危ない危ない…あやうくメタ発言？的なことを言いそうだったぞ
あれ？なんかこんがらがってきたぞ？

兄弟が何コイツ？みたいな目で見てきたので、残りの質問を聞いた

「（ふむ…確かに変色した角竜は凶暴性が増すが…。
家内は元々体が弱くてな、普段も変色後もさほど変化はないのだ。）
」

話しによると嫁さんと出会った時、嫁さんはハンターに追われていたそうだ
体が弱い嫁さんはいい獲物だったらしく、たまたま通りかかった兄弟がいなかったら、確実に死んでいたらしい
どうやら肉食獣を追い払ったのも、人間の村を破壊したのも、実は嫁さんのためでもあったらし

それからなんやかんやあって、今の仲睦まじい夫婦となったようだ

「（とりあえず言わせろ…このリア充野郎。）」

「（りあじゅう？貴様はさっきから何を分けのわからんことを言っておるのだ？）」

「（うるさいうるさい！
なんだその…よく出来た出会いはコノヤロウ！チクショウ……俺だってなぁ、俺にだってマリナがいるんだバカ野郎！
お前なんて死んでしまえ！）」

泣きじゃくって騒ぎ出す俺を、兄弟はポカーンと見つめる
やがて何かひらめいたらしく、俺の腹下に角を突っ込み…
冷たく寒い湖へと放り込んだ…

「（落ち着いたか？）」

「（おかげ様で…。
トウガラシくれ。）」

第二十五話：リア充してんじゃねぇぞテメェ！！（後書き）

アンケート調査ご協力ありがとうございます！

新たに登場する恐暴竜を、
嫁にするか…
妹にするか…

今のところ、ほぼ互角であります

新しい恐暴竜が出るのはもう少し先ですが、読者様の希望をお聞かせ下さい！

とある夢のお話し…

兄弟分の仲睦まじい夫婦愛を見せられた俺は、それこそ廃人のようになって住処へと帰宅…
俺に構ってもらいたい奇面族を押しのけ、俺はさっさと横になって寝る

角竜との激戦で疲労していた俺は、目を閉じるなり意識が薄れていった……

…き…かい…

どこか聞き覚えのある声がする
ずいぶん懐かしい声だ…
起こさないでくれ、疲れてるんだ……

「サッサと起きんかいボケ！」
「（ギャアッ！？）」

鼻先にとてつもない衝撃をくらい、俺は一気に眠りの底から引きず

り出される
敵襲かと思って周囲を見回してみると、おかしな事象に気付く
自分はさっきまで岩壁に囲まれた洞窟で寝ていたはず…
なのに、今はどこまでも続く白い空間に俺が一人ポツンといる

「やっと起きたかい。
ったく、オドレみたいな寝相悪いヤツは初めてみたわ。」
「（あ！テメェは！？）」

なんとそこにいたのは、不手際で俺を事故死させ恐暴竜に転生させた偽神さまだった

「（テメェ今更ノコノコと何しに来やがった！
ってか、モンスターによくも転生させやがったな！
おかげでキリンちゃんとの野望が挫折寸前なんだぞ！）」

「（えぇい、やかましい！
オドレみたいなボンクラには元から無理や！
あんま文句ぬかすと寿命縮ますぞボケ！」

今までの鬱憤を吐き出すかのように、俺は神さまに文句を吐いたが、
神さまに怒鳴り返され縮こまる

「ほいで、どうや？

第二の人生っちゅうもんは？
見た限り、青春を謳歌しとるみたいやないか。」
「（いやそれは『なんやと？ウチがやった命じゃ満足やないんか？』
―はい、とても満足しとります…。）」
ハッ、弱いな俺…

「（それで、神さまが今更俺になんの用ですか？）」
「久しぶりやってのに、たいそうな挨拶やな。
まあええわ……最近時間出来たからワレを見とったんやけど、ワレ
随分暇なことしとるやないか。
いつからワレは猫の警備員になったんや？
強面のワレが猫守ってんのおもろ過ぎて、爆笑しながら眺めてたわ。
」

「（なんだっていいだろ。
あれで結構気に入ってんだからよ…。）」

俺が少し怒り気味に答えると、神さまは笑いながら俺の頭をペシペ
シ叩く
「そう怒んなや！
角竜シバいた時の自分、ウチから見てもかっこよかったで！」
「（へッ…歯が浮くようなことを言いやがって。
そういや、俺なかなか強くならなくない？）」

俺はここ最近感じていた素朴な疑問を投げかけてみた
転生前に神さまから力をいただいたわけだが、イマイチ強くなってる気がしないのだ…

「あぁそれな…うん。
チッとミスったみたいなんやわ。」

神さまの脳天気な返答に、俺は転げそうになる

「いやな、全く力が無いわけやないんやで？
ふざけてたらおかしゅうなって、所謂大器晩成型になったんや。
強くなるには時間かかるんやけど、限界もこれまたミスってな……
つまり成長限界が無いんやわ。」

「（おいおいそれって…。）」

「うん…長く生きれば生きる程、ワレは無敵と化すわな。」

頭を掻いて照れる神さま
俺は呆然として空を見上げる…この空間に空など無いが…

「って、ウチが話しに来たんはんな下らんこととちゃうわ。」

コイツ…俺にかけたミスを下らんことで流しやがった

とんだ神さまだな…

「ちょっと向こうの世界にある”樹海”を探索して欲しいんや。
まぁ調査やな…エリア見て回って、何か異常と思うもん探してくれへんか？」

俺がワケが分からないといった表情を浮かべると、神さまはムッとする

「言っとくがな…ウチも暇持て余してるわけやないんやで？
ウチはワレがいる世界を管轄しとるんやから、色々微調整が大変なんや。
ま…覗くだけで滅多にいじくらんけどな。」

つまり、暇なわけだ…

「（で？そのお忙しい神さまが、どうして俺を使って調査するんだ？）」

「自分のいる世界を管轄するウチやけど、実際に地に足つけては見れへんのや。
そいでな、自分に樹海言って何かないか見てほしいわけや。」

「別にいいけど…そこに何が『あら時間切れや、ここでお別れや』
―えっそうなの？」

見れば、俺の体がどんどん薄れていく

消えていく体に焦ったが、夢から醒めるだけという神さまの言葉に安心する

神さまは笑顔で手を振る
最後に思い出したように叫んでいたが、薄れていく意識の俺には何も聞こえなかった

「一つ言い忘れてたわ！
自分のいる世界にはウチの力でも手に負えない奴おるから気ぃ付けたってな！
特に…黒い古龍に手を出したらアカンで！！

って…いなくなってもうた。
ま…たぶん大丈夫やろな。
さ…ゲーセンでも行こうっと。」

とある夢のお話し…（後書き）

胃が痛い……

嫁か妹か…一体どちらに？

小説関係ありませんが、
三連休中に親戚の子どもがやって来ました
６つ上と４つ上のおっかない兄二人いるんですが、下に弟や妹がいない私にはその子が可愛くてたまりません

そして三連休中に起きた出来事です

家で親戚のお姉ちゃんとトークしてたら、突然後ろから抱きつかれたんです

可愛い妹分だなぁと思ってたんですが、どうも風呂上がりみたいです…
それも生まれた時の姿です…

お姉ちゃんはニヤニヤしてたんですが、妹分で年下な子に抱きつかれたら……どうしたらいいのでしょう？

別に女の子に抱きつかれても何も思いませんが、何かしらの反応をすべきでした…

余談ですが、妹分の髪がとても艶々してるんですよね……
うらやましいです

第二十六話：ニューフロンティア　その弐（前書き）

新キャラ登場です

なかなか立派なモンスターですけど、弱いです

第二十六話：ニューフロンティア　その弐

モモ　ｓｉｄｅ

ニャ…帰ってきたらオイラの部屋の前で旦那さんが寝てたのニャ
どうでもいいけど、邪魔なのニャ

こういう時は、オイラの特性対巨龍爆弾を顔面にセットニャ
さぁ、導火線に火をつけるニャ！！

「（おいコラ…何してやがんだテメェ？）」

今日の運勢は最悪だニャ

モモ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

全く油断もスキもない相棒だ
曰く、部屋の前にいて邪魔だから起こしてあげようとしたニャ…だ
俺は相棒のそんな弁論を無視し、捕まえてコテンパに懲らしめてやった
後でモモの特性対巨龍爆弾を安全な位置で試してみたが、相棒は俺

を殺す気だったのだろうか？
そんなわけで、モモには責任をとって俺の野暮用に付き合ってもらう

俺たちは、夢の御告げを受けて密林の奥にある”樹海”へと向かっていった…

「ところで旦那さん、その樹海とやらには何をしに行くニャ？」

モモはいつも通り、俺の背で昼寝をしている

「（さぁな…行けば何かしらあんだろ。）」

先ほどから襲い来るランゴスタをかわしながら、俺はぶっきらぼうに答える
そんな投げやりな返答にも、モモはなれているので頷いて昼寝を再開する

生い茂る草木を掻き分けていくと、突如強い風を肌に感じる

高台から見据える先には、樹海の象徴である巨大な枯木がそびえ立っていた

「ニャ～、なかなか良い場所なのニャ。
密林みたいだけど、こっちの方がジメジメしてなくて良いニャ。」
モモはクンクンと鼻を動かしながら、周囲を見渡している
密林の湿気はモモにとって不快だったが、この樹海はどうやら気に入ったみたいだ

「旦那さん、向こうに橙色のやかましそうなヤツがいるニャ！」

「（どれどれ、美味そうか？）」

モンスター発見＝捕食…もう俺には当たり前のことになってきた

本日俺とモモが見つけたのは、橙色の見事な羽根を持った鳥竜種…
眠鳥だ
小型の鳥竜種は肉が少なくてお世辞にも美味いとはいえなかったが、
怪鳥や彩鳥はとても美味だった
ならば、この眠鳥もなかなか美味いはず…と考えつつも、結論付け
を待たずに突っ走っていた

「（この阿保鳥がぁ！！
俺の腹におさめてやる！）」

「ギャッ！？」

名乗りを上げるのが早すぎた…

俺の存在に気付いた眠鳥はかなり驚いていたが、距離があるうちに飛び去っていく
眠鳥がいた場所に付く頃には、すでに空の彼方に消えていた…

「旦那さん…狩り下手ニャ。」

「（調子に乗りすぎた…。）」

モモに白々しく見られ、俺は空腹と情けなさに肩を落とす
…と、その時俺たちの前の草むらから二体の獣が現れる

一体はピンと立った耳と長い角を持ち、もう片方は垂れた耳を持つ可愛いケルビだ

ケルビのつがいと俺はほぼ同時に目が合う

「「……プルプル」」
「……グウゥゥ…」

蛇に睨まれた蛙のように動けず、目を丸くして体を震わすケルビのつがい
空腹の音を隠そうともせず、涎を垂らして目を輝かせる俺…
よほどのバカでもない限り、どっちが襲われようとしているか分かるはずだ…

口を徐々に開いていき哀れなケルビを仕留めようとした時、ケルビの背後に二つの赤い残光と共に、黒い大きな影が落下してきた
俺が突然のことに混乱すると、そのスキにケルビたちは逃げ去る
俺と現れた影は逃げた獲物を目で追ったが、目の前にいる存在を思い出して視線を元に戻す

暗がりの奥には赤く光る眼光があり、その姿をさらけ出してくる
全身は哺乳類のような黒い毛皮に覆われ、獰猛そうな目つきをしている

俺は獲物を逃がしてしまった怒りよりも、マトモに戦える相手の出現に歓喜した
この前の角竜との死闘以降、俺は好戦的になってる気がする…

「（ナルガか…草食獣のつがいを襲おうだなんて、なんて意地汚いヤツだ。
夫婦の仲を引き裂くのを、何とも思わねえヤツは俺が喰ってやる！）」

「ニャ！？旦那さんさっき喰おうとしてたニャ！
それにしたり顔だけど、言ってること滅茶苦茶なのニャ！）」
「（細かいこと気にすんな！
というわけで…死ねや！）」

挨拶もそこそこに、凶悪な牙が並ぶ口を大きく開き不届き者に食らいつく
しかし迅竜はそれを横に素早く跳んでかわす

その際俺の体がブレード状の翼に斬られる
もっとも、歴戦の強者である俺には深手でなく、傷もかすり傷程度
深いため息をこぼし、俺はゆっくりと迅竜に振り返る

牙を剥き出しにして唾液を垂らす俺の姿が悪魔のようにでも見えたのだろう…
迅竜は恐怖に怯えながらも、毛を逆立てて精一杯威嚇している

野生のモンスター同士…怯えたりかなわないと思ったら確実に負ける
野生にはそういった勘のようなものがあり、俺にもある…
その点において、この迅竜は失格だ…

これならまだ、先ほど実力の差を瞬時に察知して逃げた眠鳥の方が賢い

興醒めした俺は息を吸い込み、大きな咆哮をあげる
案の定、迅竜は大きな声に驚いてたじろぐ

できたスキを見逃さず、俺は前動作無しに接近し、迅竜に食らいつく
ただ噛み付いた場所が翼だったので、斬られる前に投げ飛ばす
それでも片翼にはしっかりダメージが残り、迅竜は投げつけられた先で悶えている

俺は迅竜に近付いていき、迅竜の両翼を足で踏みつける
飛竜自慢の翼を封じ無防備な背面に強力なブレスを浴びせる……俺の常套手段であり、最高の一撃

この状態になればいくら力強い飛竜でも逃れられない
この迅竜も例外でなく、必死に逃げようとするが、俺の屈強な足と鉤爪によって徒労となる

獲物はなぶらず、至高の一撃をもって抹殺…
俺は息を吸い込み、最強のブレスを吐く動作に移ろうとしていた…

それにしても、コイツはよく頑張るヤツだ…
結局は無意味なのに…

そう思った時だった…

「（ご、ごめんなさい！
二度としないから、命だけは助けて！！）」

「ニャっ！？喋ったニャ！」

なんと、迅竜が甲高い声で命乞いをしてきた
よく暴れるとは思っていたが、命乞いをまでするとは予想外だった…

「（もうしないから、許して下さい！
まだ死にたくありません！）」

「（命乞いか？なら手短にしてくれよ。
腹が減ってんだから。）」

強者と認識した迅竜に命乞いという情けない姿を晒され、俺はかなり失望していた
もはや迅竜をただの餌としか見ていない俺は、苛立ちから押さえる足の力を強める

迅竜の苦悶の表情と叫びを聞いていて、少し違和感を覚える俺…

殺すのはもう少し先にし、俺は迅竜の両翼を踏むのを止める
ただ逃げられても面倒なので、背中を片足で踏みつけている
激痛から解放された迅竜だったが、未だに残る痛みと恐怖に嗚咽する

「（ケッ…モンスターが泣くなんて、信じられないな。
お前本当に飛竜か？）」

俺の情け容赦ない言葉に、迅竜はすすり泣く声をさらに大きくする

「（だ、だって…怖がったんだもん…。
それに…異性にあんなことされたの……初めてだし…。）」

「（勘違いされるようなこと言ってんじゃねぇ……って、なに？）」

俺は浮かんだ疑問に戸惑い、いつの間にか地面に降りたモモと目を合わす
モモも俺と同じ疑問を思ったのか、頷いて迅竜の下腹部に潜っていった…

その際、迅竜がピクッと反応したが無視

「だ、旦那さん大変ニャ！
この黒猫みたいなヤツ、女の子なのニャ！！」

モモが体を震わせながら報告してきた
迅竜は羞恥心に前脚で顔を隠している

「（ああそう…ま、食い物に雄雌関係ねぇな。）」

「（ま、待って下さい！
アナタは戦闘する意の無い乙女を無情に喰うんですか！？）」

「（知らねえよ。
今まで喰ってきたモスやランポスにも雌がいたかもしれねぇんだ。
今更雌だからって喰うの避けちゃ、今まで喰ってきたヤツらに失礼ってもんだろが。）」

弁明を退けられた迅竜は、他にも命乞いの話しをするが、どれも筋のない迅竜にだけ利のある話しだ
俺はそこまでお人好しじゃないし、腹が減ってイラついている

「（じゃ、じゃあ…私以外に食べるものがあったら助けてくれますか？）」

「（まだ自分の立場が分かってないみたいだな……だが、少しの情けはかけてやる。
モモ……あれを出せ。）」

俺の目配せを受けたモモは、了解したと敬礼する
モモは持ち前の四次元ポーチを漁り、ポーチに入ってるとは思えない首輪つきの鎖を引っ張り出した

それを迅竜のもとまで持っていき、迅竜の首にはめた

モモがはめたところで背中を踏むのを止め、鎖を俺の片足につけてもらう

「（あの…これは何ですか？）」

迅竜は困ったような表情をし、首輪を前脚で撫でている

「（お前が逃げ出すとも限らん。
逃げないように拘束するものだ……言っとくが、俺の脚力はお前ごときではかなわんぞ。

首輪はキツいか？
キツすぎて死んだらたまったもんじゃない。）」
「（いえ…ちょうどいいです。
それに……なんか…変な気分になります。）」

首輪をつけられた瞬間、迅竜は妙にしおらしくなってしまう
気にしたら負けなので、俺とモモは無視する

「（ほら、お前の命乞いを聞いてやったんだ。
サッサと案内しろ、黒猫。）」

「（は、はい……あの、黒猫って何ですか？）」

「（あぁ？モモがさっきお前をそう呼んだからだ。
不満か？）」

「（いえ……ちょっと驚いただけです。）」

黒猫こと迅竜は俯いてしまったので、俺は適当に相づちを打って移動する

黒猫（迅竜）ｓｉｄｅ

ケルビさんと遊びに来たら、見たこともない怖いモンスターさんに遭遇し、捕まってしまいました…

モンスターさんは私を喰いたいらしく、牙を剥き出しにして押し倒してきました

男性に触られたのは初めてです……でも、死にたくないので命乞いしました

何回か命乞いしたら聞いて下さいましたけど……これはなんでしょう？

メラルーさんに聞いたら首輪というものらしいですけど……なんだか妙に馴染みます

鎖で繋がれて自由に身動き出来ませんけど、不思議な気分です…

約束通り餌場に案内しますけど、私は助かるのでしょうか？

あ……

そういえば前にお母様から人間のことを聞きました

なにやら女性は目上の殿方にご主人様とおっしゃるみたいですが…

私もあの方をそう呼んだら助かるでしょうか？

時間があったら試してみますか…

第二十六話：ニューフロンティア　その弐（後書き）

黒猫というのは、私が勝手に迅竜を呼んでいたあだ名です

これからも、こういった具合で名付けするかもです

ちなみにこの黒猫さんは、

健気な女の子
ペット
ドジっ娘
Mっ娘

を混ぜたようなキャラです

主人公の拠点には連れて行きませんが、主人公とモモの良いペットになるでしょう（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9674v/

生まれ変わって恐暴竜？

2011年10月12日16時38分発行